

---

# その先にあるもの

葵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

その先にあるもの

### 【Nコード】

N7212L

### 【作者名】

葵

### 【あらすじ】

能力者と呼ばれる人々は、箱庭と呼ばれる都市に閉じ込められ、国に管理されている。

その箱庭の中、暗い過去を持つ少年がいた。

彼は過去が原因で心を閉ざしていたが、ある転入生の少女との出会いをきっかけに、徐々に心を開き始める。

それを境に巻き起こる戦い。

次第に少年は、今まで隠して来た絶大なる本来の力を発揮していく。様々な思惑が交錯し、次第に真実は明かされて行く。

その時、彼らは何を想い、何を成すのか。そしてその先に何を見るのか。

主人公と仲間が紡ぐ、愛と友情のバトルファンタジー！

## プロローグ

「はあっ、はあっ」

月の光も届かない、深い森の中を少年は少女の手を引き、何かに追われるかの様に走っていた。

「頑張れ！もう少しだ！」

少年は疲労の色を浮かべる少女に励ますように声をかける。

「うんっ」

少女は齒を食いしばり、少年の後ろを走り続ける。

どのくらい走り続けだろうか。森を抜け、小高い丘の上で2人は肩で息をしながら、佇んでいた。

「なんで……、どうしてこんなことに……」

酷く悲しそうな表情で少女が見つめる先には、真っ赤に燃え上がり、黒煙を上げる村がある。

「……皆は、無事なのかな？」

少年に問い掛ける。

「っ、きつと、きつと大丈夫さ！」

押し寄せる感情を、ぐつと堪えながら、少女を不安にさせないように力強く答える。

だが、少年は知っていた。自分達を逃がす為に、皆が犠牲になったことを。

両親が2人を逃がした直後、村の皆が集まっている場所を中心に、大気を震わせるような轟音と共に、大きな爆発があったこと。

振り返った時に見てしまったのだ。

そして、それまで強くあった、皆の魔力の反応が消えるのを感じ

てしまった。

「行こう。もっと遠くに逃げるんだ」

泣き出したくなる感情を殺し、少女に言う。

少女が返事をしようと瞬間

「いたぞ！あそこだ！」

怒鳴り声と共に、複数の足音が聴こえてきた。

「っ、こつちだ！早く！」

少年は少女の手を引き走り出す。

だが、所詮は子供。すぐに追い付かれ、囲まれる。

「つたく、手間取らせやがって」

追っ手の一人が口を開く。

「子供を手に掛けるのは気が引けるが、……死んでくれ」

その言葉を聴き、少年は焦りの表情を強くする。

しかし焦ったところで周りは完全に囲まれて、逃げ場はない。もうだめなのかと、死を覚悟したとき

「、」

不意に少女の呟く様な声が聴こえた。

追っ手が反応するよりも早く、少年の足元に魔法陣の様な物が浮かび上がる。

「これはっ、ちょっと待て！何を！」

少年は焦りと共に声を荒げる。それは転移の魔法陣だったからだ。

「ごめんね。私の力じゃ、1人しか送れないから……」

少女はそう言って少年に手をかざす。

「早く殺せ！こいつ、転移するつもりだぞ！」

追っ手の1人が焦った様に怒鳴り、全員が2人に迫る。

だが、それよりも早く魔法陣が発動し、少年の周りが歪みだす。

「待てよ！お前は どうするんだよ！」

少年は声を荒げて少女に言う。

そう、1人しか送れない。少女は確かにそう言った。そして少女は少年を転移させようとしている。ならば少女はどうなるか……逃げない。

少女は少年を逃がす為に犠牲になろうとしてるのだ。

「ごめんね。こうする意外に思い付かなくて。

私は、ずっと傍にいるから……、だから 生きて」

今にも泣きそうな表情で、それでも微笑みながら少女は言う。

「なんで……、なんで俺を……」

少年は涙を流しながら少女に言う。少年としては自分ではなく、少女に生きて欲しかったのだ。

そして

「大好きだよ」

少女が笑顔で言う。

「っ  
」

少年が何かを言うよりも早く、視界が別の場所になり、そのまま意識を失った。

## プロローグ（後書き）

はじめまして。

これが処女作です。

なので感想、ご指摘、お待ちしております！

それでは拙い文章ですが、よろしくお願いします。



## 第1話 邂逅

ピピッピピッ

目覚まし時計の耳障りな音が鳴り響く。

「ん」

ベッドから降り、カーテンを開け、外を見ながら呟く。

「あの時の夢を見るのは久々だな。

あれから、もう6年か……、なんで俺だけ……」

とても悲しそうな表情で、暗い瞳でどこか遠くを眺め続ける。

どのくらい、外眺めていただろうか。

ふと、口を開く。

「俺は……生きるよ。お前の最後の願いだから……」。

けど、お前を失った世界で何を支えにすれば……

なあ、雪華……」

あの時、護ることの出来なかった、幼いながらも愛した少女に、もういない少女に問い掛ける。

「さて、準備するか！」

暗い気分を無理矢理切り替えるように言う。

「今日から2年生か。さすがに初日から遅刻はマズイよな」  
そう言いながら、手際よく準備していく。

「8時か、少し早いけど行くかな」  
そう言って家を出る。学校は家から歩いて15分程度の場所にある。登校時間は8時45分なので、確かに少し早いだろう。

特に何も考えずに、いつもの道を歩いていく。商店街を抜け、大きな建物が見えて来る。

それが彼の通う高校、桜ヶ丘高校だ。  
校門をくぐり、校舎まで進んでいく。

「うっわー、人多過ぎだろ」

愚痴をこぼす。校舎の前は学校の生徒でこった返していた。  
それもそのはず。校舎の前に新しいクラスが張り出されているからだ。

「俺のクラスは……、B組か」  
人垣を掻き分けクラスを確認する。

「さっ、行くか」

教室に行こうと歩きだすと後ろから

「おーい！康介！」

と、声が聴こえ、振り返る。「なんだ、翔太か」

声をかけて来たのは、尾崎翔太。人付き合いの苦手な康介に、何かと声をかけてくる同級生だ。

「なんだとはご挨拶だな」  
むっとしたように言う。

「あーはいはい」

康介は適当な返事をして流す。

「まったく、相変わらず素っ気ないな。お前、俺以外に友達いるのかよ」

少し呆れた様に問い掛ける。

「いないな。ってかいつの間に俺とお前は友達になっただんだ？」  
ため息をつきながら問い掛ける。

「いつの間にか……かな！」

眩しいくらいの笑顔で言い切る。

「はぁ……」

康介はどこか呆れた様に、ため息を漏らす。

しかし、誰に対しても素っ気ない態度を取る彼だが、翔太の事は嫌いではなかった。

むしろ好ましい部類に入っているのではないだろうか。

しかし、そのことは表に出さずに、素っ気ない表情を保つ。

「呆れられた!？」

翔太はわざとらしい、大きなリアクションでため息に反応する。

「俺なんかに構うなんて、お前も物好きだな」

微笑しながら言う。

「そうか？俺は康介の事好きだけだな！

っと、そろそろ時間だな。康介もB組だろ？一緒に行こうぜ！」  
につ、と白い歯を見せて笑いかける。

「同じクラスかよ……。まあいい、行くか」

苦笑しながら返事をして歩きだす。

教室に着くと、2人はそれぞれの席に着く。

康介は1人でボーツとしているのに対し、翔太の周りには人が集まり談笑している。

「相変わらずの人気だな……」

そんな翔太を横目に見ながらボソツと呟く。

そう、翔太は皆から人気があるのだ。人当たりの良い性格、少し長めの髪、二重でキリツとした目、通った鼻筋。俗に言うイケメンだ。

人気がない訳がない。

康介もそれに劣らないくらいの顔立ちなのだが、少しキツめの目元と、取っ付きづらい性格も手伝って、話し掛けてくる人は、ほとんどいない。

「暇だな……」

そんな事を考えているとき

「ほら、席着けー！」

ガラツと、扉の開く音と共に教師が入って来た。

「俺が担任の進藤だ！1年間よろしくな！」

そう自己紹介をしたのは、体育会系の暑苦しい男教師。

正直、声が大きくて煩い。

そんな事を康介が考えていると

「おいっ！そのもみあげピアス！聞いてんのか！」

担任が声を張る。もみあげピアス……十中八九、康介の事だろう。長いもみあげに、少し多い位に空けているピアス。そんなあだ名で呼ばれるのも無理はない。

そんな康介を見て、周りはクスクスと笑う。  
が、康介と目が合うと、直ぐに目を逸らす。

クラスの雰囲気が悪くなりかけたとき

「そっぴや良い知らせがあるぞー！転入生が来る！  
入って来い！」

そう担任が言う。

わっ、とクラスのテンションが上がり、呼ばれた転入生が入って来る。

「っ！！」

それまで興味なさそうにしていた康介だが、転入生を見た瞬間、目を見開き、声を失う。

「わあああ！！」

そんな康介とは対象的にクラスの、特に男性陣が歓声を上げる。

入って来た転入生は、女の子だった。腰まで伸ばした栗色の髪、パツチリと大きな目、筋の通った鼻、みずみずしい唇。所謂、美少女だったからだ。

康介は、そんな転入生から目が離せなくなった。

似てる。

いや、似てるなんて物じゃない。瓜二つだ。

まさか、生きてたのか？

いや、そんなはずはない。あの状況で生き残れるはずがない。けど、あの容姿は……

雪華、お前なのか？

康介は頭では違うと否定しながらも、心のどこかで期待してしま  
う。

かつて、護る事の出来なかった少女なのではないかと。

そんな複雑な感情が渦巻く中、転入生を凝視していると、視線に  
気付いた転入生が康介にウィンクをする。

心臓の鼓動が早まる。

本当に似てる。

そんな康介をよそ目に、転入生が自己紹介を始める。

「氷上彩華です。

最近、能力に目覚めてこの都市に来ました。  
能力についてなど、分からない事も多いので、色々教えて頂く事  
もあるでしょうが、これからよろしくお願いします。」  
ふわっ、とした笑顔と共に言う。

「そつだよな……。違つよな」

康介は俯き、誰にも聴こえないような声で呟く。

なに期待してるんだか……

そんなことを想いながら。

康介が思考の渦に吞まれている間に、授業が始まったのか、担任の良く通る声が教室に響く。

「さて、今日は転入生も居ることだし、能力学は基礎の復習からやるぞー！」

能力学……能力者が集まる箱庭      都市内の学校でのみ行われる授業。

「まず、能力は1人に1つ。

殆どの能力者は幼い頃に目覚めるが、稀にある程度成長してから目覚める者もいる。

能力に目覚めた者は基本的には、このような、俗に言う箱庭都市に送られ国に管理される。

能力者は基本的に箱庭都市から出ることは出来ない。例外として、学園の実習や卒業後に国に仕える軍属となれば、都市外での生活ができる。

まあ、軍属になると人間兵器として扱われるがな。

後は…、ランクだな。能力者はその能力の強弱により、S～Eのランクが付けられる」

ここまで担任が説明したところでチャイムなる。

「ああ、あと明日はランク付けの能力測定があるから皆頑張れよ！」  
元氣良く言い、教室から出て行く。

その間、康介は授業など聴こえないかの様に上の空だった。

休み時間になっても、康介は動かずに、ボーツとしていた。  
するとそこに翔太が声をかけてきた。

「康介、康介！」

はっ、と我に帰り返事をかえす。

「あ、翔太か…、なんか用？」

いつも通り素っ気なく返す。

「あの転入生スゲー美少女じゃん！仲良くなりたいな！」

お前もあの子の事、ずっと見てたしな！」

ハイテンションで康介に話し掛ける。

「……別に、興味ない」

見られてたのか、と内心舌打ちしながら答える。

そこに、転入生 氷上彩華が近寄り、2人に声をかけてきた。

「はじめまして！これからよろしくね！」

おしとやかな雰囲気とは裏腹に活発な口調で挨拶する。

「……ああ」

「こっちこそよろしく！分からない事とかあったら、遠慮なく聞い



てね！」

康介と翔太が順番に返事をする。

「あつ、俺は尾崎翔太！んで、こいつが和田康介だよ！」  
明るく自己紹介をする。

「翔太君に康介君ね。よろしく！私の事は彩華で良いから！」

あいつと……ダブる。

あの時、最後の表情が目につかぶ。  
思い出したくない。

こいつの近くに居たくない。

「 介、康介！」

不意に呼ばれる。

「なに？」

「まったく、聞いてろよ。これから俺らで彩華に学校の案内するって話だよ」

翔太が康介が考え事をしていた時に決まった事を説明する。

「なんで俺が……、パス、翔太1人で案内しな」

康介はそう言いながら、手をひらひらさせ教室を出た。

過去を思い出すのが嫌でその場から逃げ出したのだから。

「私、康介君に嫌われたのかな？」

悲しげに言う。

「あー、何て言うか……、ああいう奴なんだよ。悪気はないだろうから気にしないであげて！」

翔太がフォローを入れるが、彩華は何も言わず、康介が去ったあとを悲しげに眺めていた。

## 第2話 能力測定

「朝か……」

日が登り始めた早朝、家のベランダで康介は空を眺めていた。

昨日、教室を出て後は、そのまま学校を早退し、ずっと上の空だった。

何なんだ、この感情は。心に靄が掛かっているような感覚。

原因は分かっている。

あの転入生だ。

くそっ、何なんだあいつは、なんであんなに似てるんだよ。

八つ当たりでしかない事を考える。氷上彩華に非はない。

そう理解していても毒づかずにはいられない。

そんな複雑な感覚が延々と渦巻いていた。

気づけば、日は完全に登り、学校に行く時間になっていた。

「……行くか」

そう呟き家を出る。

遅刻ギリギリで教室に入ると、直ぐにホームルームが始まった。

「昨日言った通り、今日は能力測定を行う！気合いを入れて頑張るように！」

担任、進藤の声が響き、教室がザワつきだす。  
皆、能力測定について話している。

能力測定と言っても、校庭で自分の能力を使い、その強弱、発動までの時間を測るだけ。することは簡単だ。

ただ、自分の能力の強さが分かる。自分の今の力はどのくらいなのか、その期待に胸を躍らせているのだろう。

校庭に移動し列を作る。

その最後尾に康介の姿があった。

そして視線の先には、氷上彩華がいた。無意識のうちに、目で追っていた。

すると、名前を呼ばれたのか、氷上は測定場所へと進んでいく。

その時になって、ようやく康介は、自分が氷上の事を見ていたことに気付く。

「氷上はあいつとは違う、別人だ……」

どうしても、あの時の少女と重ねて見てしまう。そんな自分に、言い聞かせるように、消え入るような声で言う。

そんな時、測定が済んだのか、担任の声が聞こえて来る。

「氷上彩華！ 能力、氷！ 発動速度、B！ 規模、B！ 最大能力値、B！ 総合、Bランク！」

「スゲー！」

等と、皆が口にする。

高校2年でBランクと言うのは、なかなかいないのだ。

康介は、と言うと……。

氷、能力まであいつと一緒にかよ……。

まあ、あいつは能力と言うか、得意な属性だったが……。

等と考えていた。

しばらくして、名前を呼ばれる。

「次！和田康介！」

順番が来たのだろう。

康介は担任の所まで進み、口を開く。

「和田康介、能力は雷です」

「よし！始め！」

その声と共に、康介は電撃を打ち出す。

担任が機械の数値を読み取り、結果を読み上げる。

「和田康介！ 能力、雷！ 発動速度、B！ 規模、B！ 最大能力値、A！ 総合、Bランク！」

皆がザワつきだす。

同じクラスにBランクが2人もいたのでは、騒ぎたくもなるだろう。

高校2年生だと、大体はDランク。良くてCランクだ。Bランクは学年で200人中、2〜3人位しかないだろう。それ程少ないのだ。

測定が終わって、教室に戻ろうとする康介に、翔太が話し掛けた。

「康介スゲーな！Bランクとか学年トップだぞ！」

「翔太はどうだったんだ？」

「あれ、お前が人の事気にするのって珍しいな！」  
茶化すように言う。

「……戻る」

不機嫌そうに言い、教室に戻ろうとする。  
だが実際は、他人と深く関わりたくないのに、何故聞いてしまったのか。そんなことを考えていた。

「ちよつ、待つて待つて！教えるから！ほら、これ！」

翔太は焦った様に、1枚の紙を差し出す。

その紙には、測定結果が書いてあった。

尾崎翔太 能力、風

発動速度、C 規模、D

最大能力値、C 総合、C

「へえ、凄いじゃん」

興味なさそうに反応する。

「ありがと！」

普通なら厭味や皮肉と、取られそうな言い方だが、翔太は気にした様子もなく笑顔で返す。

そこに氷上が話し掛けてくる。

「翔太君、康介君。この後、予定ある？」

今日は学校これで終わりみたいだし、ご飯でも食べ行かない？」

そう、提案してくる。

「ご飯！？行く行く！康介も行くよな！？」

そう、翔太が答える。

「行かない」

即座に切り捨てる。

「たまには行こうぜー」

「だから行かないって、2人で行けば良いだろ」  
「こねる翔太を突き放す。」

「そんなことを言うなよ。俺と康介の仲だろ？」  
「諦めずに説得する。」

「勝手に親密そうな仲にするな」

そう言いながら立ち去ろうとした時、氷上が話し掛けてくる。

「康介君も行こうよ！ね？」

そう言つて、上目遣いで康介を見る。

「だから行かないって！」

思わず、声を荒げてしまう。

あいつと同じ様な顔で話し掛けるな！

「！！！」

ビクツ、と肩を縮ませ、怯えた表情の氷上。

「……帰る」

康介は少しバツが悪そうに歩いていく。

そんな康介の背中を眺めながら、氷上が口を開く。

「康介って……なんで、あんなに他人を遠ざけるんだろう？」

「……、なーんか抱えてる気がするんだよねー、康介って」

翔太が答える。ただ、自信はないのか、心なしか声が小さい。

「いつか話してくれるかな？」

「さあ？難しいと思うよ。俺は1年の頃から康介に絡んでるけど、何も聞けてないからな。」

まあ、今はこつちから歩み寄る努力をするしかないよ」

翔太は、何か考え込む様に言う。



「そっか、わかった！」

氷上は元気良く答える。

「なににー？彩華は康介の事が気になるの？」  
からかう様に問い掛ける。

「えっ、いや、気になるとかじゃなくて、その……」  
林檎の様に顔を染めながら口ごもる。

「そっかそっか！康介狙いか！あいつの攻略は難しいぞ」  
翔太は更にからかう。

「だから違うつてば！もう！」  
氷上は耳まで真っ赤にしながら、そう言つと、どこかに走って行つてしまった。

「あ……、飯は……」  
残された翔太は、そう呟くと、うなだれながらトボトボと、1人寂しく帰って行った。

その頃、康介は家には帰らずに、学校の屋上で空を眺めていた。

氷上彩華……か。

なんでこんなに気になるのか……

他人と深く関わらないと決めたじゃないか。

なのに氷上と近づきたいと想ってる自分がいる。

……分かってる。

俺は……、あいつの代わりとして氷上を見ようとしているんだ。

そんなの間違ってる。

けど……

1人は辛い……

どうすれば……、どうすればいいんだ？

康介は思考の渦に吞まれ、自分に問い掛ける。

あの少女に似ている氷上を見ている事で、誰かに触れたいという  
気持ちが浮かんでくる。

彼は、人と関わるのが嫌な訳じゃないのだろう。

本当なら友達を作って馬鹿みたいに騒ぎたいのだろう。

尾崎翔太　　今、1番友達に近い同級生。  
康介から歩み寄れば、直ぐにでも友達になれるだろう。

氷上彩華　　あの少女に似ている転入生。  
康介が、あの少女の代わりとして見ようとしている同級生。  
康介から歩み寄り、関わっているうちに、氷上彩華を個人として  
見れる時が来るかも知れない。

それでも、康介は……

「俺には、誰も護れない……。だから、深く関わっちゃいけないんだ」  
そう呟くと、考えるのを止め、屋上を後にし、帰路につく。

### 第3話 とある休日

土曜日、することのない康介は、街を歩いていた。

家に居ても考え事ばかりで、気が滅入ってしまふ。その気晴らしの為だろう。

朝から、フラフラと服屋や、アクセサリーショップを廻っている。

「おっ、これいいな」

そんな彼は今、ショーケースの中のシルバーアクセサリーを見ていた。

「そうそう、こんな感じのネックレスが欲しかったんだよな」

その視線の先に在るのは、クロスに羽が生えたデザインの、ネックレス。

「すみません、これください」

店員に声を掛ける。

「少々お待ちください」

店員が、そう言いながら、ショーケースからネックレスを取り出し、レジへと運んでいく。

「お会計、3万円になります」

「あつ、着けてくんで、そのままでもいいです」

そう言いながら、財布から1万円札を3枚取り出し、店員に渡す。

「はい、丁度ですね。こちらお品物になります。」

ネックレスを受け取り、その場で着け、店を出る。

「ありがとうございます」

店員の声が後ろで聞こえる。

「んー、良い買い物できたな」

買ったばかりのネックレスを触りながら、機嫌良さそうに歩いている。

向かう先は服屋。

店内に入り、端から見て廻る。

何か気になったのか、黒のジャケットの前で、立ち止まる。

「よし、これも買おう」

そう言いながら、ジャケットをレジに持って行き、会計を済ませる。

次に向かうのは、街の外れに小高い丘。

街の外れと言うだけあって、人は殆どいない。

康介は黙々と、丘を登っていく。

しばらくすると、芝生や花が生えた、少し開けた場所に出る。

街を一望出来る、康介のお気に入り、心休まる場所。

昼間だというのに、人は全くいない。何も無い場所に、好んで来る人は少ないからだろう。

康介は、芝生の上に、無造作に横になる。

「綺麗だな」

空を見ながら呟く。

得に何を考える訳でもなく、蒼い空や流れる雲を眺め続けていた。

しばらくして、目を閉じる。ふわつ、と頬を撫でる様な風が心地好い。

康介は、そのまま眠りへと落ちた。

どのくらいの間、そうしていただろうか。

康介が目を覚ます。

(……寝てたのか)

康介は起き上がり、伸びをする。

「どんだけ寝てたんだ、俺」

そう呟く。

既に、陽は傾き出していた。

「……帰ろ」

そう言いながら、街へと歩きだす。

1時間程歩き、街に戻って来る。

辺りは既に暗くなっていた。

自宅へと足を進めていると、路地裏の方から、何か聞こえて来た。

「、、！」

良く聞こえないが、恐らく女性陣の声だろう。

気になったのか、康介は路地裏に向かって歩きだす。

暗い路地を少し進むと、はつきり声が聞こえ、その姿が見えてきた。

その先に居たのは、1人の女の子と、それを囲むように立っている5人の男。

「ちょっと！離してよ！」

女の子が、男達に大声で言う。  
明らかに嫌がっているのが見て取れる。

（この声は……氷上？）

康介は目を細める。

普通なら、あまり話さない人の声など、聞いても誰だか分からだろつ。

しかし、康介には、合っているという自信があった。

何故なら、氷上は声まであの少女とそっくりだったからだ。 康介なら間違える訳がない。

「良いからこつち来いよ！」

男の1人が、厭らしい笑みを浮かべながら、氷上の肩を掴む。

「キヤア！」

氷上が小さく悲鳴を上げる。

その瞬間、康介は考えるよりも先に動いていた。

男達に向かって走り出す。

「なっ」

男達が気付き、振り返るが、もう遅い。

康介は、すでに男達の間近まで接近していた。

そして、手を振り下ろす。



それと同時に、無数の雷撃が頭上から、男達に向かって降り注ぐ。

「ぐうっ」

突然の攻撃に反応出来る訳もなく、男達はうめき声を上げ、気絶する。

「えっ……」

何が起きたか分からない、といった表情で啞然とする氷上。

「大丈夫か？」

康介が問い掛ける。

すると、状況が理解出来たのか、氷上が落ち着きを取り戻し、口を開く。

「ありがとう。助かったわ」

「……大丈夫ならいい」

康介はそう言っ、来た道を戻ろうと、踵を返す。

「ちよっ、ちよっと待って」

氷上は、帰ろうとする康介を、慌てて呼び止める。

「なに？」

立ち止まり、ぶっきらぼうに言う。

「助けてくれたお礼も、ちゃんとしたいし、ちよっとお茶でもしない？ね、いいでしょ？」

「いや、別に」

別に礼なんかいらない、そう言おうとしたのだろう。

だが、言い切る前に、氷上は康介の手を掴み、歩きだす。

「ちょ、待てよ！誰も行くなんて言っていないだろ」

康介は掴まれた手を振りほどこうとするが、

「どうせ暇でしょ？」

と、氷上は気にした様子もなく、康介を引っ張って行く。

すると、康介は観念したように口を開く。

「分かった、分かったから、とりあえず手を離してくれ」

「そう、じゃあファミレスにでも行こっか！」

一度立ち止まり、今まで掴んでいた手を離し、笑顔で言いながら再び歩きだす。

「……」

無言。2人は何も話さずに歩いている。

康介はもともと口数が少ない。

氷上は、誘ったはいいが、何を話せばいいか分からないのだろう。

しばらくすると、ファミレスに着き、店内へと入っていく。

「いらっしやいませ！2名様でよろしいですか？」

「はい！」

店員に氷上が答える。

「こちらへどうぞ」

2人は店員に案内され、席に着く。

「御注文お決まりになりましたら、そちらのベルでお呼び下さい」

「何頼む？なんでも奢るよ！」

氷上がメニューをパラパラと、めくりながら聞く。

「じゃあ……ホットコーヒーで  
康介が答える。

「なんか、渋いね」

「俺の勝手だろ」

「あはは、確かにね！」

そう言いながら氷上がベルを押す。

すると、直ぐに店員が来た。

「御注文はお決まりですか？」

「ホットコーヒー1つとオレンジジュース1つ下さい」 氷上が注文する。

「畏まりました」

店員が下がっていく。

「そういえば、食べ物頼まなくて良かったの？」

「そんなに腹減ってないからな」

「ダイエット!？」

「……なんでそうなる」

驚いた様に言う氷上に、康介は、うんざりしたように返す。

「ノリ悪いなー。もうちょっとテンション上げようよ！」

こんな可愛い女の子掴まえていて、テンション低いと失礼だよ？」  
笑いながら氷上が話す。

「ノリの良さを求めるなら、相手を間違えたな。それに掴まえられるのは、俺の方だ」

「う……、そんなバツサリ切り捨てなくても……」  
ガックリとうなだれる。

そこに店員が、注文したドリンクを持ってくる。

「こちら注文の品になります。それでは、ごゆっくりどうぞ」  
「そう言つと店員は戻っていく。」

「それじゃ、乾杯！」

氷上が手に持ったグラスを前に突き出し、言う。

「いや、何にだ？」

「んー……、私と康介君の交流に？」

「……」

康介は、呆れた様な目で氷上を見る。

交流もなにも、お前が無理矢理、俺を連れて来たんじゃないか。

そんな事を思っているのだろう。

「そ、それより！さっきは助けてくれてありがとう！ホントに助かったよ！」

氷上が焦った様に、話題を変える。

「礼ならさっきも聞いたよ」

「それでも言わせて。私、怖くてなにも出来なかったから」

「能力使えば良かったのに。Bランクの氷上なら、あんな奴ら簡単にあしらえただろ」

「あ……、まだ能力に目覚めて間もないから、そこまで頭まわらなかったよ！」

「なるほどね」

それじゃあしょうがない、といった感じで康介が言う。

「そういえば、今日の康介君、いつもより喋ってるよね！」

「話し掛けられたら返事するしかないからな」

「でも、いつもはもうちょっと冷たくない？」

「いつも通りだよ」

康介はそう返す。

確かにそうだ。いつもの康介だったら、ファミレスにすら来なかったかもしれない。

けど今は、こうして会話を続けている。

それは何故か。あの少女に似ている氷上と一緒に居ることで、本人でも知らず知らずのうちに、少しだが本来の自分が出て来ているのだろう。

その後も、2人は会話を続けていたが、飲み物を飲みきったのもあり、店を出た。

「じゃあ、またね！」

「ああ、気をつけて帰れよ」

「うん！ホント今日はありがとね！康介君かつこよかったよ！」  
氷上はそう言っていると、康介が何かを言うよりも早く、走り去って行った。

「……かつこいい、か。」

あいつには、そんなこと言われた事はなかったな」

康介も、そう呟くと、薄い笑みを浮かべながら自宅へと歩きだす。

康介は、家に着くとそのままベッドに身を投げ出した。

「なんか疲れたな」

（けど、悪くない1日だった。誰かとあんなに話したのは、久しぶりだな。

人と話すのが、あんなに楽しいなんてな……、すっかり忘れてた。

これからは、少し……少しだけ、積極的に人と話すようにしようかな）

康介は天井を見上げながら、そんな考え事をしていた。

しかし、話す事は、関わるということ。

関わるということは、お互いを知っていくこと。

いや、康介にとっては、『知ってしまう』と言うべきか。

人は、相手を知ることによって、初めてその人に対する感情が生まれる。

『好き』『嫌い』。どちらの感情でも、その相手に不幸が起きれば、何か思うことがあるだろう。

嫌いな相手に不幸が降り懸かるとする。その内容が、転ぶ程度だったら『ざまあみろ』と思う人が大半だろう。

だが、もし降り懸かった不幸が『死』だったら……。

殆どの人は、見知った人間の死んだとき、負の感情が沸き上がる。

康介は、あの少女を護れなかった事を引きずっている。

トラウマと言ってもいいだろう。

もし、そんな彼の前で、彼の見知った人間の死が訪れたら……、きつと心が壊れてしまうだろう。

だから彼は、人と関わるのを拒む様にしていたのだ。

彼は、心の『時』を止めたのだ。人と深く関わらない事で。失わない為に。自らの心を護る為に……。

それなのに康介は、話してみよう、と考えた。それは何故か。

失う覚悟をしたからか。

護り抜く自信が出来たからか。

それとも、誰かと話す事の楽しさを思い出し、1人が辛くなっただけか……。

理由は分からずとも、康介の『時』は、動きだそうとしている。

きっかけとなったのは、氷上彩華。

「氷上彩華、か……」

康介はボソツと言って目を閉じる。

そして、眠りに着いた。



## 第4話 チーム決め

「おら席着けー！」

朝の騒がしい教室に、担任が入って来る。

生徒達は各自、自分の席に戻っていく。

全員が着席したのを確認してから、担任が口を開く。

「今日は能力学で行う模擬戦のチームを決めてもらう。3〜5人でチームを組んでくれ。」

チームが決まったら俺に報告しに来てくれ。その後は、自主練するもよし、喋ってるもよし、自由にしていいいからな」

説明が終わると同時に、皆が一斉に動き出す。

すると、翔太が康介の所に走っていく。

「康介！一緒に組もうぜ！」

「ああ」

「そこを何とか！……ってあれ？いいの！？」

二つ返事で了承した康介に、翔太は驚きながら聞く。

「別にいいよ」

康介は短く答える。

「いい……だと？ 康介が拒まないなんて……、まさか偽物か？」  
有り得ない物を見た様な反応をしながら翔太は言う。

「俺が拒むのが普通、みたいな口ぶりだな。まあ否定はしないが……。他の人と組むより、話した事のある翔太と組んだ方がいいと思っただけだ」

康介はそう答える。

「てつきり嫌がられるかと思ってたよ！ そうかそうか！ 俺と組みたいのか！」

翔太は嬉しそうに、笑顔で言う。

「調子に乗るな。消去法でそうなたただけだ」  
ぶっきらぼうに話す康介。

「消去法でも、俺を選んでくれたのは嬉しいよ！」  
翔太は本当に嬉しそうな笑顔になる。

「……幸せな奴」  
康介はフツ、と笑いながら呟く。

「あれ？ 今笑った？」  
驚き、目を擦りながら、翔太が聞く。

「なんだその珍獣を目の当たりにしたような反応は」  
少し、むっとしたように康介が言う。

「そんな笑顔、初めて見た。康介、お前笑うと格好良いな！」

「お前と違ってな」

康介は、翔太の言葉に対して、薄い笑みを浮かべながら憎まれ口で返す。

「……康介、少し変わったな。口数が増えたし、なんか柔らかくなった。なんかあったのか？」

少し考える様な顔をした後、翔太は口を開く。

「……別に、なにもないさ」

「何！今の間！？絶対なんかあっただろ！」

「何もないって言ってるだろ」

「じゃあさっきの間はなんなんだ！さあ！吐くんだ！」

「くどいぞ」

そんな言い合いしていると、そこに氷上が近づいて来る。

「騒がしいわね。どうかしたの？」

2人を見ながら尋ねる。

「康介が少し変わったんだよ。んで、その理由を教えてくださいませんか、問い詰めてたんだ！彩華は何か知ってる？」

「さあ？知らないわよ？変わったってどんな風に？」

「口数が多くて、なんか雰囲気が柔らかいんだ」

「へえ、良いことじゃない。きっかけが何か、気になるわね」

翔太と氷上は、そんな話しをした後、ニヤリと笑いながら翔太を見る。

「な、なんだよ？」

2人の不敵な笑みに、康介はたじろぐ。

「康介君？何がきっかけなの？」

不敵な笑みのまま、氷上は康介に近づいて行く。

「ちよつとトイレ行ってくる」

康介は逃げるように立ち上がる。

すると、すかさず翔太が康介の肩を掴み、捕まえる。

「康介、逃げるなよ」

翔太は言いながら、ニヤニヤと笑みを浮かべている。

「「さあ！」」

声を揃えて、2人は康介に詰め寄る。

「そ、そんな事より、早くチームを決めないと」

顔を引き攣らせながら、康介は話題を変えようとする。

「……、まあ言いたくないんでしょうがないか！」

「そうね。確かにチームも決めないといけないし。

というか、この3人で良いんじゃない？」

聞き出すのを諦めたのか、翔太と氷上が順に言う。

「確かにそうだな！康介もそれでいいだろ？」

氷上の言葉を受けて、翔太が同意を求める様に聞く。

「ああ、良いんじゃないか」

「決まりね！」

「じゃあ先生に報告しに行こう！」

そう言つと3人は担任の所に行き、チームのメンバーを報告する。

「この後、どうする？」

翔太が2人に問い掛ける。

「せっかくだし、模擬戦の練習でもしない？」

「ああ、いいんじゃないか？」

氷上の提案に康介が頷く。

「じゃあ校庭に行くか！」

「ああ」

「ええ」

翔太の言葉に、2人は返事し、皆で歩きだす。

「で、練習って何するんだ？」

校庭に着くと、康介が口を開く。

「んー、とりあえず、実力把握の為に戦うか！」

「まあ、そのくらいしかすることないしな」

翔太の言葉に、康介が頷きながら言う。

「じゃあ私は2人の戦いを見て勉強してるわ」

「勉強になるかは分からないけどね。合図頼める？」

翔太は、苦笑いしながら氷上に話す。

「良いわよ。それじゃあ準備して」

氷上が言うと、康介と翔太は、10メートル程離れて向かい合う。

「始め！」

氷上の合図と同時に、翔太が康介に向かって走り出す。

「ふっ！」

瞬く間に距離を詰めた翔太が、康介の顔を目掛けて拳を振るう。

康介は、それをヒラリとかわすが、翔太は続けて回し蹴りを放つ。

それとほぼ同時に、康介は深くしゃがみ込む様に回し蹴りを避け、流れる様な動作で翔太の軸足を払う。そして、止めと言わんばかりに、体勢の崩れた翔太目掛けて雷撃を放つ。

輝く閃光。

体勢の崩れたままの翔太に向かって行く。

普通なら避けられない状況。しかし、翔太は急に浮き上がり、その雷撃を避ける。そして直ぐに距離を取り、体勢を立て直す。

「風……か、浮き上がって避けれるなんて、便利な能力だな」

ため息をつきながら、康介が口を開く。

「まあな！その気になれば、空も飛べるかもよ？」

「それは本当に便利だな」

軽口をたたき合う2人。

「はっ！」

不意に翔太が腕を横薙ぎに振るう。

それと同時に、突風が吹き荒れる。

「くうっ」

康介は風に撒かれて吹き飛ばされる。

が、器用に空中で体勢を整えて着地する。そして翔太に反撃しよ

うとするが、風によって舞い上がった砂煙で周りは見えなくなっていた。

「くそ、この為か」

塞がれた視界に小さく毒づく。

「けど、甘いな」

康介はそう呟きながら目を閉じる。

翔太は、後ろから康介に近づき、風を纏った腕で殴りつける。

「終わりだ！」

康介に当たる瞬間、翔太は叫ぶ。

完璧な不意打ち。しかし康介は、それをかわしてみせた。

「なっ」

まさか避けられると思っていなかったのか、翔太は驚き、声を上げる。

そして驚くと同時に動きが止まってしまふ。

康介はその隙を見逃さずに、思いつきり体重を乗せた蹴りを放つ。

「があっ！」

隙を突かれた翔太は、防ぐ事も出来ずに蹴りを脇腹に受けて、地面を転がって行く。

翔太は転がりながらも、風を使って体を浮かせ、体勢を整えようとする。



だが、

「チェックメイト」

康介が言いながら、雷撃を放つ。

翔太は急いで避けようとするが、放たれた雷撃は1つではなかった。

雨の様に降り注ぐ雷撃。

到底避けきれぬ物ではない。

そして、

「ぐ、う……」

成す術なく翔太は雷撃を受けた。

「大丈夫か？一応威力は絞ったんだが……」

康介がそう言いながら、倒れている翔太に手を伸ばす。

「いてて、少し痺れてるけど大丈夫だよ」

翔太は返事をしながら、伸ばされた手を掴み、立ち上がる。

「そっぴや康介！あの後ろからの不意打ち、なんで避けれたんだよ

！」

翔太が、不思議でならない、といった感じで康介に問い掛ける。

「なに、俺を始点に微弱な電気を飛ばして、レーダーみたいにしたらただだよ」

「なるほどね、そんな使い方もあるんだ。勉強になったよ！」

康介の答えに、翔太は納得したように頷く。

するとそこへ、観戦していた氷上が話しかけてくる。

「2人とも凄かったね！うん、参考になったよ！」

「ありがと！それなら感電した甲斐があったよ！にしても、康介強いな！」

「まあ、伊達にBランクじゃないからな」

「私もBランクだけど、あんなに戦えないよー」

しばらくそんな感じに3人は話しをしていたが、陽が暮れてきたのもあり、解散することにした。

「康介君、翔太君、またね！」

「じゃあねー！」

「ああ、またな」

氷上、翔太、康介の3人は、そう言いつつ、それぞれ帰路についた。

## 第4話 チーム決め（後書き）

康介の変化……、展開が早い気が……

## 第5話 模擬戦

「模擬戦、か」

康介は授業で行われている、チーム対抗の模擬戦を眺めていた。その視線の先では、2つのチームが力を競い合い、戦っている。ぎこちない連携をとり、仲間の長所を潰し合うようなチームワーク。

「……、あいつら、ふざけてるのか？」

「まあ……言いたくなる気持ちもわかるよ」

「なんで障壁の能力者が前衛にいるんだ……」

「普通なら、障壁の能力は後衛で、防御に専念するべきだからね」

半ば呆れながら、康介と翔太は話しをする。

実際、呆れるのも仕方ないほどの、ずさんな戦い方。

戦っている2つのチームは、全員足を止めて、能力での撃ち合いを始めた。

「全員で立ち止まって撃ち合い、だと……？ 斬新な戦略だな」

「そんなことしたら、能力の相性とランクだけで勝負が決まっちゃうよね」

2人は、まるで、お粗末と言わんばかりの口調で話しながら観戦を続ける。

すると、今まで黙って観戦していた氷上が口を開く。

「なんか、よわ……強くはないわよね。両チームとも平均Cランクくらいなはずなのに」

「まあ、ランクが全てじゃないからな。要するに、戦い方が大事なんだ。ランクが低くても強い奴は強い」

氷上の言葉に、康介が答える。

「あれなら、康介君だったら1人でも勝てるんじゃない？」

「確かに康介ならいけそうだな」

2人は康介を見ながら、そんなことを話した。

「それはさすがに……無理じゃないかな」

自分の力量に感心すべきか、その程度と同級生に落胆すべきか……」

康介は2人にそう答えながら、複雑そうな表情を浮かべる。

「……どうだろう」

「……複雑ね」

翔太と氷上は、苦笑いしながら模擬戦の方に視線を向ける。

「そういえば、なんで学校で模擬戦なんてやるの？」

氷上が、ふと疑問に思ったことを口にした。

「それは、軍人の志望者が多いからだよ」

「軍属になれば、この箱庭から外に出れるからな。みんなその為になりたがるんだ」

翔太と康介が順に話す。

能力者は、箱庭から出れない。出れないと言われると、束縛感を  
感じる人が大半だろう。

しかし、軍属になれば箱庭から出れる。

箱庭から出れると言うことに、皆は自由を感じ、束縛感を拭う為  
に志願するのだ。

「じゃあ2人も軍人に？」

説明を聞いた氷上が、2人を見る。

すると翔太は、自分の考えを口にする。

「んー、俺は今の生活を十分楽しいと思ってるからね。軍人には、  
ならないと思うよ」

それに続いて、康介も話し出す。

「軍人に？まさか。

仮に、そうして箱庭から出たとしても、軍務に縛られるに決まっている。

それに、軍属になれば箱庭から出れるってのは、政府が能力者を軍事力として確保したいだけなんじゃないか？なんか、きな臭いんだよ」

確かにそんな考え方が出来るだろう。

能力者を強制的に、軍に組み込まないのは、政府の体裁を悪くしない為。

能力者を確保していたい政府は、箱庭に能力者を閉じ込めた。そして、軍属になれば箱庭から出れる、という政策を行う。

そうすると、能力者は外に出る為に、自発的に軍に志願する。

そう考えると、すべて辻妻が合うのだ。

すると次の問題。

政府は何故、そんな回りくどい事をしてまで、能力者が欲しいのか。

能力者は今の所、日本にしか存在していない。その能力者を、多数確保すれば、他国に対して絶大な戦力になるだろう。

答えは、戦争。

確かに、きな臭い話だ。



「ほー、良く考えてるな」

「そうね、普通はそんなに深く考えないもの」

翔太と氷上が、感心したような表情を浮かべる。

「そうでもないさ。っと、俺らの順番が廻ってきたみたいだ」

そう言いながら康介が立ち上がる。

話し込んでいる間に他のチームの模擬戦は終わったようだ。

「そうみたいだな！さて、やりますか！」

「そうね！がんばろう！」

翔太と氷上も、気合いを入れて立ち上がる。

「氷上は、とりあえず後衛で。氷を使った防御を頼む。今日のところは、能力を使った戦いの感覚を掴むだけでいいだろう。」

康介が、能力に目覚めて日の浅い氷上を気遣った作戦を話す。

確かに、能力に目覚めて日が浅いのには前衛に出すのは、少し酷だろう。

「了解！」

氷上が元気良く返事し、それに続いて翔太も口を開く。

「康介、俺はどうすれば？」

「まあ、適当に」

「俺の扱い、ぞんざいだな……」

「翔太なら、的確な動きをしてくれると思ってるからな」

「なるほどー！」

「いやいや、翔太君、騙されてるよ？」

「なんですと！？」

3人は、緊張感のかけらもない会話をしながら、前に歩いていく。

担任の所まで進むと、相手チームと対峙する。

相手チームは4人構成。3人の康介達は、客観的に見ると不利に見えるだろう。

すると、担任が両チームの間に入る。

「準備はいいか？」

それに、皆が頷くと、担任は少し離れてから合図をする。

「始め！」

その声と同時に、相手チームが動きだす。  
全員バラバラに……。

散開して、攪乱するでもなく、ただ単に、バラバラに動いている  
だけなのだ。

そして、その内の2人が康介目掛けて能力を放つ。

放たれたのは火と水。その2つが康介に届く前に空中でぶつかり、  
火が打ち消される。

「……馬鹿だ」

康介は、なんとも言えない表情でそれを見て、小さく呟く。

そのまま進んで来た水も、康介に当たる前に、氷上が作り出した  
氷によって防がれる。

すると翔太が口を開く。

「なあ康介、試したい技があるんだけど、いい？」

「別にいいけど、時間稼ぎでもすればいいのか？」

「よろしく！」

康介の許可をとると、翔太は風を集めだす。

康介は、時間稼ぎをしようと相手チームを見る。

「……」

そして、声を失った。

何故なら相手チームは、分厚い氷の壁に囲われて、閉じ込められていたからだ。

必死に炎で溶かそうとしているが、なかなか氷の壁を破る事が出来ないでいる。

「……氷上、いつの間にやったんだ？」

「康介君と翔太君が話してる間にね！」

康介の問いに、氷上は笑顔で答える。  
まるで悪戯に成功した子供のようだ。

するとそこに、準備が終わった様子の翔太が声を掛けてくる。

「いつでも行けるぜ！って……あれどうしたの？」

「私がやったんだよ！」

相手チームを見て、啞然とする翔太に、氷上が元気良く答える。

「凄いじゃん！けど、俺も負けてないよ！」

翔太は、そう言いながら、手を前に伸ばす。

その先にあるのは、風が球体になった様な物。

縦、横、斜め。その球体は、様々な向きで、吹き荒れる風を圧縮したものだ。

「へえ」

それを見た康介は、感心したような声を漏らす。

「それじゃあ、さつさと終わらせよう！いつまでもあれじゃ可哀相だし」

翔太は言いながら、氷の壁に閉じ込められたままの相手チームに、その風の塊を放つ。

そのまま一直線に相手に向かって行き、氷の壁にぶつかる。

すると、相手チームを閉じ込めていた強固な壁は、一瞬で削られ、粉碎される。

まるで、削岩機のような破壊力。

そして威力を失うことなく、相手チームの中心に着弾する。

その瞬間、相手チームは轟音と共に吹き飛ばされた。

「「「……」」」

それを見た3人は、無言で顔を引き攣らせる。

想像以上の威力に、びっくりしているのだろう。

「い、生きてるかな…」

そう言いながら、翔太が2人の方を見る。

すると康介と氷上は、サッと、目を反らす。

「……何か言つて下さい」

何故か敬語で懇願する。

「俺は（私は）知らない」

「そ、そんな……」

翔太はだんだんと、涙目になっていく。

するとそこに、怒りの形相の担任が近づいてきた。

「やり過ぎだ！馬鹿！

直撃しなかったから良かったものの、あんなのが当たったらただじゃ済まないぞ！」

怒鳴りつける。

「……すいません……」

だが、相手チームは一応無事らしい。康介達は少し、ほっとした表情になる。

「全く！何を考えてるんだ！あんなのを模擬戦で使うなんて！」

「「「すいません」「」」

「とんだとばっちりだったわね」

「まったくだ」

「ごめん……」

担任の説教が終わり3人は、げんなりとした様子で話し出す。

あれだけの威力の能力を模擬戦で使ってしまったのだ。  
説教されるのは、当然の事だろう。

「にしても、ホント凄まじい威力だったな」

康介が感想を漏らす。

「だろ？あれでも手加減したんだぜ！風は偉大だ！こんなことも出来るからな！」

翔太は声高に言うと、その場で風を起こした。  
すると、氷上のスカートがめくれ上がる。

「今日は薄いみずい」「こんの、変態！」「グホアッ！！」

翔太は、氷上に殴り飛ばされ、地面をゴロゴロと転がっていく。

「翔太君、覚悟は出来てる？」

氷上は凄まじい怒気を放ちながら問い掛け、近づいていく。1歩踏み出す度に、その地面は凍りつき、周りの温度は下がっていく。

「う、うあ……あ、ああ」

翔太は、その雰囲気には圧倒され、尻餅をついた状態で後ずさっている。

「私ね、思うのよ。翔太君みたいな人に、人権はいらないって。ねえ、康介君、どうすれば良いと思う？」

「え……」

いきなり話を振られ、康介は焦り、言葉に詰まる。

「え？」

「え、永久凍土に……埋めればいいんじゃないか？」

「そう、さすが康介君ね。名案よ」

氷上はそれを実行しようとする。



「あ、彩香？本気じゃないよね？」

翔太は顔面蒼白になり、もはや怯えきった表情だ。

「なに？命乞いなら聞かないわよ？けど安心して、永久凍土は出来ないから」

そう言いながら氷上は、翔太の頭上に大量の氷を落とした。

しばらくして復活した翔太が、話題をすり替える様に話し出す。

「そ、そういえば、あの噂知ってる？」  
本当に無理矢理な話題の変え方だ。

しかし氷上は、ジトつとした目で翔太を見ながらも、律儀に答える。

「知ってるわよ。夜な夜な街に、バケモノが出るって都市伝説でしょ？」

噂の内容は、夜の街をバケモノが徘徊していて、人を襲うというもの。

「なんだそりゃ」

康介は怪訝そうに、眉をひそめる。

普通に考えたら、そんな事は有り得ないだろう。  
康介の反応は、当たり前のことだ。

「なんでも、実際に襲われた人がいるらしいよ！」

翔太が、気になるだろう？といった風に言う。

「へえ……」

康介は、少し興味を持ったような反応をする。

火のない所に煙はたたず。

噂には、元となる話があるのだ。

バケモノかどうかは置いといて、獰猛な犬くらいは、いるのかも  
しれない。

「ねえ！3人で探してみようよ！」

氷上が目をキラキラさせながら提案する。

「おっ、名案だな！」

翔太がその話に乗っかる。

しかし、康介は乗らなかった。

「俺はパス。勝手にやってくれ」

ある程度、話す様にはなったが、やはりプライベートの付き合い  
は避けたいのだろう。

話しはするが、遊ばない。

康介は、そんな線引きをしていた。

「それじゃあ、俺は帰るから」

そう言うのと、康介は一人で歩いていつてしまった。

「あらら、話す様になっただけ、プライベートの付き合いはしてくれないみたいだね」

「そうね。まあ、その内してくれる様になるわよ」

「そうだね!」

残った2人は、しばらくそんな会話をしていた。

## 第6話 転移と陣

学校の昼休み      購買の前は、生徒でこつた返していた。

売っているのは、パンやおにぎりなど、ごくごく在り来たりな物ばかり。

しかしコンビニで買うよりも安いため、生徒から需要は高く、長蛇の列が出来ている。

ざっと見渡して、80人位だろうか。

1学年が大体120人。3学年合わせて360人。  
全校生徒の、4人に1人が利用しているのだ。

康介もその利用者の1人。

あまりの人の多さに、うんざりした様な表情をしながら列んでいる。

「人、多過ぎ。飯くらい持ってくればいいのに」

順番待ちをしながら小さく毒づいているが、自分の事を棚に上げるとは、まさにこの事だろう。

康介の今の位置は、前から2番目。

つまり、すぐにでも順番が廻って来る位置いる。いるのだが、康介の前にいる男子生徒は、かれこれ5分くらい前から呆然とした様に立ち尽くしたまま、動かない。

痺れを切らした康介が文句を言おうとすると、その男子生徒は突

如振り返る。

「ご飯奢って！財布忘れてお金がないんだ！」

「……は？」

縋り付くかの様に懇願して来る男子生徒。康介は、いきなりの事に眉をひそめる。

「お願い！ホントに財布を忘れちゃったんだ！」

「なんで俺が。食わなきゃいいだろ」

「腹減りすぎて死にそうなんだよお」

弱々しい声で、男子生徒はお腹をさする。  
どうやら本当にお腹が減っているようだ。

そんなやり取りをしている間にも、列の後ろはどんどん詰まっていき、なかなか進まない2人に鋭い視線が浴びせられる。

「くそっ」

その視線を感じとったのか、康介は慌ててサンドイッチを何個か手にとり、会計を済ませて列から離れた。

「ほら」

「ご飯だ！」

買ったサンドイッチの半数を男子生徒の前に突き出す。  
すると男子生徒は、とたんに笑顔になり、それを受け取る。

すると、それ以上関わりたくないのか、康介は足早にその場を離れていく。

向かう先は屋上。何故か人が少なく、康介お気に入りの場所だ。

屋上に着くと、サンドイッチを食べ始める。

そう　いつもと変わらない、1人で静かに過ごす昼休み。

そのはずだった。

しかし、康介の前には先程の男子生徒がいた。

「……まだ何か用か？」

その生徒を見ながら、目を細める。明らかに鬱陶しそうな態度だ。

「まだお礼してなかったから。さっきはありがとう！」

爽やかな笑顔で言う。とても高校には見えない様な幼い笑顔。童顔と言うのがピッタリだろう。

「そうか、じゃあもう用はないな」

「そんなこと言わずにさ。俺の名前は折田翼、2年A組だよ。」

シツシツ、と手を振る康介に構わず、自己紹介をする。

そして康介の返事を待たずに、話しを続ける。

「俺の事は翼って呼んでね。よろしく、和田康介君。

あ、ちなみにこれから康介って呼ぶから！」

大人しそうな見た目だが、意外と勝手な性格の用だ。

「2年……だと？」

康介は驚き、目を見開く。まさか、自分と同じ年だと思わなかったのだろう。

折田翼、そう名乗った少年は、確かに2年生には見えない。下手をすれば中学生に見えるくらいだ。

そんな反応をした康介に折田翼は、心外だ、と言うような表情をする。

「酷い！？いくら童顔だからって……。」

これでも発情期なんだから！」

「……」

折田翼の発言に、康介は無言になる。

「あれ？なんで黙るの？」

「……思春期の間違いじゃないのか？」

「何か違うの？」

折田翼は、康介の問い掛けにキョトン、とする。

「いや、なんでもない。

……さ、もう用は済んだだろ」

康介は眉間を抑えながら、力無く言う。

するとその時、屋上の扉が勢い良く開かれる。

「翼！こんな所にいたの？探したよ！」

そう言いながら入って来たのは、1人の女子生徒。

肩につくくらいの黒髪。顔立ちは、下手なアイドルよりも、よっぽど整っている。

「あ、瑞葉。こっちこっち」

どうやら折田翼と知り合いの用だ。親しげに手招きをしている。

瑞葉と呼ばれた女子生徒は、それに応じる様に近づいてくる。

「あれ、隣にいるのって、和田康介？」

視界に康介を見つけると、少し驚いた様な表情をする。



「さっきの折田もそうだが、なんで俺の名前を知ってるんだ？」

「まあ……ある意味有名だからね」

康介の疑問に女子生徒は、歯切れ悪く答える。

「ある意味？」

「和田君って人との間に壁作ってるじゃない？それでいて成績優秀、能力も強い。」

だから周りから、お高く止まってるって思われてるわけ」

少し言いづらそうにしながら、女子生徒は説明する。

要するに康介は、周りからの嫉妬の対象なのだろう。

するとそこに、折田が口を挟んでくる。

「けど、実は康介っていい人だよ。さっきはご飯奢ってくれたし！」

「あれは奢らされた、に近い状態だろ。不本意だよ、不本意」

康介はため息をつく。

「へえ、話してみると普通だね。私は佐藤瑞葉。よろしくね」

「佐藤瑞葉って……『陣』の？」

佐藤の自己紹介で康介は、少し驚いた顔をする。

「あ、知ってるんだ？」

「ああ、『陣』って言ったら有名だからな」

「そんなに目立つことしてないんだけどなあ」

陣の能力、とても珍しい能力で、空間にすら干渉できる可能性があると言われる。

基本的には結界を張ったりするらしいが、その能力者は佐藤しかないかため、詳細は定かではない。

佐藤は、そんな能力の持ち主だ。有名になるのは当然の事だろう。

「ん？じゃあ折田って『転移』か？」

「そつだよ！」

康介が何か思い出した様に聞くと、折田は得意げに返事をした。

何故康介が折田の事も知っていたのか。

それは佐藤の相棒が転移の能力者、と言う有名な話があるからだ。転移も希少な能力。その能力者の名前を思い出したのだ。

「『陣』の佐藤瑞葉と『転移』の折田翼。噂の悪魔のタッグか」

「『陣』の結界で相手を閉じ込め、『転移』で結界内部に攻撃を飛ばす。まさにワンサイドゲームね」

不意にそんな声が聞こえる。

康介達が声のした方を向くと、そこにはいつの間にか翔太と氷上の姿があった。

「康介、こんなところにいたのか」

「ホント、探したわよ」

「探したって、なにか用か？」

順に言う2人に康介は問い掛ける。

「用はない！暇だったから探してみたんだ！」

「俺は暇つぶしの道具か？」

胸を張って堂々と言う翔太。そんな翔太に康介はため息をつく。

2人がそんな会話をしていると、佐藤と折田が声を掛けてくる。

「尾崎君と氷上さんだよね？私は佐藤瑞葉。よろしく！」

「俺は折田翼だよ。よろしくね」

「ああ、俺は尾崎翔太だ！」

「私は氷上彩香よ、よろしくね！」

4人は互いに自己紹介をした後、談笑を始めた。  
先日の翔太の模擬戦での話や、氷上に凍り漬けにされそうになった話などで盛り上がっている。

「はあ……」

そんな中、康介は静かに過ごしたかった昼休みが、騒がしくなつてしまい、ため息をついていた。

## 第7話 開校記念日 1

6月も後半、あの屋上での出会いからしばらくたった。

あの日から、折田と佐藤は事あるごとに康介達と行動を共にしている。

静かだった日常は、康介の意志とは関係なく騒がしくなっていた。

しかし今日は開校記念日で学校は休み。

康介は穏やかな朝を過ごしていた。

ソファーに腰を掛け、紅茶を飲みながら読書をする。

落ち着いたひととき。

どのくらいそうしていただろうか、康介は時計に目を向ける。すると、時計の針は、すでに12時を廻ろうとしていた。

康介はキッチンに向かい、冷蔵庫を漁りだす。

すると、ピンポン、とインターホンの音が鳴り響いた。

「誰だ？」

康介は首を傾げながら玄関へと向かう。

そして、玄関を開けると、康介は呆然と立ち尽くした。

「……どうして、ここにいる？」

そう、先程のインターホンの音が、穏やかな休日の崩壊の序曲だったのだ。

康介は、リビングで頭を抱えていた。

その原因は、言わずもがな招かれざる客。

「康介、なんか飲み物！」

「私にもお願い」

「俺もほしいな」

「じゃあ私も！」

それは、翔太、氷上、折田、佐藤だ。

康介の家も知らない筈の4人が、何故かここに集合している。

「遠慮って言葉知ってるか？」

いや、それよりも何でここにいる？」

康介は力尽きた様な表情を浮かべている。

「ああ、それは

1日前、康介を除く4人は話しをしていた。

「なあ翼、明日休みだよな？」

「そうだけど？」

「よし！ここで皆に提案がある！康介も呼んで5人で遊ぼう！」

これがすべての始まりだった。

「良いわよ」

「良いね！」

「良いよ！」

氷上、折田、佐藤は断る理由もなく、ここに遊ぶ事が決定した。

「けど、遊ぶって何するの？」

折田が言い出しっぺの翔太に尋ねる。

「何したい？」

「丸投げなの！？」

何も決めてない様子の翔太に折田がツッコミを入れる。

「じゃあ、普通に集まって雑談とかでいいんじゃない？」

「ファミレスとかでね」

その様子を見て、氷上と佐藤が提案する。  
すると翔太は、1度頷くと立ち上がる。

「決まり！明日はファミレスで雑談だ！  
が、しかし！問題が1つある。それは、康介をどうやって呼ぶかだ  
！」

「んー、難しいわね」

「確かに、来ない気がする」

「十中八九、来ないんじゃない？」

その言葉に氷上、折田、佐藤は難色を示す。  
しかし翔太は自信有りげに胸を張って言う。

「そう、普通に誘っても断られるだろう。そこで考えた！  
正攻法でダメなら、搦め手で攻めればいいと！」

「具体的にはどうするの？」  
佐藤は首を傾げる。それに対し翔太は不敵な笑い声を上げながら  
答える。



「ふっふっふ、名付けて！呼んでも来ないなら、こっちが行けば良いじゃない、作戦だ！

この作戦実行にあたって、康介の家の場所はリサーチ済み。後は、皆で行くだけだ！」

そう、翔太はこの為に康介の家の位置を調べていたのだ。尾行という形で……。

「なっ  
」

折田は声を失う。呆れているのだろうか、3人は固まっている。

「なるほど、完璧だね」

「ええ、それなら康介君も断れないはず」

「いくら和田君でも、家まで行ったら諦めるしかないもんね」

違った。

呆れでなく、目から鱗といった感じた。

翔太はその反応に、満足そうに頷くと、ニヤリと笑みを浮かべる。

「決まりだな。

明日は午前11時半に校門前に集合！全員揃い次第、作戦決行だ！」

そして翌日。

翔太達4人は、住宅街の一角にある家の前にいた。

その家の表札には『和田』の文字。そう、康介の家だ。

翔太は皆の先頭に立つ。

「討ち入りだ！」

そう言うと、インターホンを押した。

ということだよ

翔太は説明を終えると一息いれる。

その間にも、残りの氷上、折田、佐藤は騒いでいた。

ギヤーギヤーと騒ぎ続ける3人をよそ目に、康介は口を開く。

「話しは分かった……。

頼むから、頼むから帰ってくれ」

力無くうなだれている。

それも仕方ないだろう。穏やかな休日が壊されたのだから。

しかしそんな言葉はどこ吹く風。飄々と折田は言う。

「まあまあ、親睦会って事で楽しもうよ！」

それに続いて翔太も口を開く。

「そうだぜ！それに、康介も休日に1人ぼっちだと淋しいと思って企画したんだ！」

それを聞いた康介は、言葉も出ない、といった面持ちだ。そして、振り絞る様な声で言う。

「なあ翔太、お為ごかしって言葉知ってるか？」

「さあ？」

わからない、といった様に首を傾げる翔太。そんな翔太の変わりに氷上が答える。

「人の為と思わせて、実は自分の為、って感じの意味よね」

「ああ、だいたいあってる。

つまり1人が淋しいのはお前だろ、翔太」

「……、さあ皆！今日は楽しもう！」

翔太は康介の指摘をごまかす様に言う。凶星だったのだろう。

「もう……好きにしてくれ」

康介は疲れきった表情で呟くと、部屋の隅に移動してため息をついた。

するとそこに、氷上が話しかけてくる。

「急に押しかけちゃってゴメンね」

「いや、氷上は皆を止めてくれたんだろ？」

「え……あ、その……」

康介の言葉に、氷上は口ごもる。

「そうか……諸悪の根源は翔太だけかと思ってたが……」

お前もか、というような視線を康介は氷上に向ける。

「け、けど！皆は康介君と仲良くなりたかったんだよ。康介君、最近は私達と一緒にいるけど、まだまだ壁があるから。心は1人ばかりだから。」

ねえ、1人は辛くない？」

康介は、氷上のその言葉に、はっ、としたように顔を上げる。

1人は辛い それは以前康介が思ったこと。それを見透かすような氷上の言葉に驚いたのだ。

そして何より、氷上とあの少女が重なって見えていた。

『1人は辛くない？』

康介は、あの少女に初めて会った時に、そう言われていたのだ。その時の少女の表情と今の氷上の表情は、まったく同じ。重なってしまうのは無理もないだろう。

「康介君？怒ってる？」

氷上は、何も言わずに黙り込んでいる康介に、不安そうに問い掛ける。

康介はそんな氷上を見て、我を取り戻し答える。

「有り難迷惑って知ってるか？」

氷上はそれを聞くと、しょんぼりと下を向く。  
しかし、康介は続けて言う。

「けど、う」

それは消え入る様な小さな声だった。  
それでも、氷上にはしっかりと届いた。

ありがとう、と。

俯いていた氷上は、顔上げて、笑顔でその言葉に答える。

「ええ！」

その後も康介と氷上は、ポツリポツリとだが、会話を続ける。

しばらくすると、翔太が康介に話し掛けに来た。

「なあ、こーチン」

「……こーチンって誰の事だ？」

康介は言う。5人の中に、こーチンと呼ばれてる人はいない。当然の疑問だろう。

「康介のあだ名、愛称だ！良いだろ？こーチン！」

「……」

翔太が答えると、康介は冷たい視線を向ける。恐らく嫌なのだろう。

「そんな目するなよ、こーチン、こーチンってば！なんか言ってよ、こーチン」

翔太は勝手に決めた愛称を連呼する。

「ねえ、こーチン、こーチンこーチン！あれ、続けて言うとなんか厭らしいな！こーチンこーチンこーチン。あはははっ！」

そう言うつと翔太は1人で笑いだした。

いや、氷上も折田も佐藤も、下を向き、肩がプルプルと震えている。

康介はというと、青筋を立ててた。明らかにイライラしているのが見て取れる。

「なあ、こーチン？」

それでも翔太はニヤニヤしながら言い続ける。

そして、康介が口を開く。

「こーチンこーチンって煩いんだよ。続けて言うて厭らしいだど？ お前なんて、名前を短くすると『シヨタ』じゃねえか……なあ、このシヨタ野郎」

完全に怒っている。いや、キレてるといった方が正しいだろう。

翔太はその瞬間、凍りついたように固まった。康介の雰囲気は圧倒されている。

「ぶっはは！シヨタ野郎にこーチン……、ははっ、あはは！」

それを聞いていた折田は、我慢出来ないといった風に笑い出す。

「何笑ってるんだ、折田翼？」

いや、『折れた翼』か。ハッ！イカロスとも呼んでやろうか？」

康介の怒りの矛先は、笑い始めた折田にも向いた。

「ま、まあ、落ち着こうよ、和田君」

佐藤は、込み上げる笑いを必死に抑えながら、宥めるように声をかける。

「佐藤か……、そう言う割には随分と楽しそうだな？」

佐藤瑞葉　なるほど、『砂糖水』はキッチンにでも行ったらどう

だ？」

「なっ  
」

怒りに任せて、次々と新しい呼び名を作る康介。

シヨタ野郎、イカロス、砂糖水、呼び名とするには余りに酷い。

氷上はというと、4人を見ながら肩を震わせている。いや、もはや体が揺れている。それでも笑い声を上げないのは大したものだ。

しかし当事者達は笑えないだろう。不名誉な呼び名ばかりなのだから。

「誰がシヨタ野郎だって！」

事の発端を作り出した翔太が声を張り上げる。

「煩い！シヨタ野郎！」

康介、折れた翼　イカロスとは言ってくれるね」

折田は大声を上げた翔太を怒鳴りつけ、康介に向き直る。しかし、シヨタ野郎と言われた翔太は黙っていなかった。

「んだと！お前の方がよっぽどシヨタ顔じゃねえか！」

「……良い度胸してるね」

そう言つと翔太と折田は喧嘩を始める。

それを横目に佐藤が口を開く。



「ねえ和田君、砂糖水ってどういうこと？」

口調こそ穏やかだが、表情からは怒りがほとばしっている。

「言葉通りだが？事あることにベタベタと付き纏いやがって。砂糖水と形容するに相應しいじゃないか」

「なんですって！」

康介の言葉に、佐藤はとうとう怒りをあらわにする。

そして康介と口論を始め、遂には4人入り乱れての貶し合いへと発展した。

それを見ていた氷上は、流石に止めようと思ったのか、声をかける。

「ちょっと皆、落ち着きなよ！」

すると4人は静かになる。  
が、そこに折田が口を開く。

「氷上は黙っててね？」

ああ、俺達の輪に入りたくて僻<sup>ひが</sup>んでたの？僻<sup>ひが</sup>み、名字通りの行動じゃないか？」

そう言った瞬間、室内の温度が下がった。  
比喩ではなく実際に。

「……へえ、言うじゃない」

氷上から凄まじい冷気が発せられる。

「4人共、頭冷やした方が良いわね」

「え、いや……ちよつ」

ちよつと待つて、折田がそう言おうてした刹那、4人の頭に氷の塊が直撃した。

「なんで俺だけ……」

翔太は部屋の隅で呟く。

その手足には氷の枷が付けられていた。

あの時、翔太を除く3人は、氷の塊をぶつけられただけだったが、翔太だけは追加の制裁を受けたのだ。

言い合いの発端を作り出したのは翔太。当然と言えば当然の報いだろう。

そんな翔太をよそ目に、他の4人は会話を楽しんでいた。

いや、康介だけは少しその輪から外れているが……。それでも翔太達が来た時に比べると、いくらか話すようになっていく。

その表情は、いつもより若干だが晴れ晴れしい。

康介は、こう思っていた。

こんな日も、悪くないな

## 第7話 開校記念日 1（後書き）

誰が予想したか喧嘩イベント。

けど仲良くなるには喧嘩が1番だと思っんです。

## 第8話 開校記念日 2

どれだけ話しこんでいたのだから。陽すでに傾き、夕方になっていた。

「お腹減ったね」

佐藤が、お腹を摩りながら言う。昼ご飯も食べずに、ずっと話していたのだから、それは当然のことだろう。

その証拠に氷上と折田も、同じ様にお腹を摩っている。

「そうね、私もお腹すいたわ」

「俺もだよ、流石に何か食べたいね」

すると、ここぞとばかりに康介が口を開く。

「そうか！じゃあそろそろ解散でいいんじゃないか？」

その声は、心なしか少し弾んで聞こえる。早く解散してほしいのだろう。

こんな日も悪くない、さっきは確かにそう思ったが、基本的に康介は人と深く関わるのを拒絶している。

そんな理由から、長居されるのは好ましくないのだ。

康介がそのまま解散の流れにもっていこうとした時、翔太がその考えを壊すような発言をする。

「いや、解散はしないぜ！なぜなら、今日メインはこれからだから！みんなで祭に行こう！」

「そういえば、今日はお祭りやってたね。新政府誕生30周年祝いだかで。いいじゃん、行こうよ！」

折田が思い出したように話す。

今日、街ではお祭りをやっている。それは新政府誕生30周年の祝賀祭。

30年前に、前政府を今の政府が倒したことを祝うお祭りだ。

「良いわね、行きましようよ！」

「うん、行こう！祭なら食べ物もいっぱいあるし！」

氷上と佐藤も、すでに行く気満々な様子だ。

翔太はその様子を満足そうに見ながら、康介に問い掛ける。

「康介も行くよな！？」

「行かない。4人で行ってくれ」

康介はバツサリと切り捨てた。

それでも諦めずに翔太は、説得しようとする。

「そんなこと言うなよ。皆で楽しもうぜ！」

「だから行かないって」

「康介も腹減ってるだろ」

「減ってるが、祭に行かなくても食えるからな」

しかし康介は、まったく折れる様子がない。

それはそのはず、今いる場所は康介の家だ。出かけずともご飯は食べれるからだ。

「そんなこと……言うなよ。一緒に飯、食いてえじゃんか」

翔太は何故か、泣きそうな表情をしている。泣き落とす作戦だろうか。

そこに折田が口を挟む。

「じゃあさ、とりあえず4人で祭に行つて、ご飯買ったら帰つてきて、ここで皆で食べればいいんじゃない？」

いつの間にか、祭で楽しむという目的が、康介とご飯を食べるという事に趣旨変更されたようだ。

「待て、なんでそうなる。祭で飯食って解散すればいいだろ？わざわざ戻ってくる意味がわからない」

康介にしてみれば、当然の疑問だろう。ご飯を買って戻って来るなんて面倒臭いだけだ。

「こつちが譲歩してるんだから和田君も譲歩しなきゃね？」

佐藤が康介に、諭すように話しかける。口調こそ柔らかいが、言ってる事は目茶苦茶だ。

「譲歩もなにも、俺はこれから予定があるんだ」

「そう、なら仕方ないわね」

残念そうに氷上は気を落とす。

「そうだな、じゃあ帰るか」

そう言つと、翔太は立ち上がり、帰り支度を始めた。

そんな翔太に、康介は話しかける。

「祭に行くんじゃないかったのか？」

「んー、ぶつちやけ康介を誘う口実だったからな！」

「……それは悪かったな」

「いいつて。今日は遊べて満足したから！」

そう話すと、翔太は3人を連れて玄関に向かい、扉の前でそれぞれ挨拶をする。

「それじゃあ、またな！」

「またね！楽しかったわ！」

「じゃあね！」

「また遊ぼうね！」

そして4人は家を出た。

「またな」

康介はその後ろ姿に小さく呟く。

そして部屋に戻ると、ソファーに腰掛けた。

「さて、何するかな」

どうやら予定があるというのは、帰ってもらった為の嘘だったらしい。

しかし、その表情はどこか淋しげに見える。  
明らかに矛盾している。

だが康介自信はその矛盾に気づいた様子はない。

「散歩でも行くか」

そう呟くと、康介も家をあとにした。



家を出て、しばらくしてから折田が口を開く。

「少しは仲良くなれたかな？」

今日の目的は、康介との距離を縮めることだったのだ。その目的を、果たして達成出来たのか気になったようだ。

それに佐藤が満足そうに答える。

「なれたんじゃないかな！」

感情の起伏に乏しい康介が怒り、皆で言い争いをしたのだ。それは、距離が縮んだとも考えられる。      そ

「んー、そうね。だいぶ強引だった気がするけど」

「けど、こうでもしないと康介とは遊べないぜ？」

氷上、翔太が話します。

「確かに、誘っても断られちゃうもんね」

そう言っ て佐藤は、苦笑いをしている。

4人はしばらくそんなことを話しながら帰り道を歩く。  
すると分かれ道に差し掛かった。

「それじゃあ、私と翼はこっちだから」

「じゃあねー！」

佐藤と折田は別れの挨拶をする。

「そっか、またな！」

「ええ、またね」

翔太と氷上がそう返すと、別々を道を歩いて行った。

「もう暗くなっちゃったわね」

氷上が空を見ながら話し掛ける。

「そうだな、危ないし送ってくよ」

太陽は既に沈んでいた。しかし月が出ている訳でもない。所謂、新月だ。

そのせいもあって、辺りはいつも以上に暗い。

「ありがと。じゃあ学校の近くだから、そこまでお願い」

「はいよ！」

2人はそう話すと歩きだし、その時間は掛からずに学校に到着する。

「送ってくれてありがとね」

「いいっていいって！」

2人はそう言うと、それぞれ帰ろうとする。

が、不意に氷上が口を開く。

「ねえ、今なにか聞こえなかった？」

「え、俺にはなにも聞こえなかったけど」

翔太は首を横に振りながら答える。  
が、その時

。

確かに何か音がした。

「……校庭の方からだね」

「ええ、こんな時間に誰がいるのかしら？」

「ちょっと見に行ってみよう」

2人は音のした方へ向かう。学校は休み、なおかつ陽も暮れている。生徒はいないはずなのだ。その学校内から、何か音がしたのが気になったのだ。

そして校庭に着くと、物音の原因らしき物が見えてきた。

「なんだ……あれ」

「ば、バケモノ……」

啞然としながら立ち尽くす。

そこにあつたのは、いや、いたのは、見たこともない生き物。  
ライオンの様にも見えるが、鋭い牙、長い爪、そして甲殻類の様な外皮。確実にライオンのそれとは異なっている。

バケモノと形容するしかないだろう。

「翔太君、逃げよう！」

氷上が声を上げ、急いでその場を離れようとする。  
しかしバケモノは、その声で2人に気づいてしまった。

「う……あ」

バケモノと視線が合った翔太は、恐怖で硬直してしまう。

そんな翔太を目掛け、バケモノが襲い掛かる。

「翔太君！」

氷上が声を張り上げ、動く気配のない翔太の前に氷の壁を作り出すと、バケモノは突然現れたそれに勢い良く突っ込んでしまい、動きを止める。

それ見て、ようやく翔太が動き出す。

「逃げるぞ！」

そう言つて、氷上の手を掴み、バケモノと逆方向に走る。するとバケモノは唸り声を上げ、追いかけ始めた。

「　　っ、速いつ」

「追いつかれるわよ！」

2人は懸命に走る。だが、バケモノは凄まじい速度で距離を詰めていた。

「くっそ！」

翔太は毒づきながらバケモノの方へ、手を横薙に振るう。それと同時に突風が吹き荒れる。

しかしバケモノは、少し動きを鈍らせただけ。ほとんど影響を受けない、鋭い爪を振りかざす。

それに光景に翔太は、思わず目を瞑ってしまう。

やられる！

そう思った瞬間、ガギツという音を立て、爪が氷の壁に阻まれて止まった。

「ありがとう！」

翔太は、礼を言いながらバケモノと距離をとる。

氷上は翔太とバケモノが離れたのを確認すると攻撃を仕掛ける。

「これでもっ、くらえ！」

そう声を張り上げると幾つかの氷の塊が作り出され、バケモノに飛んでいき、鈍い音を立てて直撃する。

「そんな……」

氷上は呆然とする。

直撃したにも関わらず、傷1つついていなかったのだ。

バケモノは氷上に狙いを変えて勢いをつけて突進していく。

「彩香！」

翔太は呆然としたままの氷上のもとに走り出すが、その間にもバケモノは氷上を切り裂こうとしていた。

「間に、合え！」

風の力で加速し、バケモノが爪を突き立てる直前に、氷上のことを横から抱える様に飛び込む。

「きゃっ！」

突然の衝撃に氷上は小さく悲鳴を上げて、翔太と共に倒れ込んだ。氷上は直ぐに体を起こそうとするが、翔太がもたれ掛かれる様に被さっているので、なかなか上手く動けない。

そして、どいて貰おうと声を掛けようとした時、翔太が血を流してぐったりしていることに気がついた。

「し、翔太君？」

呼び掛けるが、ピクリとも動かない。

「ねえ！翔太君！嘘でしょ！？」

そんな2人に、再びバケモノが襲い掛かる。

「くっ」

その場から動けない氷上は、とっさに氷の壁を自分達を囲うように作り出し、突進を阻む。

しかし阻んだのも束の間、氷の壁に亀裂が入り始める。

バケモノが何度も何度も、体当たりをしているのだ。

そして、氷の壁が硝子のように碎け散った。

「そん、な……」

氷上は絶望の表情を浮かべる。それとは対称的に、バケモノは勝利を確信したかのように唸ると、鋭い爪を掲げ　振り下ろす。

氷上は、反射的に倒れている翔太を庇うように抱き寄せ、死を覚悟したように目を閉じた。

どのくらいたっただろうか。いや、実際には数秒した経過していないが、

おかしい

氷上はそう思い、恐る恐る目を開く。  
爪は確かに振り降ろされたはずなのに、痛みも何も感じなかったのだ。

そして目に映ったのは、バケモノの攻撃を素手で受け止めている、見知った人の後ろ姿。

その後ろ姿に声を賭ける。

「康介、君？」

「ああ、……大丈夫か？」

「康介君！翔太君が！」

酷く断片的な言葉。しかし康介は理解したように、沈痛な面持ちでそれに答える。

「凍らせて血を止めるんだ」

そう言うと、バケモノを蹴り飛ばし、それを追いかける。氷上達から引き離す為の行動だろう。

バケモノは、蹴られた怒りからか、雄叫びをあげる。

「グオアアア！」

そして、凄まじい速度で康介に突っ込んで行く。その速度は怒り



からか、先程よりも更に速い。

康介はそれを、上に跳ぶことで躲けて見せた。そして空中から一条の雷撃を放つ。その雷撃は、翔太と戦った時とは比べ物にならない程、強力に感じられる。

その雷の如き雷撃は、

ドオオオン！

と爆発にも似た轟音を立ててバケモノに襲い掛かった。

辺りに煙りが立ち込める。

「……凄い、康介君凄いよ！」

翔太の止血を終え、戦いを見守っていた氷上が言う。

「いや、まだ終わってない」

康介はそう言いながら、バケモノがいた場所を凝視し続ける。

煙りが晴れると、そこにはバケモノが立っていた。ところどころに焦げた跡がつき、ボロボロではあるが、確かに生きていたのだ。そして再び、康介に襲い掛かる。

それを見た康介は、忌ま忌ましそうに呟く。

「外殻が受け流したか……なら！」

言いながら電気を放出し、それが無数の矢を象る。かたじ

「内から焼き殺してやる！」

その声と同時に無数の矢がバケモノに降り注ぐ。固い外殻を穿ち、突き刺さり、内部に電撃が流される。

「ガアアアア！」

バケモノは苦しそうな咆哮あげる。しかしその声は直ぐに聞こえなくなり、ドスン、と音を立てて倒れた。

それを見ながら康介は呟く。

「手を出した報いだ」

何に、とは言わなかったが、恐らく翔太と、そして何より氷上のことだろう。襲われていた氷上を、再びあの少女と重ねていたのだ。

康介は、動かなくなったバケモノを見下す。そして何か気づいたように小さく言う。

「これは……」

そこに氷上が駆け寄って来る。

「康介君！倒したのね！けどこんなバケモノがホントにいたなんて……」

そう言って考え込む。

噂の正体、それがこのバケモノだったのだろう。しかし本来なら存在するはずのない生物。発生源などは謎に包まれたままだ。

「それよりも、翔太の治療が先だ」

「ええ！」

康介のその言葉に氷上は思考を打ち切って、2人は翔太のもとに駆けていく。

「不幸中の幸いだな、傷はそんなに深くない。気を失ってるだけだ」

翔太の怪我を確認し、康介が言う。

「よかった……」

その言葉を聞くと、氷上は安堵の表情を見せた。

その時、不意に

パチパチパチと、拍手のような音が聞こえた。

2人がびつくりしたように音のした方を振り返ると、そこには、暗くてハッキリとはわからないが、近付いて来る男のような影があった。

2人は固唾を飲み、表情を堅くする。

互いが視認出来る距離になると、男は拍手を止めて、口を開く。

「いやー、まさか学生があれを倒すとは驚いたよ」

軽い口調で、ニヤリと笑いながら。

## 第9話 開校記念日 3

「なんだお前は？あのバケモノと関係あるのか？」

康介は敵意を剥き出しにしながら問い掛ける。男からただならぬ雰囲気を感じ取ったのだ。氷上はその雰囲気に当てられ、声も出せないでいる。

それに対し、男は茶化すように返す。

「怖いねえ。にしても君、強いね。けどまだ甘いかな。アレ、まだ死んでないよ」

そう言っバケモノを指差すと、火が着いて見る見るうちに灰へと変わっていく。

康介はその光景に驚きつつも、それを悟られないよう強気に言う。

「そんなことはどうだっていい。質問に答えろ」

男の雰囲気に吞まれそうになるのを堪えながら睨みつけた。

しかし男は意に介した様子もなく話し続ける。

「君の戦い振りを見てただけど、1つ腑に落ちないんだよねえ。素手でアレの攻撃を受け止める身体能力がさ。」

ああ、まさか……そう言うことが。君が報告にあった学生か」

質問には答えず、1人で納得したように頷くと再び口を開く。

「なんで君が箱庭にいるんだい？」

「……なんの話した？」

「なんだ、何も知らないんだね」

わからない、といった反応をする康介に、呆れたような素振りをした。そして今度はニヤリと笑みを浮かべる。

「そついえば、今度は護れたんだね」

それを聞いた瞬間、康介は男に雷撃を飛ばす。しかしそれは簡単に避けられてしまう。

避けられたことも気にせずに、康介は激昂したようにしたように叫ぶ。

「お前は何を知っている！ 答えろ！」

「さあ？ どうだろうね？」

まあ、最初の質問には答えてあげるよ。『トロイ』俺はそのメンバーだ。名前は、そうだね……『氷炎』と言えば伝わるよね？」

笑いながらそう言う男は消えるように去って行った。

「くそつ、なんなんだ」

康介は毒づく。するとドサツ、という音が聞こえ、振り返ると氷

上が倒れていた。

「あいつが消えて緊張の糸が切れたか……」

氷上はずっと緊張状態だったのが、あの男がいなくなったことで一気に緩み、精神的な疲労から気を失ったのだろう。

康介は苦苦しい表情で呟くと、気を失った氷上と翔太を抱え上げ、その場を跡にした。

家に戻り、翔太の手当てをして2人を布団に寝かせた後、康介は難しい表情で考え込んでいた。

「あのバケモノ、タグが着いてたな」

タグが着いているということは管理している者が、いや、管理している組織があるのだろう。そして、あんなバケモノが自然に産まれるとは考え難く、人口的に造られた生物以外に有り得ない。

だとするとその組織は、実験を行える施設を保有し、資金、人材の両方が揃っているかなりの規模の組織だ。

「トロイが造ったものか？」

男が所属していると言った『トロイ』は、反政府のテロ組織で、今までに幾つもの政府関連施設を壊滅させている。規模も他の組織よりは大きく、日本最大の犯罪者集団だ。

それを考慮すると、康介の疑問は当然のこと。確証はないが信憑性は高い。

「俺が箱庭にいるのは、おかしいのか？」

あの男は『なぜ君が箱庭にいる？』と言っていた。康介が箱庭で暮らしていることに、何か不自然なことでもあるのだろうか。

能力者が箱庭にいるのは当たり前のことで、外にいる能力者は軍属か『トロイ』のような犯罪者だけ。何も不自然はないはずなのだ。

「あいつは俺の過去を知っていた……、あの時の襲撃はトロイの仕業か？」

『今度は護れたんだね』と言っていた。ということは、康介の過去を少なからず知っているのだろう。そうすると、何らかの形で関わっていた可能性が高い。『トロイ』の仕業と考えるのが普通だ。

幾つかの情報は手に入りはしたが、まだまだ話しは繋がらなく、憶測ばかりだ。考えていても答えは出ずに、時間ばかりが過ぎて行く。

「はあ……」

康介は疲れた表情でため息をつく、窓際に置いてある椅子に腰掛ける。

「いったい、何が起きているんだ」

今回のことは偶然なのか、それとも必然なのか。どんなことに巻



き込まれたのか。トロイの目的は何か。考えだせばキリがない。

康介が思考を打ち切って、窓の外を眺めると、夜はすっかり更けてしまっていた。

そしてそのまま、ボーツとしたように動かなくなり、夜はだんだんと明けていった。

## 第9話 開校記念日 3（後書き）

これで物語のプロローグの部分が終了です。

ここから先は盛り上がって行くように頑張ります！

感想、ご指摘、お待ちしております！

## 第10話 望む力

窓から差し込む眩しい日差しに康介は、ハッとする。いつの間にか寝ていたようだ。

時計の針はまだ6時を回ったばかり、寝たといっても微睡んだ程度だろう。

康介は立ち上がり大きく伸びをすると、キッチンに移動して濃いめのコーヒーを入れる。

コーヒーを片手にリビングに戻ると、眠ってる氷上と翔太に視線を向けた。

「まだ起きないのか」

その表情は少し不安げに見える。

「……学校は休むしかないな」

2人目を覚まさないのでは仕方がないだろう。そして康介も疲れがとれておらず、強い倦怠感に襲われていた。

ドサツと椅子に腰掛け、テレビをつけ、朝のニュースを見る。

「昨日のことは……やってないか」

激く能力を行使して轟音が発せられてはいたが、バケモノは灰になってしまっていた。残っているのは地面の焦げ目くらいな為、音に気づいた人がいても、イタズラ程度にしか思わなかったのだろう。

テレビの音で氷上が目覚めます。

「んう……ん、ここは……？」

目が覚めきつてないのか、目を擦りながらボーッとしている。

「ようやく起きたか」

康介がまだウトウトとしている氷上に声を駆けると、氷上はびっくりしたように肩を上げて声を上擦らせる。

「こ、康介君！？」

「ああ」

「そっか、あのあと……気を失って……」

ポツリポツリと声を漏らす。ゆっくりと気を失う前のことを思いだしているようだ。

「思い出したか？」

「ええ、夢じゃなかったのね……、そうだ！翔太君は！？」

「そこで寝てる」

傷を負った翔太を思い出し、心配したように問い掛ける氷上に、視線をその隣にある布団に向けながら答えた。

そこには痛みもないように、穏やかな表情で眠ってる翔太が見える。

それを確認した氷上は、安心したように気を緩めて呟く。

「よかった」

「治療もしたし、そのうち起きるだろ」

そう言いながら康介はコップに入った水を差し出す。氷上は、ありがとう、といった風な面持ちでそれを受け取ると、よほど喉が渴いていたのか一気に飲み干す。

「ねえ、あの男、トロイって言ってたわよね」

「ああ、けどその話は翔太が起きてからの方がいいだろ」

昨夜のことを話したす氷上を康介はそう言って止める。確かに話すなら3人でしたほうが効率がいい。それに同意するように氷上は頷く。

「ねえ、康介君」

「なんだ？」

「ありがとう」

氷上にとって康介は命の恩人だ。あの時に康介が来なければ氷上も翔太も無事ではなかったはず。それに対してのお礼を言う。

康介はその言葉ぬ苦い表情をする。確かに氷上を助けたが、その

時の康介には氷上があの子に見えていた。果してそれは氷上を助けたと言えるのだろうか。

そのことに罪悪感を感じているのか、小さな声で答える。

「……気にするな」

康介は氷上を直視することを出来ずに目を逸らしてしまうが、氷上はそれを照れていると思ったのか、そんな気持ちに気づいた様子もなく、微笑みながら康介を見つめている。

ちょうど会話がなくなったその時に、眠っていた翔太が体を起こし、キョロキョロと周りを見渡します。

「翔太君！目覚ましたのね！」

嬉しそうに翔太に近づいて行く。大丈夫だとわかっていても、目を覚ますまでは不安だったのだ。

翔太もまた、そんな様子の氷上を見ると、安心した表情をする。

「彩香？よかった、無事だったんだ」

「ええ、翔太君と康介が護ってくれたから」

「康介が？」

「ああ。何があったか説明するよ」

翔太は気を失ってからのことを何も知らない為、氷上の言葉に首を傾げた。

そんな翔太に康介は、事の顛末を説明し始める。

説明が終わると、翔太が康介に向き直る。

「康介には助けられたみたいだな、ありがとう」

「いや、気にするな。たまたま通り掛かったただけだしな」

珍しく真面目な顔をしながらお礼を言う翔太に、康介はそう返す。通り掛かっただけ、それは事実。物音が気になり、近づいて行ったら2人が襲われていたのを見つけ、とっさに助けに入ったのだ。

「それにしても、トロイに氷炎、バケモノとの関連性……随分と物騒な話しだな」

「翔太君は氷炎について何か知ってる？」

渋い表情をしながら、大きくため息をつく翔太に、氷上が問い掛ける。

すると翔太は驚いたように話します。

「知ってるものにも、めちゃくちや有名だぜ？なんせ、最初に発見された能力者だからな。トロイでの破壊活動もあるし」

「そう……知らなかったわ」

「俺も初めて知ったな」

「知らなかったのかよ!？」

氷上と康介の言葉に、翔太は若干だが呆れたような素振りを見せる。だが、直ぐに真面目な表情になり2人に問い掛ける。

「なあ、これからどうする？」

これから、とは今後の動きについてだ。偶然ながら、バケモノの存在やトロイについて知ってしまった。そのことに関してだろう。

その質問に、康介が少し考え込んでから答える。

「どうするも何も、巻き込まれないように注意する位しかないだろう。近々、何か大事が起きるだろうが」

「そうね、巻き込まれないようにってのが難しいけど」

確かにその通りだ。いろいろな事を知りはしたが、それを理解した訳ではない。相手の目的も何も分からないのだから。

氷上もそれに同意見のように頷いている。

すると翔太が何か決心したように康介に向き直る。

「なあ康介、俺を鍛えてくれないか？」

「唐突だな。どうしてだ？」

「もし巻き込まれた時、それを退ける力が必要だろ？」

「それはそうだか……」



「それに、今回俺は護られるだけだった……。氷上に護られ、康介に護られ……。そんなのは嫌なんだ！」

翔太は拳を握り絞めながら言う。

「そんな事ないわ！翔太君は身を挺して護ってくれたじゃない！」

「けど、その後に康介が来なかったら俺達は助からなかった」

「それは……」

氷上が否定するが、翔太は自分の力のなさを悔やむように言い、俯いた。

それを見た康介は諦めたように口を開く。

「……わかった。けど俺が教えられる事は少ないぞ？」

「それでもいい。ありがとう！」

翔太は俯いていた顔を勢い良く上げると、嬉しいそうに言う。

「けど鍛えるって、何するの？実践とか？」

氷上が問い掛ける。

「いや、実践よりもまずは能力の使い方だ」

「「能力の使い方？」」

康介の言葉に2人は首を傾げる。

「ああ。とりあえず場所を変えよう。街の外れに、廃棄された区画がある。そこなら人もいないだろ」

「そうだな」

「そうね」

そう話すと3人は家を出た。

目的の場所に着くと、そこには荒れ果てたビルや家屋が建ち並んでいて、人影もまったく見られない。

「さてと、さっき能力の使い方って言ったよな？まず、それについて説明する」

康介は2人が頷くのを待ってから話し出す。

「使い方ってのはそのままの意味だ。たぶん2人は使い方が悪いんだよ。」

バケモノと戦ったときに、どんな攻撃をした？」

「突風を放ったかな」

「私は氷の塊をぶつけたわね」

2人が答えると康介は、やっぱりな、と言うような反応する。

「それだ、それ。2人には工夫が足りない。

例えば台風の風と、竜巻だったら、どちらの方が被害が大きいと思う？

雷が振って来るのと洞窟の天井から氷柱が落ちて来るのは、どちらが危ない？」

「……竜巻だな」

「……氷柱ね」

「そう言うことだ。突風に殺傷力なんて殆どない。戦うなら竜巻を作りだすべきだろ。

氷上もだ。氷の塊よりも鋭い氷柱を飛ばした方がいい」

「成る程ね。それが使い方ってことか」

「そう言うことね」

その説明に翔太と氷上は納得したように頷く。

「能力を使えるのと使いこなせるとでは、意味がまったく違う。2人共ただ使ってるだけだ」

康介は2人に辛辣な言葉をぶつける。

「確かに……そう、だな」

「何も言えないわね」

翔太と氷上は歯切れ悪く言うと言いついてしまう。

「落ち込んでも何もはじらないぞ？説明は終わりだ。後は練習」

康介は手をパンパンと叩きながら2人を促す。

翔太と氷上は頷くと、それぞれ練習を始めた。

翔太は風の渦を徐々に大きく、そして強くしていつて小規模な竜巻を作り出す。

氷上は氷を鋭く尖った氷柱に象り、数を増やしていく。

2人はしばらくそれを続けていると、だんだんと正確に作り出せるようになってきた。

すると、氷上が動きを止めて康介に話し掛ける。

「ねえ康介君。確かに威力は強いんだけど、時間が掛かり過ぎるわ」

「確かに、俺はそれが理由であの時は模擬戦の時の技を使えなかったからな」

翔太も氷上に同意見のように言う。

「まあそうだろうな。」

発動までの時間を縮めるコツはイメージだ。明確で強いイメージが出来れば、能力もそれに呼応する」

康介はそう答えた。

能力とは、能力者のイメージが現実となるもの。風の能力者が竜巻をイメージすると、実際に竜巻ができる。しかしイメージするものが複雑だったり、細部までしつかりすると、その分発動が遅くなるのだ。

その為、早く発動させるには明確でしつかりとしたイメージを素早く行う必要がある。

その康介の言葉に、氷上が渋い表情をしながら言う。

「それが出来たら苦労はないわよ」

「その為の言葉だ」

「言葉？」

翔太と氷上は首を傾げる。

「イメージを言葉に出すんだ。例えば、竜巻だったら『渦巻け』とかな。頭だけでイメージするよりも、それを連想出来る言葉を口にしながらイメージした方が早くできる」

康介が話し終わると、翔太はそれを実践してみる。

「渦巻け」

すると、確かに先程よりも早く竜巻が構成された。

「おお！ホントだ！」

翔太は驚いたように声を上げる。するとそれを見た氷上が、その隣で能力を使う。

「貫け、氷柱」

それは翔太と同様に、先程よりも早く正確に構築された。

「口に出した方が、パツと頭に浮かぶだろ？」

「ええ」

「そうだな」

康介の言葉に2人は納得したように返事をし、翔太はそのまま続けて言う。

「まるでファンタジーの魔法の詠唱みたいだな」

「実際似たようなものだ。単純なものなら一言でいいが、複雑なもの言葉を増やした方が効率がいいからな」

「成る程、確かにそうよね」

その説明に氷上が頷く。更に康介は続けて話す。

「後は、技に名前をつける事だな。馬鹿らしく思えても大事な事だ。名前をつける事で、その技に対しての固定概念が出来る」

「確かにそうすれば、技名を言うだけで、直ぐにイメージが浮かぶな」

翔太が理解したように言う。

「ああ、そう言うことだ。」

まあ、俺に教えられるのはこのくらいだな。後は各自の練習と工夫だ」

康介はそう言うのと、長々と説明した疲れからか、ふっと一息つく。

「ありがとな、勉強になったよ」

「私も勉強になったわ。ありがとね、康介君」

「ああ。」

今日はもういいだろ。行くぞ」

康介はそう返すと歩き出す。

1人で進んで行く康介に、翔太と氷上は慌てて追いかける。

3人は康介の家の前に立っていた。

しかし、誰もそこから動かない。しばらく沈黙が続き、それを打ち破るように康介が口を開く。

「2人共、なんでここにいるんだ？」

「さっき康介が『行くぞ』って言ったからだぜ！」

翔太は、あっけらかんと答える。

「……」

その言葉に康介は眉をひそめるが、そう言った事は確かなので何も言えなくなった。

「あつ、でも私は帰るよ」

「そうか」

「ええ、それじゃあ康介君、翔太君、じゃあね！」

「ああ」

「じゃあね！」

康介と翔太がそう返事をする、氷上は歩きだした。

「で、翔太、お前はいつまでここにいるんだ？」

氷上を見送った後、康介がさも当然のようにその場に残っている翔太に話し掛ける。

「そんな嫌そうな顔すんなよ。まあ、少し話そうぜ！」

「……仕方ない」

康介はそう言うと言の中に入り、翔太もそれに続いて入って行っ



た。

2人はリビングのソファーに腰掛け、翔太が口を開く。

「なあ、なんで康介はそんなに強いんだ？」

「強くなんかないさ」

翔太は、なんだ急に、と言うような反応をしながら答える。

「けど俺よりは強い。かなり鍛えたんだろ？なんの為に、そんなに力を求めたのかな、って気になってね」

「翔太は今なんの為に力を求めてる？」

「護られるだけが嫌だから。誰かを護れる程の力が欲しい」

「……俺もそれと似たようなものだった」

康介は、どこか淋しいげな表情をしながら言う。

「康介も……？それで、護れたのか？」

翔太は少し驚いたような反応をした後、真剣な眼差しで問い掛けた。

すると康介は、悔いるような、それでいて淋しいような、何とも言えない複雑で沈痛な表情で答える。

「俺は……遅かったんだ、何もかも……」

「えっ……？」

「話しは終わりだ」

「そう、だな……。じゃあそろそろ帰るよ」

翔太は康介のその表情に、それ以上なにも聞くことが出来ずに、  
そう言って立ち上がる。

「それじゃあな」

「ああ」

そう言葉を交わすと、翔太は帰って行った。

「俺はなんであんな事を言ったんだ……、らしくないな」

1人になった康介はそう呟くと、複雑な表情をする。

「護る力……か。俺は、今度こそ、護れるのか？  
あいつらを……」

自分の手を見ながら言うその姿は酷く弱々しく見えた。

## 第11話 襲撃

翌日の放課後、人がいなくなった教室で康介、翔太、氷上の3人は、佐藤に問い詰められていた。

「3人揃ってなんで昨日学校来なかったの!？」

「寝坊した!」

いきり立つ佐藤に翔太が元気良く答える。

「揃って寝坊なんて凄い偶然だね?」

佐藤に笑顔で言う。いや、口は笑っているが、目は笑っていない。そんな佐藤に、翔太と氷上が顔を引き攣らせながら答える。

「す、凄い偶然だな!」

「ええ、ホントよね」

そのかたわら、康介と折田が話をしだした。

「なんで佐藤はあんなに怒ってるんだ?」

「仲間外れにされたと思ってるんじゃない? 2人が下手な嘘ついてるしね」

折田が呆れたような仕草をしながら言う。

「寝坊か。確かに下手なんてもんじゃないな」

当事者のはずの康介が、まるで関係ないかのように話している。

そこに佐藤が声を掛けてくる。

「和田くん、なに無関係なふりしてるの？」

「事実、無関係だから。佐藤が帰る時に予定があるって言ったろ。それが長引いてたんだ」

「むう……」

しれつと答える康介。佐藤はそれ以上康介に何も言えなくなってしまった。

翔太と氷上は、そんな康介を『裏切り者』と言わんばかりの目つきで見えるが、康介は氣にとめた様子もなく口を開く。

「もう帰っていいか？」

その発言に、翔太が驚いた顔をして呟く。

「『帰る』じゃなくて『帰っていいか？』……。珍しいな」

確かに珍しい。康介なら問答無用で『帰る』と言うところだろう。

すると佐藤が康介を引き止める。

「まだ帰っちゃダメだよ！これから皆でご飯食へに行くんだから！」

「え？なにそれ、初耳だよ？」

佐藤の発言に折田が首を傾げて言う。翔太も氷上も同じような反応をしているところを見ると、皆知らなかったのだろう。

「だって今言っただもん！」

佐藤は折田に、しゃあしゃあと答える。

「まあ、私は良いわよ」

「さすが彩香！話が分かる！皆も行くでしょ？」 氷上が答えると、それを皮切りに佐藤が残りの3人を誘いだす。

「俺も良いぜ」

「俺も行こうかな」

翔太と俺もそう答える。それに満足そうな顔をしながら佐藤は康介に聞く。

「和田くんも行くよね！？」

佐藤は目をキラキラさせながら康介を見ている。いや、他の3人もどこか期待しているような表情だ。

その状況に康介の顔が引き攣らせ、黙り込む。『行かない』と言える雰囲気ではない。

康介はきつと、こう思っているだろう。『勘弁してくれ』と。

黙っていても状況は変わらない。康介は意を決したように口を開く。

「行けばいいんだろ、行けば」

そう言う口調はどこか投げ遣りだ。

しかしその言葉で4人は盛り上がった。『康介が陥落した』や『雨が降る』や『鉄仮面がとれた』など、いろいろ言っている。

そんな4人に、康介がため息つきながら話し掛ける。

「行かないなら帰るぞ」

すると4人は慌てて会話を止めて、佐藤が返事をする。

「待つて待つて、行くから帰らないで！」

それに続くように氷上が言う。

「それじゃあ行こう！」

それに翔太と折田は返事をして、4人は喜喜として移動を始める。康介はそれに渋々ついて行った。

着いた先はファミレス。皆はメニューを見ていた。

「なに食べる？」

翔太が皆に問い掛ける。それに氷上が答える。

「私は和風パスタね、大盛りの」

皆が急に静まり返る。大盛りの部分で驚いているのだ。

「あら？皆黙ってどうしたの？」

「な、なんでもないよ。私はハンバーグで」

不思議そうな顔をしている氷上に、佐藤がそう返す。

次に折田がメニューから目を離し、答える。

「俺はグラタン！」

「康介は何にするんだ？」

「……ショートケーキ」

翔太の問い掛けに康介はそう答える。その瞬間、皆が目を見開いた。まるで、有り得ないものを見たかのように。

理由は簡単。意外過ぎるからだ。康介にショートケーキ、どう考えても異色な組み合わせ。そんな4人の心境を知らない康介は首を傾げる。

「どうした？」

「何でもないよ」

折田が答える。その顔は少しニヤついていた。

康介は怪訝な顔をするが、翔太の声によって遮られる。

「それじゃあ頼むか！」

そう言うつと翔太が店員を呼ぶと、それぞれが注文をして、最後にドリンクバーを5つ頼む。

「皆なに飲む？取って来るよ」

翔太がそう言うつて立ち上がると、それぞれ飲みたい物を伝えだす。

「メロンソーダ！」

「あつ、俺もそれ！」

佐藤と折田が言う。

「康介君はコーヒーでしょ？」

「ああ、氷上はオレンジジュースか？」

「ええ、もちろん」

康介と氷上がそんな会話をする。

「え、どういうこと！？なんで2人は通じ合ってるの！？」



翔太がその会話に驚き、口を挟む。

それに康介と氷上は『しまった』というような反応を見せる。以前2人でファミレスに行ったことを、皆に言っただけだったのだ。

「なにやら怪しいな。まあ飲みながらゆっくりと聞こうじゃないか」

翔太はニヤリと笑うと飲み物を取りに行く。

飲み物が全員に行き渡ると、翔太が口を開く。

「で、なにがあつたんだ？」

ニヤニヤしながら康介と氷上に問い掛ける。

「別になにもない」

「そんな訳ないよね？」

康介が否定するも、折田に切つて捨てられる。そして観念したように氷上がその時の事を話し出す。

あの日の事を話し終わると、折田が口を開く。

「康介も意外と手が早いね」

ニヤつきながら、からかうように言う。

「そうかもな。いくらチンピラとはいえ、問答無用で気絶させる」とはなかった」

「え……そうじゃなくて」

「なんだ？」

会話が噛み合わない。その様子を見た佐藤が康介に話し掛ける。

「和田くん、わかってて言ってる？」

「ああ」

「わかって言ってたんだ！？」

肯定した康介に折田が突っ込みを入れる。

そこに翔太が口を開く。

「しかし2人はデート済みだったとはびっくりだ！」

「え、ちょ……、デートじゃないわよ」

氷上はそう言うと、照れてしまったのか恥ずかしそうに俯く。  
そんな氷上に追い討ちをかけるように翔太が言う。

「じゃあ逢瀬？」

「同じようなものじゃない」

「同衾？」

「なっ、なんでそうなるのよ！？」

氷上の顔はみるみる赤に染まっていく。

それを面白がって、翔太が更にからかおうとすると、タイミング良く料理が運ばれてきた。氷上は翔太のからかいが遮られ、ホッとした表情をすると、ここぞとばかりに話題を変える。

「さ、早く食べましょ」

その言葉で他の4人も食べ始める。翔太だけは氷上をからかおうとしたが、康介に睨まれて渋々食べ始めた。

5人は会話もそこそこに、ご飯を食べている。

「氷上、それ食べきれるのか？」

康介が大盛りのパスタに目をやりながら話し掛ける。すると氷上は、食べたがっていると勘違いしたのか、パスタを守るようにしながら答える。

「あげないわよ」

「彩香って意外と大食いだね！」

氷上の食いつぶりを見た佐藤が、笑いながら言う。

「そんなないわ。普通よ普通。康介君はケーキだけで足りるの？」

「そんなに腹減ってないからな」

そんな取り止めのない話しを続けているうちに、皆食べ終わる。

「そろそろ解散するか！」

「ええ」

「そうだね」

翔太がそう言うのと、皆は満足したのか、頷くき返事をする。

5人は、会計を済ませると店を出る。

外に出ると、康介が辺りをキョロキョロと見渡しだした。それを不思議に思った氷上が話し掛ける。

「康介君、どうかしたの？」

「いや、何でもない。じゃあな」

「え、ええ。またね」

康介は歩き出す。その後ろ姿を見ながら氷上は首を傾げていた。

その後、残った4人も口々に別れ際に挨拶して、それぞれ帰路につく。

皆、楽しめた事もあり、満足そうな表情を浮かべていた。

しかし康介だけは違い、難しい表情をしている。厳密に言うと店を出た時に表情が変わったのだ。

康介はしばらく歩くと、普段は入らない裏道に入る。

そして少し進んだ所で急に立ち止まった。そこは暗く、人気もない。しかし康介は誰もいないはずのその場所で、誰かに話し掛ける

ように言う。

「そろそろ出て来いよ。いるんだろ？」

すると、暗がりの中から1人の男が姿を現した。全身を黒い服で包んだ出で立ち。良く見なければわからないほど、闇と同化している。

「俺になんの用だ？店を出た時から、ずっと俺に視線を向けてたんだから、なにかあるんだろ？」

康介は男に問い掛けた。しかし男はそれに答えず、康介に質問を投げかける。

「……和田康介か？」

「ああ、そうだ　くっ！？」

答えた瞬間、康介を背後からの衝撃が襲った。それによって体制を崩し、片膝をついてしまう。

すぐさま体制を立て直すと康介は何かを感じたように、即座に前へ転がるように跳ぶ。すると、一瞬前まで康介がいた所に、空気を裂く音と共に、ナイフが一線した。

康介は男と距離をとり、問い掛ける。

「いきなりだな……。お前『トロイ』か？何が目的だ？」

「……答える義理はない」

男はそれだけ言うと、康介に向かって走りだす。

互いが間合いに入った瞬間、康介がカウンターのように拳を突き出す。男はそれを避ける。

否、避けたのではなく、煙のように消えた。

その事に驚く暇もなく、横からナイフが襲い掛かった。

康介はとっさに体を反らしてそれを躲すと、雷撃を放って反撃する。

が、男は既にそこにはいなかった。

そこにあつたのは、辺りに広がる闇。暗く悪い視界と捕らえられない敵に康介は舌打ちをすると、雷を球状にして雷球を作り出し、それを自身の周りに浮かべて辺りを照らす。

明るくなったそこに見えたのは、康介を取り囲むように展開している10人の男達の姿。

その光景に康介は渋い表情をする。

10対1、それは逃げる事すら容易じゃない。

その男達は一斉にナイフを構え、康介に迫る。

それを妨げる為、康介は雷球から雨のような雷撃を降らせる事で、全員に攻撃を仕掛けるが、男達はバックステップで距離を取り、それを避ける。

その隙に康介は雷球の数を増やし、それを操作して男達を狙う。雷球の数は1人につき5個程、それが凄まじい速さで男達に迫る。

直撃。

確実に捕らえた。避けれるタイミングではない。

しかし実際は、男達に雷球が当たることはなかった。  
すり抜けたのだ。雷球は男達をすり抜け、当たらなかった。

その事に康介は驚愕し、目を見開く。

瞬間、康介の背中に鋭い痛みが走る。

「があ！」

振り返ると、そこには血の着いたナイフを手にした、11人目の男。その男が康介を切り付けたのだ。

康介は痛みを堪え、その男に一条の雷撃を放つ。すると、今度は消える事も、すり抜ける事もなくその男を掠め、服に小さな焦げ目を作る。

「当たった……」

康介は攻撃が当たった事に驚き、呟く。  
そしてハッとしたように男達に視界を向ける。

「そうか、幻術か」

「それがわかった所で何も変わらない」

男達は、そう言うと康介に踊りかかる。

攻め立てる11の斬撃。

嵐のような猛攻。

絶妙に虚実を組み合わせた乱舞。

男達は激しく動き続けている為、実体と幻術が見分けられない。  
必然的に康介はその全てを捌かなければならないが、そんなことは出来るはずもなく、少しずつ傷が増えていく。

反撃する暇などない。少しでも防御を疎かにすれば、即座にナイフが康介を貫くだろう。

しかし、このままでは死を待つだけ。

「あああああ！」

康介は雄叫びを上げながら、玉砕覚悟で雷撃を放つ。

瞬く閃光。

しかしそれは幻術を貫くだけで、男に当たらない。

男は攻撃後の隙をつき、康介の背中を切り付ける。

「ぐっ！」

康介は焼け付く痛みから、うめき声を上げ、後方に向けてがむしやらの腕を振るう。



男はそれを難無く躲し距離を取ると、康介は限界を迎えたように膝を折り、地面に手をつく。

「はあっはあっ」

肩で息をしながら男を見上げる。

「限界だな」

男はそう言うと、康介を包囲するように広がり、近づいていく。

康介に手が届く位置まで進むと、一斉にナイフ振り上げる。

「終わりだ」

「……どうだかな」

康介は薄い笑みを浮かべる。

「死を目前に狂ったか？」

「俺はこの瞬間を待っていた」

康介はそう言いながら上を見る。

そこには、おびただしい数の雷球が浮いていた。

その雷球は、即座に囲うように展開され、退路を塞ぐ。

「どれが本物かわからないが、とどめを刺す瞬間なら流石に俺の近くに  
いるだろ？」

「貴様、最初からこれを狙って……」

「ああ。途中から反撃に雷球を使わなかったのは、お前の意識から外す為だ。」

「さあ、終わりだ」

康介が言った瞬間、全ての雷球から電撃が発せられる。

一つ一つの雷撃が無数に枝分かれし、無造作に飛び交う。

その場所一帯が電撃で埋め尽くされているような光景。

逃げ場などあるはずもない。幻術もろとも巻き込んでいく。

「ぐっ、あああああー！」

男は感電し、苦しそうに叫び声を上げる。

電撃が収まると、男が俯せに倒れていた。

「さて、いろいろと答えて貰おうか。まずは、何故俺を狙った？」

康介が見下しながら言う。口調こそ強気だが、表情には疲労の色が濃く浮かんでいる。

「くっ、っ……」

その問い掛けに男はうめき声を上げるだけ。痛みで答えられないのか、答える気がないのか判断は出来ない。

康介は問い詰める為に近づいて行く。男の眼前まで進むと、胸倉を掴んで無理矢理起こさせて、口を開く。

「目的はなんだ？お前はトロイに関係あるのか？」

しかし男は答えない。

「答えた方が　っ！？」

康介は言い掛けた所で、何かに気がついたように振り返る。その視線の先にはまだ何も見えないが、強大なプレッシャーを感じた。そしてそれは徐々に近づいてくる。

「新手か！？くそっ」

そう言うのと、苦虫を噛み潰したような顔をする。

そして、倒れている男を一瞥し、慌ててその場を離れていく。

康介は、家に帰ると倒れ込むようにソファーに見を投げ出した。いくら勝ったとはいえ、康介も満身創痍に加え、戦闘による疲労もある。

「くそっ。もう少しで聞き出せたのに」

悔しそくに拳を固く握りしめる。

突如感じた強大なプレッシャー。あれがなければ、何らかの手掛かりを掴む事が出来たはずだ。

悔しがるのも束の間、康介は疲労と血を流した為に、気を失うように眠りに落ちた。

康介が去った後、そこにはいまだ地面に横たわったままの男と、白いコートを着た男がいた。

「無様だな。『虚幻』よ」

白いコートの男が見下しながら言う。

「油断しました。……申し訳ありません」

「油断したとはいえ、本来の力も出させずに敗れるとはな。お前を少し過大評価していたようだ」

「つ、次こそは仕留めてみせます」

虚幻と呼ばれた男は、焦ったように言う。

「いや、次はないよ。使えない奴はいらない」

「まっ  
」

その瞬間、虚幻の体が潰れた。何かに上から押し潰されたかのよう  
うに。

地面に赤い染みが広がっていく。

それを見届けた白いコートの男は、それから視線を外し、若干渋  
い表情を浮かべる。

「和田康介か。厄介だな」

そう呟くと、その場から去って行った。

## 第12話 踏み出す1歩

何故だろう。

康介は、寝起きではつきりとしなない頭をフル回転させる。

ソファで寝ていたはず。なのに今は布団の上にいる。

そしてその隣には氷上が寝ていた。隣といっても、同じ布団ではなく、床の上だが。

「……なんでコイツがここにいるんだ」

体を起こす。

「おい、起きろ！」

言いながら氷上の頭をバシバシと叩きだす。  
すると氷上が見をよじりながらうつすらと瞼を開く。

「ん……。康介、君？」

氷上は目を擦りながら起き上がる。

「ああ」

「目が覚めたのね！」

康介が答えた瞬間、そう言いながら飛びついた。その勢いで、康介の身体は再び布団に沈んだ。

そんな事お構いなしに氷上は続ける。

「心配したのよ!？」

気のせいかも知れないが、その瞳には、涙が浮かんでいるように見える。

「ッ!？」

あ、ああ。悪かった」

康介は涙を浮かべる氷上の姿に動揺し、とりあえず謝る。

氷上に聞きたい事はいろいろとあるはずなのだが、涙を浮かべる氷上　もとい、美少女の破壊力とはとてつもない。

頭の中ではいろいろな思考が飛び交い、パニックを起こしていた。なんとか落ち着きを取り戻して、氷上の事を意識しないように視線を外す。

「と、とりあえず、どいてくれ」

「え?」

キョトンとした顔で、今の状況を確認するように、自分と康介を交互に見る。

そして顔を真っ赤に染めて、凍りついたように固まる。

氷上は、康介に覆いかぶさるように布団の上に倒れ込んでいた。必然的に2人はかなり密着している。

「じつ、ごめん！」

我に戻った氷上が慌てて離れようとする。

と、その時、部屋のドアがガチャリと開いた。

「康介の具合はどう……」

入って来たのは買物袋を手にした翔太だった。

目に映った光景に、翔太は言い掛けた言葉を途中で止めてフリーズする。

その視線の先には、言わずもがな密着している康介と氷上。その光景は、端から見たら、氷上が康介を押し倒してるように見える。

啞然として固まる翔太。

同様に康介と氷上も固まっていた。

「その……、ごめん。間が悪かったよな。出直してくる」

完璧に誤解をした翔太は、踵を返して部屋を出ようと歩き出す。

「待て待て待て。お前は何か誤解してる！」

康介は焦って翔太を引き止める。

「ごまかさなくてもいいぜ。わかってる、わかってるから。俺は邪魔なんて野暮な事はしないから、ごゆっくりどうぞ」

「何もわかってないじゃない！誤解よ！」



ニヤニヤしている翔太に、氷上が立ち上がって声を張り上げた。  
しかし誤解が解ける様子はない。

「美男美女、絵になるな。けど氷上が康介を手籠めにするとは意外だった。まあ康介も、満更でもなさそうだったし」

翔太がそう言った瞬間、部屋の中にパチパチと音を立てて、電気が走る。

発生源はもちろん康介。ユラリと立ち上がり、翔太に近づいていく。

康介の表情に変わりはない。しかし雰囲気でわかる。怒っている  
と。

「なあ、翔太」

「な、なんだ？」

「人の話しは聞いた方が利口だと思わないか？」

そう言つと、放出される電気が更に強まる。

「悪かった！聞く！ちゃんと聞くから電撃は止めてくれ！」

「最初からそうすればいいんだ」

必死に謝る翔太に康介は言つと、電気の放出を止める。

康介が誤解を解く為に、あの状況に至った経緯を説明すると、翔太は納得したように頷きながら言う。

「そういう事だったんだ」

「ああ。」

それで、2人はなんでここにいるんだ？」

誤解が解け、康介がようやく本題に入る。

「康介君が急に学校を休むから、気になって翔太君と見に来たのよ。そつしたら康介君がソファーに血だらけで倒れてるじゃない。だから慌てて手当として今まで付き添ってたのよ」

「康介、お前3日も眠ってたんだぞ？」

「3日も……」。

そうか、面倒掛けたみたいだな。ありがとう」

康介は3日も眠っていた事に驚き、その間に介抱してくれていた2人に感謝する。

「気にすんな！で、誰にやられたんだ？」

翔太はスッと目を細める。

「黒ずくめの男……恐らく幻術の能力者だ。帰りに路地裏で急に襲われて戦闘になってな。後1歩で目的を聞き出せるって時に邪魔が入って逃げてきたんだ」

「路地裏……男……」

説明を聞いた氷上が、考え込み呟きます。そこに翔太が何かに気づいたように話し掛ける。

「もしかして、アレか？」

「ええ、たぶんね」

そんな会話をしている2人を康介は首を傾げながら見ている。

「なんの話した？」

「そっか、康介君は知らないわよね。あの次の日のニュースで、路地裏で男の死体が見つかったって言ってたのよ」

「……あの男は捨て駒だったのか」

康介は少し考えた後に、そう呟いた。

「なあ、康介。その男はトロイの関係者なのか？」

「どうだか。ただ、あの男は何らかの組織の構成員だろうな。任務に失敗したから消されたんだろ。推測だけだな」

「けど、組織だとしたらやっぱりトロイじゃない？」

そう言って氷上は康介に問い掛ける。

「それが一番怪しいのは確かだな」

康介は、ため息をつきながら答える。

無言。

重い空気が部屋を漂う。

3人は皆、苦々しい表情を浮かべている。  
そんな中、不意に康介が口を開く。

「あいつらは 折田と佐藤は、俺のケガの事とかトロイの事とか知ってるのか？」

「あの2人は知らないわ。巻き込みたくないから何も話してないわよ」

「そうか。なあ、2人に頼みがある」

氷上の話しに頷いた後、康介は決心したように翔太と氷上を見る。

「金輪際、俺に近づくな」

「……どうして？」

「今ならまだ狙われてるのは俺だけだ。けど、俺に関わっていると2

人にも矛先が向くかもしれない。そうになったら、2人を護りきれない」

どこか悲しそうに、康介は話す。

しかし康介の想いとは裏腹な反応を翔太と氷上は見せる。

「それは無理な相談だな。康介が狙われてるんだ。放っておけるかよ！」

「私もよ。それに、護りきれないですって？なんで1人で背負おうとするのよ!？」

2人のその言葉に康介は黙り込む。

「俺達は、あれから能力の鍛練を続けていた。そりゃ、まだ始めてから日は浅いけど、ある程度は使いこなせるようになった」

翔太が言う。

「過信かもしれないけど、私達は康介君と肩を並べて戦えるくらい力をつけたわ。だから、康介君が私達を護るじゃない。3人で助け合うのよ」

氷上が続く。

2人は、想いを康介にぶつける。一緒に戦いたいと。

「それでも……俺は……」

康介はその想いを受け、ポツリポツリと話し出す。

「俺は、もう誰も失いたくないんだ」

その言葉に2人は驚いた顔をする。『もう誰も失いたくない』その言葉から、以前康介が誰かを失ったと気がついた。康介の抱える闇。その鱗片を感じとったのだ。

康介は続ける。

「俺は、誰も護れない。だから人との関わりを拒んだ。大切な物をつくらないように　それなのに」

今にも泣きそうな表情。

「それなのに！お前らは、俺の心にズカズカと踏み込んでくる！俺の決心を鈍らせる！」

触れれば壊れてしまいそうなくらい、脆い心の一面。

「どうすれば、いいんだ……」

最後にそう呟く。

康介は自分がわからなくなっていた。

これ以上、関わったらいけない　そう思っていたはず。命を狙われている自分と関わっていたら、2人にも危険が及ぶかもしれない。そう、命の危険が。

しかし、2人の言葉でそれは揺らいだ。

この2人と離れたくない、そんな事を思ってしまったのだ。一定の距離を置いていたにも関わらず、そう思ってしまった。

相反する2つの感情。

今の康介は、余りにも痛々しい。

氷上と翔太は、それをただ見ているしかなかった。容易く声を掛けられるものではない。自分達の行動が康介を苦しめていたのだから。

沈黙が続く。

どのくらいたっただろうか。康介が顔を上げる。

「なあ、2人は……。翔太と氷上は、こんな事に巻き込まれて、俺と関わった事を後悔してるか？」

「後悔？する訳ないだろ。友達だからな」

「私もしてないわ。友達だもの」

康介の問いに答えると、2人はニツと笑う。

「友達、か。そんな事言われたら、拒絶出来ないな」

康介は、フツと笑いながら呟き、続ける。

「ああ、そうか。お前らは、心に踏み込んでくるところか、心に入り込んでいたんだな」

そう言う顔は、どこか清々しい。そして決意したように言う。

「今度は、護り抜いてみせる」

その言葉に、翔太と氷上は表情を明るくする。

「康介君、違うでしょ？」

「そうだぞ？ 康介だけが護るんじゃない。互いに護り合っんだ」

笑顔で言う。

「ああ。そうだったな」

自然と康介の顔も綻びる。

この時、初めて3人の心が通じ合った。

康介はまだ2人に伝えてない事はあるが、抱える物の一端を伝えた。

張りぼての関係ではあるが、確かに絆が産まれたのだ。



第12話 踏み出す1歩（後書き）

なんか違和感が……

もっと上手く話しを進められないものか……

### 第13話 始まりの旋律

ビルの屋上に、2つの人影ある。その片方は氷炎だ。

箱庭で1番高い場所。そこで氷炎と女は風に吹かれながら街を見下ろしている。

「彼とは接触出来たの？」

「まあね。なかなか活きが良かったよ」

「そう。強かった？」

「バケモノを寄せ付けなくらいね。虚幻にも勝ったそうだ」

「それは想像以上ね」

そこで会話を一旦止めて、2人は再び景色を、笑みを浮かべながら眺める。

「準備は整ったんだよね？」

氷炎が確認するように話し掛ける。

「もちろん」

「じゃあ、始めよう」

女の返答に、氷炎は満足そうな顔をして、そう告げた。

「まずは、あそこだ」

そう言って指を指す。指した場所は、康介達が通う学校の辺り。

女は深く頷くき、氷炎の手を取る。

「行こう」

そう言って2人は、その場から去って行った。

康介が虚幻の襲撃を受けてから10日。

ケガはすっかり良くなり、学校にも通いだした。

ただ、折田と佐藤には何も話していない。いたずらに話すことで、巻き込んでしまわない為だ。

学校では、今まで通りに過ごし、帰ってからは康介、翔太、氷上の3人で鍛練を繰り返して日々。

そして3人は今、康介の家に集まっていた。

「2人に渡す物がある」

康介は言いながら、少し大きめの箱を前にだす。

「なんだ？」

「渡す物って？」

翔太と氷上は、不思議そうに首を傾げる。

「これだ」

箱を開けると、そこにあっしたのは、銃のような物と、鞘に納められた一振りの刀。

それを見た2人は当然驚く。康介はそんな2人に説明を始めた。

「これは特殊な武器だ。刀の方は能力を纏う事ができる。銃もそれに似たようなもので、弾丸は要らず、能力を打ち出す事ができる」

「康介君が、どうしてこんな物を？」

「まあ、いろいろあつてな」

氷上の疑問に康介は言葉を濁す。

「護身用だと思って持っていてくれ」

「康介、いいのか？」

「ああ」

康介が頷くと、2人は武器を手取る。翔太は刀を、氷上は銃を握りしめ、康介にお礼を言う。

「ありがとう」

「ありがとな！」

「気にするな。それがあれば、戦いの幅も広がるだろう。トロイに狙われてるかもしれないんだ、このくらいの準備はした方がいい」

康介の言葉に翔太と氷上は納得したように頷く。

「まあ、話しはこれだけだ。使い方は自分で確認しといてくれ」

康介がそう言うと、物騒な話を止めて雑談が始まる。

「康介、今日泊まっていい？」

当然、翔太がそんな事を口にした。

「いや、帰れよ」

「いいじゃんか。友達だろ？」

「そんな都合のいい友達はいらない」

翔太は辛辣な言葉を投げ掛けられ、若干顔が引き攣らせ、渋々諦める。その表情は捨てられた子犬のようだ。

そんな翔太にため息をつきながら康介は言う。

「また今度な」

その言葉に翔太は、一気に表情を明るくし、返事をする。

「おう！」

「じゃあその時は、私も一緒ね」

「いや、流石にそれはマズイだろ」

氷上の発言に康介は眉をひそめながら言う。  
確かに、年頃の男女が一緒に泊まるのはいろいろと問題があるだろう。

しかし氷上はそんな事気にした様子もない。

「別にいいじゃない」

そんな氷上に、康介は諦めたように肩を落とす。

「……もう好きにしてくれ」

「ええ、ありがとう」

康介の言葉に氷上はニッコリと笑う。

その後しばらくして、翔太と氷上は帰って行った。

翌日、康介達は学校で授業を受けていた。

教室は静まり返り、カツカツとチョークのぶつかる音と、皆がノートにペンを走らせる音だけが響く。

そんな中、康介はブーツと窓の外を眺めている。

いつもと変わらない穏やかな学校生活。

しかし、その日常は突然崩れ去った。

ドオオオン！

と、激しい爆発音が響く。

それと共に聴こえてくる、建物の倒壊する音。

静かだった教室は、いや、学校全体がそれによりパニックに陥る。

ある者は悲鳴を上げ、ある者は窓から身を乗り出し辺りを見回す。その時、1人の生徒が声を張り上げた。

「隣の建物が崩れてるぞ！」

その言葉に釣られ、皆がその光景を確認しようと殺到する。

隣の建物 それは政府管轄の施設だ。

それは確かに、見る影もなく崩れ去っていた。

「皆落ち着け！学校に被害はない！」

突然の事に浮足立っている生徒に、いち早く状況を把握した教師

が檄を飛ばす。

そんな中、氷上と翔太は康介に駆け寄っていく。

「康介君！」

「康介！」

その表情はどちらも厳しいものだ。

「……トロイが動いたか」

駆け寄ってきた2人を前に、康介は呟く。  
政府管轄の施設が潰された。それはやはり、反政府組織の  
ト  
ロイの仕業だろう。

「やっぱりそうか」

翔太は舌打ちをして、地面を踏み締めた。  
そんな翔太を宥めるように氷上が声を掛ける。

「翔太君、落ち着いて」

それに続いて康介も口を開く。

「学校に被害はないんだ。今は大人しくしてた方がいい。わざわざこっちから動くことはないんだ」

「そう、だな」



翔太は氷上と康介の言葉に、落ち着きを取り戻したように返事をする。

教室も次第に落ち着いて来ている。

それに伴い避難が始まっていた。いくら学校に被害がなくても、このあと何が起こるかわからない。その為の避難だ。

「慌てずに校舎から出るんだ！」

教師が生徒を先導する。

康介達もそれに従い教室をでる。その際に、翔太は自分の席から布に巻かれた棒状の物を手に取っていた。

廊下に出ると、他のクラスは既に避難を始めていたようで、生徒の数は少ない。

そのまま皆は外へと向かっていく。

と、その時。突然校庭の方から悲鳴が上がった。

そして、校舎から出た康介達の目に飛び込んできたものは、バケモノだった。それも1匹じゃなく、多数。そのバケモノに生徒が襲われ、逃げ惑う光景。

阿鼻叫喚。そう形容するしかない。生徒達の悲鳴が、ある種のオケストラのように響く。

「なによ……これ」

あまりの光景に、氷上が愕然とする。

いや、氷上だけではない。その周りの生徒もだ。皆、放心状態になっている。

バケモノが縦横無尽に駆け回り、威嚇し、襲い掛かる。生徒達は散り散りになり、混乱の中で命を落としていく。

そしてその間にも、どこから湧いて来たかのように、バケモノは数を増やしている。

だが、それでも次々と安全な所に、逃げ延びて行く生徒もいた。

この学校は、能力者しかない。能力者なら、混乱に乗じて逃げる事も出来るだろう。

徐々に逃げ延び、襲われ、校庭から生徒が減っていく。

そんな中、康介達の1団は、まだ校舎の前にいた。校庭にいなかった為、襲われる事はなかったが、そのために逃げる事を忘れていた。

そして康介は気づく。

校庭の生徒が少なくなったらどうなるかを。その場所の獲物が減ったら、バケモノ達は新たな獲物を探さだろう。今だ放心状態の康介達の1団は、格好の餌となる。見つければ一斉に襲い掛かって来るだろう。

康介は声を張り上げる。

「マズイ！孤立するぞ！」

その言葉に皆は、ハッと我に返るが 遅かった。

周りには既に、バケモノが囲うように集まって来ていた。

そして、一斉に遅い掛かって来る。

康介達に残された逃げ場は1つ。自分達の後ろにある校舎だ。

建物の中に入ってしまおうと、逃げ場はなくなる。しかし選択肢はそれしかない。

皆は、我先にと校舎内に入っていく。

康介はそれを援護するように、雷撃をバケモノに飛ばしながら皆を追いかけて、校舎に入って行った。

### 第13話 始まりの旋律（後書き）

バケモノ襲撃編、始まりました。

ここから話しが盛り上がって行く！……はずです。

## 第14話 団結

「……助かった」

1人の生徒が呟く。

康介達の1団は校舎1階のロビーにいる。

校舎の入口には、氷上によって分厚い氷が張られていて、バケモノの侵入を防いでいる。

しかしそれもその場凌ぎ。バケモノ達は、激しく体当たりを繰り返して氷を破ろうとしている為、いつまで持つかわからない。

だが、その仮初めの平穩に、皆は落ち着きを取り戻し始めていた。

「俺達、どうなるんだ？」

誰がそう言った。

なんとなく発せられた一言だろう。しかし、その言葉がきつかけとなり、辺りに絶望感が漂う。

きっと助からない。

皆が、そう思っているのだろう。

そんな時、翔太が声を張り上げる。

「諦めんじゃねえよ！死ぬと決まった訳じゃねえだろ！」

ロビーに声が響き渡る。

その翔太の言葉に、数人は目の色を変えて拳を握りしめた。

「そうだ！戦おう！」

「脱出くらいなら出来るはずだしね」

「諦めるより先に、出来る事をしよう」

その数人が口々に言う。

それに触発されたように、他の生徒達も立ち上がる。

しかし、半数は動かない。それどころか皆の決意を削ぐような事を口にする。

「あんなバケモノ相手に、何が出来るんだよ」

「そうだ。戦っても喰われるだけだ」

何をやっても結果は変わらない。結局は死ぬのだ。そんな意味合いの言葉を並べている。

そんな言葉に、他の生徒の決意は揺らぎだす。

そして、そこに追い撃ちをかけるような出来事が起こった。

「康介君！もう持たないわ！」

氷を張っていた氷上の、危機迫る声。

そして聴こえてくる、氷が軋み、ひび割れていく音。

それだけの事に、皆の決意はいとも容易く崩れ去った。

ああ、結局何も出来ないのか、と。

そんな絶望感漂う中で、冷静に、しかし闘志をその目に宿し、バケモノを見据える3人がいた。

そう、康介、翔太、氷上だ。

特に氷上はバケモノに1番近い所で、今にも壊れてしまいそうな氷を必死に補強し、支えつつづけている。

その氷上を指差しながら翔太が怒鳴る。

「お前ら！彩香があんなに頑張ってるんだぞ！それを無駄にする気かよ！？」

しかし、皆の反応は芳しくない。

その反応に、翔太は舌打ちをすると氷上の下へ走っていく。そして　とうとう氷の壁が破られた。

雪崩れ込んでくるバケモノ。

上がる悲鳴。

氷上と翔太は、慌てて康介がいる場所まで下がってくる。

「やるぞ」

康介が、氷上と翔太にそう告げると、2人は頷く。

康介は手を前に突き出す。

迸る電撃。

手前にいた数体のバケモノが感電し、焼け爛れて絶命していく。

幸いにも前回のような、固い外皮を持つバケモノは少ない。それらには、普通の攻撃でも充分に通用する。

「切り裂け！」

翔太は、手刀を横薙ぎに振るう。

放たれるは、風の刃　所謂、鎌鼬だ。

それは容赦なくバケモノを切り刻む。

「貫け！クリスタルダガー！」

氷上の周りに、氷の刃が10個ほど生み出され、一直線に突き進む。

そして、バケモノに容易く突き刺さり打ち出していく。



しかし、倒しても倒しても、その亡きがらを乗り越えバケモノは迫ってくる。

が、倒す事は出来る。3人だけでも、少しの足止めが出来ているのだ。

康介は叫ぶ。

「見ろ！このバケモノは不死身じゃない！倒せるんだ！  
だったら、諦める前に出来る事があるだろう！？戦えよ！生き残れる可能性はあるんだ！」

そう言っている間も、電撃の手は緩めない。翔太と氷上も同様に攻撃を続けている。

生徒達は、康介の言葉で、3人の勇敢さで、希望を見いだしたように動き出す。

その内の1人が、雄叫びを上げながら康介達の下まで走り、炎を放つ。

火力は足りないながらも、その炎は確かにバケモノにダメージを与えた。

他の生徒達も、それに続くように攻撃を始め、多種多様な能力が飛び交う。

「氷上！氷の壁を！」

「わかったわ」

康介の言葉に氷上は素早く反応し、氷の壁でバケモノと自分達を隔てる。

それを確認した康介が皆に指示を飛ばす。

「一旦引くぞ！」

皆はそれに従い、下がって行く。バケモノが氷の壁に阻まれている間に、2階に上がり教室に隠れる。

「氷上、ドアも凍らせてくれ」

最後に教室に入った康介が、そう頼む。

「ええ、任せて」

氷上はそう言いながら、ドアを氷で補強する。

それが終わると、康介は皆を見回す。

「ざっと30人くらいか」

呟く康介に、翔太が話し掛ける。

「なあ、この後どうする？」

「学校から脱出だな」

康介は答えると、窓の外に視線を向ける。そして何かに気がつい

た。

「これは……結界か？」

「おいおい、マジかよ」

翔太もそれを確認すると、苦々しい表情で呟く。

外は、学校の敷地を覆うように、ドーム状の結界が張られていた。

「恐らく、バケモノを外に出さない為だな」

「康介君、これじゃ逃げれないわよ？」

氷上の言葉に、康介は考え込む。しばらく難しい顔をして下を向いていたが、考えが纏まったように顔を上げる。

「この中に、転移の能力者はいるか？」

康介が全員に問い掛ける。

すると、1人の女子生徒が手を挙げた。その女子生徒に康介は話し掛ける。

「この人数の転移、出来るか？」

「たぶん。けど20メートル位を1回が限界だと思う」

女子生徒は自信なさ気に答える。

「充分だ」

その返答に康介は、満足そうに言う。

「康介、どういう事だ？20メートルじゃ意味ないだろ」

そのやり取りを疑問に思ったのか、翔太が不思議そうに話し掛ける。

「それを今から説明するんだ。」

皆、聞いてくれ！脱出する方法が1つだけある。」

その言葉に、皆が歓喜したようにざわめき、視線が康介に集中する。

「作戦自体は簡単だ。まず、校舎から出る。その後バラバラにならないように一塊になり、外のバケモノ共を突破して、結界から20メートル以内に近づく。そして結界外に転移だ。脱出するには、これしかない」

その内容に皆が頷き、納得する。

「異論がないなら決まりだ。すぐに始めるぞ。まずは校舎から出ることだけど　氷上、ここから下まで滑り台みたいに出来るか？」

「ええ、大丈夫よ」

氷上は答えると、全員が1度に滑れる位に大きな物を作り上げた。

「それじゃあ、攻撃手段がある者は外側、ない者は内側で集まって

くれ」

康介は指示をだすと、皆は素早くその通りに移動した。

「いいか、下に降りたらバケモノを倒しながら、結界に向けて進むんだ。殿は俺、翔太、氷上でやる。

それじゃあ 行くぞ！」

康介の言葉と同時に、皆は気合いの入った声を上げ、滑り降りていく。

「氷上、翔太。生き残るぞ」

「おう！」

「ええ」

そう短く話すと、3人も下に降りて行く。

3人が下に着くと、先頭は既に戦い始めていた。皆が協力し合い、バケモノを打ち倒していく。

しかし、とてつもない数に行く先を阻まれ、後ろからも校舎から出て来たバケモノが迫ってくる。

その時、翔太が叫ぶ。

「皆は前だけ見て進め！後ろは俺達で守る！」

心強い言葉。その言葉で皆の士気が跳ね上がる。

男も女も関係なく声を荒げ、勢いを増していく。

誰の能力なのか区別は出来ないが、炎がバケモノを焼き、水が押し流し、鋭く尖った岩が地面から突き出す。他にも様々な攻撃手段でバケモノを倒しながら進んでいく。

しかし、どんなに善戦しようとも、犠牲者は出てしまう。

1人、また1人と、バケモノに切り裂かれ、噛み砕かれ、無惨な姿へ変わっていく。

見知った人間が目の前で死んでいく光景。  
むせ返るような血の匂い。  
体力と共に擦り減る精神。

それでも皆は諦めない。瞳に強い光を灯し、前へ前へと進んでいく。生き残る為に全力で戦い続ける。

康介達もまた、必死に戦っていた。  
後ろから追ってくるバケモノをたった3人で迎撃する。

走る稲妻。

降り注ぐ氷塊。

吹き荒れる暴風。

3種3様の攻撃が入り乱れる光景は、それはさながら嵐の縮図。

「もう少しだ！」

康介が言う。

結界までの距離はあと50メートルほど。

目標地点まで30メートル。たったの30メートルだ。

ようやく終わりの見えてきた戦いに、皆が最後の力を振り絞る。

20メートル

10メートル

そして、遂に目標地点までたどり着く。

「転移するぞ！皆、離れるなよ！」

康介が言うと、女子生徒が能力を発動させ、皆を淡い光が包んでいく。

これで助かる

皆がそう思い油断する。その隙に1体のバケモノが一気に距離を詰めて来ていた。

氷上に1直線に迫っていく。

慌てて氷上は迎撃しようとするが、間に合うタイミングではない。

やられる。

そう思った刹那、翔太が間に割って入ると、突風を起こしバケモノの勢いを削ぐ。

が、完全に止める事は出来ずに2人は皆のいる所から弾き飛ばされた。

康介は、とつさに2人の下へ駆け寄り、襲い掛かろうとしているバケモノを電撃で打ち倒す。

「戻るぞ！取り残される！」

康介がそう叫ぶと氷上と翔太は、すぐに体勢を立て直し、急いで戻ろうとするが、その瞬間、転移は完了して皆は結界外に脱出した。

そう、3人は取り残された。

「嘘、でしょ……」

「マジかよ……」

氷上と翔太はその事に愕然とする。

「……悲観する暇はないみたいだ」

康介はそう呟いた。

氷上と翔太は、それで我に返り、周りを見渡す。



そして気づく。

康介達3人は200を超えるバケモノに囲まれていた。

## 第15話 激戦 1

視界に映る無数のバケモノ。

円を描くように広がり、じりじりと3人に迫る。

絶体絶命、そんな言葉がぴったりの状況。

「1度校舎に戻るぞ」

康介は2人に言う。その表情は、まだ希望を捨てていなかった。

「はいよ！」

「わかったわ」

翔太と氷上もまた、希望は捨てていなかった。

「俺が道を作る。そうしたら全力で走るぞ」

康介はそう言うと、手を横に伸ばし、放電し始める。

それは幾重にも束ねられ、極太の稲妻に変わる。

「行くぞ！」

その稲妻は掛け声と同時に打ち出される。

直線上のバケモノを一掃する、激しい稲妻の奔流。

3人は開けた開けた道を走りだす。

バケモノは、その空いた空間を埋めるように殺到していく。

翔太が強力な追い風を吹かせて、走るスピードを吊り上げる。

氷上がバケモノの立つ地面を凍らせ、攪乱する。

動きの鈍くなったバケモノ目掛け、康介が雷撃を放つ。

完璧な連携。

それでも攻撃をくぐり抜けてくるバケモノ。

圧倒な数の暴力。

康介が作り出した道は、既になくなり掛けていた。

しかし校舎まではあと少し。

その時、3人の眼前に見覚えのあるバケモノが回り込んできた。

ライオンに似ていて、硬い外皮を持つ　　そう、以前襲われたバケモノ。

「くそっ！」

翔太は思わず毒づく。

あのバケモノに生半可な攻撃は効かない。しかし威力の高い攻撃を放つ暇はない。

康介なら

そう思い翔太は振り返る。

だが、頼みの綱の康介は、後方での対応に追われて手が離せない。

翔太は覚悟を決める。

「うおおおお！」

激しく渦巻く風を腕に纏い殴りつけた。

やはり、と言うべきか効果は薄く、バケモノは爪で切り裂こうとしてくる。

それを即座にバックステップで躲し、風の刃を飛ばして切り裂こうとするが、文字通り刃が立たない。

どうすれば……

そんな時、康介の声が響いた。

「翔太！持ってるソレは飾りか！？」

その言葉に、ハッとす。

持つてる物、それは康介に渡された刀。今まで、戦いに集中する余りに失念していた。

翔太は巻きつけてある布を外して刀を抜き構えると、上段から勢い良く振り下ろす。

放たれたのは、今までとは比べ物にならないほど巨大な風の刃。それはバケモノに突き進み、傷を負わせた。

普通のバケモノだったら、それで両断出来ただろう。しかし今対峙しているのには、硬い外皮に威力を削がれ、倒すには至らなかった。

だが、今はそれで充分。  
バケモノが怯んだ、それだけでいいのだ。

「今だ！」

翔太が言っと、康介と氷上は一気にスピードを上げて、そのバケモノを突破する。

そして、そのまま3人は校舎内に駆け込んだ。

佐藤は、結界の外で唇を噛み締めていた。

その視界の先には、取り残された友人の姿がある。そう、康介、翔太、氷上の3人だ。

3人はバケモノに囲まれながらも、必死に戦っている。

「私は……なにを……」

泣きそうな表情を浮かべる。

この結界を張っているのは佐藤だ。バケモノを閉じ込め、市街地に出さないように張った結界。

しかし、それは康介達3人までもを、閉じ込めてしまっている。

その結界が、3人を窮地に追いやっていると言っても過言ではない。  
い。

佐藤は、そこからくる自責の念に駆られていた。

「軍は……軍は、まだ救援に来ないの!？」

佐藤が声を荒げて言う。

それを宥めるように折田が話し掛ける。

「瑞葉、落ち着きなよ。きっともうすぐ来るから」

「落ち着ける訳ないでしょ!？和田君達に取り残されてるのに、なんで翼は平気でいられるのよ!？」

折田の言葉に、佐藤は激昂したように叫ぶ。

「ッ！平気な訳ないだろ！？けど、取り乱したって状況は良くならないんだよ！」

普段大人しい折田が怒鳴る。その拳は、血が滲むほど強く握り締められていた。

佐藤は、それを見ると黙りこんでしまう。

「大丈夫……。康介達なら大丈夫だ」

折田は自分に言い聞かすように呟いた。

「とりあえず、撒いたみたいだな」

康介達は、職員室にいた。

校舎内に逃げ込み、中まで追って来たバケモノを振り切って行き着いたのだ。

一息ついた翔太と康介は話し始める。

「しつこく追って来たな。まるでストーカーだぜ」

「あんなアグレッシブなストーカーは、遠慮願いたい」

「確かに。俺もストーカーとの捕まったら最後の鬼ごっこは嫌だ」

「な、なんでっ、2人は、そんなにっ、元気なのよ？」

そんな2人に、氷上が息を切らしながら話し掛ける。

「氷上は氷の壁を作ったりとか1番頑張ってくれたからな。疲れるのも無理ないだろ」

「少しここで休もうぜ」

康介が言うと、翔太が氷上を気遣うように提案する。  
それに康介は頷く。

「そうだな。けど余り長くは留まれないぞ」

「なんでだ？」

「俺達には、バケモノの返り血が付いてる。匂いでここを辿られるかもしれないからな」

その言葉に、翔太はガックリとうなだれる。

「ねえ、ごめんね。私のせいで……」

荒かった呼吸が収まった氷上が、不意にそんな事を口にする。

その言葉に、康介と翔太は、なんの事だかわからないといった風に首を傾げる。

「私が油断しなければ……ちゃんと反応出来てれば取り残される事



はなかったから」

「ごめんなさい、と頭を下げる。」

「あれはしょうがないよ」

翔太は落ち込む氷上の肩を軽く叩きながら慰めだす。

「あの瞬間は、皆が油断していた。氷上が悪い訳じゃないさ」

だから気にするな、といった風に康介も言う。

「ええ、ありがとう」

2人の言葉にそう答えるが、氷上の表情はくらいままだ。

そんな様子の氷上に、康介は苦笑する。

「まったく……」

俺達は助け合って行くんだろ？だから氷上のミスは気にしないし、フォローするさ。

そのかわり、俺がミスった時は氷上がフォローしてくれるんだろ？」

励ます為だけの言葉か、本心かはわからない。しかし氷上はその言葉で表情を明るくする。

「そうよね……うん！」

氷上は、気が晴れた訳ではない。康介の言葉が嬉しかっただけ。ただそれだけだが、頑張ろうという気になれたのだ。

話しが纏まった所で、翔太が口を開く。

「これからどうする？」

「お前……、少しは自分で考えろよ」

「難しい事は苦手だ！何も考えずに突っ込むのが俺の仕事、指示を出すのが康介の仕事だろ？」

「お前な……」

何故か胸を張って言い切った翔太に、康介は呆れ果てた顔をするが、すぐに真面目な顔に戻り、続けて言う。

「まあいい。氷上、銃は持ってるか？」

「ごめん……教室」

氷上は申し訳なさそうに目を伏せる。

「だったら、まずそれを取りに行こう。武器は有るに越したことはない」

「すぐに動くのか？」

「いや、もうしばらくは休憩だ。休める時に休んだ方がいい」

そう言っただけで康介は立ち上がると、室内にある水道でコップに水を汲み、それを2人に渡す。

「飲んどいた方がいいぞ。休めるのは、これが最後かもしれないかな」

「サンキュ！」

「ありがとう」

2人は、一気に水を飲み干す。すると氷上が眩いた。

「もう少し、この平穏が続くと良いわね」

「……そう上手くは行かないみたいだ。バケモノが近づいて来てる」

康介はため息をつく。

「なんでわかるんだ？」

「さっきから微弱な電気を飛ばして辺りを探ってたんだ。鉢合わせる前に行くぞ」

「ええ」

「はいよ」

そう話すと3人は職員室を出て移動を始めた。

「雷の能力って、便利だな」

翔太が呟く。

3人は、康介の能力でバケモノを察知して、見つからないようにのらりくらりと避けながら移動を続けて、遠回りにはしたが教室にいた。

氷上は自分の席で銃を取り出している所だ。

「否定はしない。けど、どんな能力も使い方次第だ」

「確かに俺も風の流れて同じ事を出来なくはないけど……広範囲は制御しきれないな」

康介の言葉に翔太は首を横に振りながら答える。

そこに、銃を手に持った氷上が近づいてくる。

「あつたわ。それでこの後どうするの？」

「その事だが、少し いや、かなり困った事になった」

康介が、険しい表情に変わった。

「どうしたんだ？」

「この教室、囲まれてる。まだそこまで数は多くないけどな」  
「すぐに集まってくるだろう。そんな言い方をする。」

それに氷上与翔太は顔を歪めた。

「今の内に突破するぞ」

康介がそう言うと、2人は気持ちを切り替えたように武器を構える。

扉を開けたその先には、廊下の右側に3体、左側に7体、合計10体のバケモノがいた。

「右だ」

康介の指示と同時に、翔太が真っ先に飛び出し、能力を付加した刀でバケモノを切り裂く。

その後ろから氷上は、氷の弾丸を打ち出して援護を始めた。

左側の相手は康介が。

巧みに電撃を操り、バケモノを抑える。

右側のバケモノはすぐに片付き、翔太が声を上げる。

「行くぞ！」

翔太と氷上は走り出す。

康介は後ろに電撃を飛ばしてバケモノを牽制しながら、2人に付いていく。

大きい攻撃をしないで、牽制程度に留めているのは、大きな音を立てて他のバケモノを気づかれるのを避ける為だ。

「翔太！上の階の渡り廊下から隣の校舎に移るぞ！この校舎はバケモノが多い」

能力でバケモノの数を察知した康介が、先頭を走る翔太に伝える。

「わかった！」

翔太は返事をする、階段を上り始めるが、その上から2体のバケモノが降りてくる。

翔太は刀を構え、すれ違いざまに1体を切り裂き、反す刃でもう1体も仕留めようとするが踏み込みが甘く、倒すには至らない。

そこに氷上がさかさ銃を連射して止めを刺すと、再び走り出す。

その後ろで康介は思わず舌打ちをしていた。

その理由はバケモノの数。次々と追って来る数が増えて来ている。その先頭には、硬い外皮を持つ、あのバケモノがいる。康介の雷撃は弾かれ、余り効果が出ていない。

階段を抜けると、すぐに渡り廊下が見えてきた。

康介は叫ぶ。

「そこを渡り終えたら、全力で渡り廊下をぶっ壊すぞ！」

3人は勢い良く駆け抜けけると反転し、それぞれがバケモノの手前の床を目掛けて攻撃を飛ばす。

翔太は風の斬撃。

氷上は特大の氷の弾丸。

康介は雷球。

それは同時に着弾すると、轟音を立てて、渡り廊下を破壊した。

崩れ落ちる渡り廊下。

バケモノ達は、瓦礫と共に落ちて行った。

「康介って意外と大胆だな」

それを見届けた後、翔太が呟いた。  
続いて氷上が。

「こんな壊しちゃって大丈夫かしら？」

2人は康介を見る。

「お前らも共犯だろうが。それに非常事態だから仕方ないだろ」

康介は肩を竦めながらそう言うと、窓から校庭を見下ろす。

そして 固まった。

一筋の冷や汗が頬をつたう。

「どうしたんだ？」

「……見てみる」

康介は不思議そうにしている2人にそう促すと、2人も視線を外に向ける。

「ははは……これはヤバいな」

「……笑い事じゃないわよ」

2人は引き攣った表情　いや、顔を歪ませた。

視線の先に広がる光景　それは、3人のいる校舎にバケモノが大挙してくる姿。

「さっきの崩壊音に吊られて来たみたいだな」

「冷静に分析してる場合じゃないと思うのだけど？」

「ああ。自分で言っと思ってたよ」

康介と氷上がそう話すと、3人のいる廊下の先の方に、1体のバケモノがその姿を現した。

いや、1体ではなかった。それを先頭にバケモノの波のように押し寄せてくる。

その状況に康介は、思わず声を張り上げる。

「逃げる！」

「どこに!？」

翔太は後ろを見て焦ったように言う。

渡り廊下を破壊してしまった為に、退路がないのだ。

「階段!上よ!」



そう大声で言う氷上が指折す先には、階段があつた。

3人は1度顔を見合わせると走り出し、階段を駆け上がる。

3人がいたのは最上階。行き着く先は屋上だった。

扉を蹴破り、3人は屋上に出ると、すかさず氷上が入口を氷で塞いだ。

「ここからどうするよ？」

「助けを期待でもしてみる？」

「そんな都合良くは来ないだろ」

翔太の問い掛けに、氷上は口元だけ笑わせながら答え、それに康介は即答した。

「じゃあ、いつちよ戦つか」

「こんな狭い屋上じゃ、まともに戦えないわよ」

「そうだな……。広い場所ならまだしも、ここじゃ」

康介が言いかけて、何か思いついたように止まる。

翔太と氷上も同じ事を思っていたのか、3人は顔を見合わせ、1拍置いた後に全員がある場所を見た。

そこは 校庭だ。

「飛び降りるか」

康介が呟く。

「ここは屋上 4階よ？」

「着地は翔太がなんとかしてくれるさ」

「なんとかするしかないんだろ？任せとけ」

会話をしている間に、入口を塞いでいる氷に亀裂が入り出す。

「時間がない。跳ぶぞ」

康介が言うと、翔太と氷上は頷き、3人で屋上の淵に向かって走りだした。

それと同時にバケモノが氷を破り、屋上に雪崩込む。

「翔太君、頼むわよ」

「しっかりな」

「任せとけ！」

そう話しをすると、3人は飛び降りた。

重力に従い落下していく。

普通なら、そのまま地面に直撃して赤い血の花を咲かせるだろう。

しかし翔太は風的能力者。

「渦巻き！巻き上げろ！」

その言葉と共に、落下地点に竜巻が発生し、地面にぶつかる直前で3人をフワッと宙に浮かせる。

それにより3人は無事に着地に成功した。

着地した場所は、助走をつけて跳んだ為、校庭だ。

3人は屋上を見上げる。

すると、バケモノも追うように飛び降りて来ていた。  
しかも、しっかりと着地している。

「どんな運動能力してるんだよ……」

次々と着地し、迫ってくるバケモノに、流石の康介も驚いている。

「校庭じゃ逃げ場はないわね」

「戦うしかないみたいだな」

氷上と翔太がそう言つと、康介は2人に向き直る。

「絶対に死ぬなよ」

康介のその言葉に、氷上と翔太は笑みを浮かべる。

「ええ。もちろんよ」

「康介もな！」

自信　氷上と翔太の表情は自信に満ち溢れていた。  
戦い抜くと、生き残ると、そんな強い意思が伝わってくる。

そんな2人に康介は笑みを浮かべ、拳を前に突き出す。

すると氷上と翔太は、その意図を理解したのか、同じように拳を突き出す。

3人は自分達の中央で拳をぶつけ合う。

「さあ、始めよう　生きる為の戦いを」

康介のその言葉を合図に、3人は動きだした。

## 第16話 激戦 2

康介達3人の眼前に迫るは、バケモノの群れ。

おおよそ全てのバケモノが3人の存在に気づき、切り裂こうと、食い殺そうと、歩を進めている。

「なんて言うか……壮観？だな」

「わからなくはないわ。けど、なんか嫌ね」

「アレに立ち向かう俺達も、端から見たら壮観なんじゃないか？」

翔太、氷上、康介は迫るバケモノを前にそんな会話をする。

「それは言えてるわね」

「さながら、神話の英雄ってか？」

氷上と翔太は、康介の言葉に微笑しながら返す。

絶望的な光景を前に、軽口を叩く3人。

バケモノはすぐそこまで迫って来ていた。

「話しはおしまいだ」

康介が言うと、翔太と氷上は気を引き締め、翔太は刀を、氷上は銃を構えて待ち構える。

前衛に翔太、後衛に氷上、そして2人をフォロー出来るように康介が真ん中の布陣。

そして、目前に迫るバケモノに氷上が銃に思いつ切り力を込め、引き金を引いた。

巨大な氷塊が飛び出し、直撃したバケモノを押し潰す。

それを合図に翔太が先頭にいるバケモノを刀で切り裂く。

康介は矢を象った雷撃を降らせ、2人の取りこぼしを貫き、焼き殺す。

ピッタリと息の合ったコンビネーションに最適な布陣。

しかし、圧倒的な物量にはそれも余り意味を成さず、あつという間に3人はバケモノの波に呑み込まれた。

「おおおお！」

翔太は雄叫びを上げながら刀を振るい、風の斬撃でバケモノを切り裂く。

それをくぐり抜け、襲い掛かるバケモノは刀で切り付け、貫き、

その命を絶っていく。

不意に迫りくる鋭い爪。

その事にギリギリで気がついた翔太は、刀でそれを受け止める。

金属同時がぶつかったような甲高い音と共に、翔太を凄まじい衝撃が襲う。人とバケモノの力の差。それを思い知らされる思い1撃。

「　っ！」

体を駆け抜ける衝撃に顔を歪め、吹き飛ばされそうになるのを、必死に堪える。

何とか堪えはしたが、攻撃の止まってしまった翔太に、ここぞとばかりにバケモノが襲い掛かる。

背後から迫るバケモノ。咄嗟に刀を片手持ちに切り替え、空いた手でソレに鎌鼬を放ち、切り裂く。

その後すぐに、受け止めていた爪を弾くと、反す刀で切り捨てる。

切り付け、風の斬撃を飛ばし、その反対の手では鎌鼬を起こし、竜巻を作り上げて吹き飛ばす。

凄まじい猛攻。

しかし、その攻撃の合間を縫うように、幾つもの爪が迫る。

何体もの同時攻撃。

それは捌き切れるものではなく、翔太の体を切り裂き、抉っていく。

「くっ  
くっ」

それでも翔太は歯を食いしばり、攻撃の手を緩めないで刀を振り続ける。

緩めたら最後、すぐにその体は無数のバケモノに引き裂かれ、噛み砕かれるだろう。

攻撃こそ最大の防御、そう言わんばかりの勢いで繰り広げる怒涛の攻撃。

それは着実に敵の数を減らしていく。

「クリスタルダガー！」

氷上は氷の刃を飛ばす。それと共に右手を持つ銃を乱射し、近くの敵を氷で作り出した剣を左手に持って切り裂きく。

銃はどこに撃っても敵に当たる状況。故に剣を振るう事に集中し、銃は適当に撃ちつづけ、合間合間に氷の刃や氷塊を飛ばし攻撃する。

近接、中距離、遠距離をバランス良く備えた戦い方で奮戦している。



それでも襲い掛かってくるバケモノ。

それを氷壁で食い止め、その隙に他のバケモノを打ち倒す。  
氷剣と銃と能力を併用し、乱舞する。

しかし剣と銃、2つの武器を使う事で注意力が散漫になり、視野が狭まる。

意識の及ばない所からの攻撃に気づく事は出来ずに、バケモノの爪が氷上の背中を裂く。

「うあつ！」

焼け付くような痛みに思わず声を上げる。

それでも痛みを堪え、すぐに振り返りながら氷剣を振るう。それは的確にバケモノを切り裂くが、次から次へと襲い来るバケモノに、次第に消耗していく。

元よりいろいろな事を併用して戦っていたのだ。消耗が激しいのは当然の事。

氷上は呼吸を荒げながら呟いた。

「冗談じゃっ、ないわよっ」

そう言いながらも諦める事なく戦い続ける。

康介はひたすら雷撃を放っていた。

前後左右、縦横無尽に雷撃を走らせる。

それは謂わば広範囲攻撃。

バケモノを寄せ付けずに戦っている。しかし広範囲の攻撃故に威力は高くなく、バケモノを仕留めきる事が出来ない。

何故いつものような雷撃を使わないのか　それには理由がある。康介は武器を持っていない。そして能力は雷で、物体ではない。つまり、近づかれた時に防御する術がないのだ。

相手が単体ならば躲す事が出来るが、今は無数のバケモノに囲まれている。この状況で、全ての攻撃を躲すのは不可能。その為、今の戦い方をするしかないのだ。

仕留めきる事が出来ない　　言ってしまうえばそれはただの足止めに過ぎない。

しかし、康介を取り囲む全てのバケモノを足止めすることなど出来ない。

必然的に近づき、襲い掛かって来るバケモノもいる。

それらには、雷球をぶつけて葬り去るが、広範囲の雷撃に加えての雷球の操作。

広範囲攻撃だけでも消耗が激しいにも関わらず、雷球まで使用している康介の疲労は計り知れない。

雷撃の威力は落ち、操る雷球の数は徐々に少なく、操作も荒くなっていく。

康介は口には出さないが、その表情には、疲労の色が濃く浮かんでいる。

しかし、その瞳には依然として強い光を灯したまま、死力を尽くす。

「凄い……」

結界内で繰り広げられる康介達3人の戦いに折田は感嘆の声を漏らす。

いや、折田だけではない。佐藤も、他の生徒も、教師ですら感嘆していた。

そこにいる誰もが康介達を、食い入るように見続けている。

その視線の先で繰り広げている激戦　いや、超越的とも言える戦い。

果してこの中に、康介達程の戦いが出来る者が、何人いるだろうか。

否、誰もいないだろう。

その戦いを見ている誰もが思った。

自分とは次元が違う、と。

結界内部で戦う3人は、まさに英雄と呼ぶに相応しい実力を見せている。

その光景は、ある種の芸術。

お伽話の1ページを切り抜いたようだ。

皆がそれに瞬きを忘れ、固唾を飲んで魅入っている。

しかし、そんな圧倒的な力を見せる3人も、圧倒的な数の暴力を前に押され始める。

いや、最初から押してなど 拮抗すらしていなかったが、3人の戦いぶりに皆は錯覚していた。

だがそれも衰え始め、目に見えて手数が減り、負う傷も増していく。

「っ！」

その光景に折田は唇を噛み締め、結界の境目に歩き始める。

「翼！どこ行くの！？」

それに気づいた佐藤が慌てて声を掛けると、折田は決意の籠った表情で振り返る。

「決まってるでしょ。　康介達を助けに行く。  
俺の能力なら中に入れるからね」

折田の能力は転移、それなら確かに入る事は出来る。

折田の言葉に、何人かの生徒が決起したように声を上げた。した。

「俺も行く!」

「私も連れて行って!」

「3人を助けるんだ!」

そう口にしながら、数名が折田に駆け寄る。

「皆……。ありがとう。

行こう!」

折田は転移しようとする。

しかしその行動は佐藤に阻まれた。

「ダメ! 翼の能力は戦闘向きじゃないでしょ! 行って何が出来るのよ!??」

「じゃあ見捨てるって言うの!? そんな事、俺には出来ない!」

折田は佐藤に反論し、再び向かおうとする。

しかし、その前に数名の教師が立ちはだかる。

「駄目だ。お前達を中に入れる訳には行かない。何も出来ずに悔し

いのはわかる　私達もそうだからな。  
しかし、中に行ってもあいつらの気を削ぎ、邪魔になるだけだ」

「そして、生徒を死地に向かわせる事は出来ない。  
軍の救援が来るのを待つしかないんだ」

2人の教師が言う。

正論だ。折田達が行っても邪魔になるだけ、そうならなくても、生きて戻って来れないだろう。

「くそ……くそっ！」

折田は結界を殴りつける。何も出来ない自分を悔やむように、何度も何度も。

皆も、教師も不甲斐ない自分を責めるような表情を浮かべている。

そんな時、佐藤が呟いた。

「  
れ」

小さくて聞こえないが、何度も繰り返している。

その声は次第に大きくなって行く。

「  
ばれ、がんばれ、頑張れ！負けないで！！」

喉が張り裂けんばかりの大声で叫ぶ。

それは声援。結界の境目まで駆けて行き、言い続ける。

「負けないで！頑張つて！」

次第に皆も声援を送り出す。

負けるな

頑張れ

諦めないで

皆がそれぞれの想いを叫びだす。

それぞれ言葉は違えど、望む事は同じ。

それは、康介達3人が生きて帰って来ること。

それは、辺り1帯に轟く大声援となった。

康介達3人は、1ヶ所に集まり、戦っていた。

3人は無意識のうちに互いを探し合い、近づいていたのだ。

3人は背中を預け合いながらバケモノを打ち倒す。

康介に攻撃が迫れば氷上がそれを防御し、その氷上が狙われれば翔太がそれを切り裂き、翔太にバケモノが襲い掛かると康介が雷撃で打ち払う。

互いが互いを助け合う。

そうしなければ戦えない。

3人は疲弊仕切っていた。数え切れない打撲、数え切れない裂傷。無事な所を探すのが難しい程に満身創痍だ。

全身から血が流れ、動く度にそれが汗と共に飛び散る。

体を襲う喪失感。最初のキレのあつた動きは、今や見る影もない。

しかし、眼光だけは3人共に衰えてはいない。

心は今だに折れていない。

生きてると言う強い意思が心を支え、重い体突き動かす。

翔太は懸命に刀を振る。

氷上は氷剣と銃で乱舞する。

康介は必死に雷撃を放つ。

だが、その間にも3人の傷は増えていく。

そして悲痛な悲鳴が響いた。

「ああっ！うっああ」

それは氷上の声。



康介と翔太が慌ててその方向を見ると、そこには肩を噛み付かれている氷上の姿があった。

鋭い爪が深く食い込み、余りの激痛に顔を歪めている。

「彩香！！」

翔太は即座に風の斬撃を飛ばし、そのバケモノを切り裂く。

バケモノから解放された氷上は、力無く地面に膝を落とし、肩を抑えながら歯を食いしばっている。その表情に生氣は薄く、目は虚ろになっていた。

康介は叫ぶ。

「おおおおお！」

怒号のような声と同時に、周囲を雷撃が埋め尽くし、近くのバケモノを葬り去る。

するとバケモノは警戒したかのように動きを止めた。

その隙に翔太と康介は氷上に駆け寄っていく。

「彩香！」

「氷上！大丈夫か！？」

氷上は2人の声に反応し、ふらつきながらも立ち上がった。

「大丈夫……大丈夫よ。」

まだ戦えるわ」

「彩香……」

氷上は明らかに限界だ。いや、限界を超えている。

それでも戦うと言った氷上に翔太は悲痛な表情を浮かべる。

だが、限界なのは氷上だけではない。翔太も康介も、共に限界だろう。

3人は、気力だけで立っている。

そんな時、不意に声が聴こえた。

「氷上、翔太。見てみるよ」

康介が指を刺す。

その先には、必死に叫んでいる皆の姿。

頑張れ

そう聴こえた。結界越しで声は希薄だが、確かに3人の耳に届いた。

「ふふっ、不思議ね。何だか体が軽くなっ たわ」

氷上の表情に生気が戻る。

「はははっ、声援の力だな。俺もまだいける気がしてきた」

翔太が笑みを浮かべる。

「そうだな。しかし、ここに来て頑張れとは酷な注文だな。けど、その声援には応えるしかないだろ」

康介の瞳に強い光が灯る。

「これでバケモノを全滅させたら私達、危険生物から街を守ったって表彰されるかしら？」

「街の英雄になれるな！」

「むしろ報奨金が出るかも知れないぞ？」

それはまるで日常会話。笑みを浮かべながら話している。

「なんにせよ、この場を切り抜けなきゃね」

「ちょっとしんどいな」

氷上と翔太は辺りを見回す。さっきまでの戦闘で数は減ったが、今だバケモノは100近く残っている。しかもその半数は固い外皮のバケモノ。

今は幸いにも、警戒して襲い掛かつては来ていないが、ジリジリと近寄って来ている。

少し元気が戻ったとは言え、この状況に打つ手はない。

そこに、康介が口を開く。

「2人に頼みがある」

「ん？」

「なに？」

「少しでもいい、時間を稼いでくれ」

「……何か手があるんだな？」

「ああ」

翔太の問い掛けに、康介が力強く答える。

「決まりね。私は全力で康介君を護るわ」

「俺もだ。康介にバケモノは近づけさせない」

心強い言葉。氷上と翔太の目には希望が映っていた。

康介ならやってくれる

2人はそう信じている。

「ありがとう。」

それじゃあ、始めるぞ」

康介はそう言うと、集中するために目を閉じた。

そして言葉を紡ぎだす。

「  
」

それは小声で聞き取る事は出来ないが、非常に長い言葉。

そして康介から電気が迸り始めた。

バケモノはそれに反応し、動きだす。

氷上はバケモノの前に立ち塞がる。

力を振り絞り、巨大な氷の弾丸を撃ちだし、氷柱の雨を降らせる。

康介からバケモノの注意を逸らす為に、無理をして大柄な攻撃を仕掛ける。

「ここから先は、絶対に通さない！」

叫びながら氷剣でバケモノを切り裂く。

回り込まれないように果敢に走りながら銃を乱射し、固い外皮を持つバケモノには、爪で裂かれようと近づき同じ場所に連続で撃ち込む。

外皮が割れた所で氷剣を突き刺し、切り捨てる。

康介に襲い掛かろうとするバケモノを見つければ、その間に割って入って、身を呈して護り抜く。

腕はあらぬ方向に曲がり、足は裂かれ、動いているのが不思議なぐらいの状態。

いつ死んでもおかしくない出血量。

それでも氷上は体を引きずりながらも、康介を護り続ける。

まだ希望は潰えていないと、自身を奮い立たせながらバケモノを潰し、貫き、切り捨てる。

翔太は叫び、刀を振るう。

「うおおおお！」

放たれる巨大な風の斬撃。

それは眼前のバケモノを纏めて切り裂く。が、固い外皮でそれを弾くのもいる。

それに翔太は接近すると、口の中に鎌鼬を放って内部から切り刻む。

有効な方法だが、それは1体に集中しないと出来ない攻撃。

当然の如く、負う傷は増える。

しかしそんなのは気にしないかのようにそれを繰り返す。

康介にバケモノが迫れば、自分の防御を捨て、竜巻を放ってそのバケモノを吹き飛ばす。

「康介は絶対護る！」

声を張り上げ、刀で1体、また1体と切り裂いていく。

肩を爪が貫き、脇腹に噛み付かれて肉を抉られ、突進を喰らい吹き飛ばされて吐血しようとも、何度でも立ち上がる。

風の斬撃、鎌鼬、竜巻、自身の持つ全ての手段を駆使し、バケモノを打ち倒す。

翔太の体は全身赤に染まっている。通った場所に血の軌跡を残し、飛びそうになる意識を必死に繋ぎ止めて、バケモノと相対する。

康介を信じて戦い続ける。

氷上と翔太が時間稼ぎを始めて、まだ数十秒。

しかし2人には、とても長く感じられるだろう。

1分、10分、1時間、もっと長く感じているかもしれない。

それ程までに苛酷で、激しい戦いを繰り広げている。

2人共、限界など既に超えているだろう。

そんな2人を突き動かすのは康介の存在。

康介ならきつと　そう思い求められた時間を稼いでいる。

その康介は、今だに何かを呟き続けているが、進む電気は攻撃に使えるくらいに凄まじい物になっていた。

しかし、それでも完成ではない。

翔太と氷上は、康介から溢れ出る力を背中に感じ、それを励みに戦い続ける。

が、2人は本当の限界を迎えたように、急激に動きが鈍くなる。

翔太は刀を落とし、氷上も氷剣を維持できなくなり、銃から弾丸も出せなくなった。

2人はそれでも諦めず、己の体のみで戦おうとする。

その時、待ちに待った康介の声が響く。

「2人共、ありがとう。下がってくれ！」

それと同時に翔太と氷上は、康介の場所まで戻る。



「終わりにしよう」

そう言うつと康介は最後の言葉を口にする。

「全てを穿て！断罪の雷！いかずちジャツジメント！」

それと同時に上空から、幾重にも束ねられた巨大な稲妻が降り注ぐ。

それは数え切れない程の数。

稲妻は次々とバケモノを穿ち、焼き払い、消し炭に変えていく。

直撃しなかったバケモノも、地面を這うような稲妻に巻き込まれ、命を奪われていく。

圧倒的な力の奔流が、バケモノを嘲笑うかのように蹂躞する。

稲妻が収まり、煙りが晴れると、そこには康介達3人だけが立っていた。

しかし3人も、糸が切れたように崩れ落ちる。

地面に身を投げ出しながら康介が口を開く。

「氷上、翔太、大丈夫か？」

「全身の感覚がないわ」

「同じく。あんまり大丈夫じゃない」

全員意識はあるようだ。しかし生きているのが不思議な程の傷と出血をしている。

「終わった……のよね？」

「ああ。終わりだ」

氷上の問いに康介は答え、続けて話す。

「2人のおかげだ。氷上、ありがとう」

「助け合い　でしょ？」

氷上は悪戯っぽく答える。

「翔太、ありがとう」

「気にすんな、3人の力だよ」

そう話すと3人は、そのままの体勢で拳をぶつけ合う。

すると、学校を覆っていた結界が消え、大歓声が響き渡る。皆が康介達の勝利に、いや、康介達が生きている事に歓喜している。

「はは　凄い歓声だな」

「そうね、これからは人気者かしら」

「それは勘弁。俺は目立ちたくない」

「康介君、それはもう無理よ」

「……だよな」

呆れたように言う氷上に、康介はうなだれながらそう言う。  
この期に及んで、目立ちたくないなど、到底無理な話だ。  
康介はその事に落胆する。

「「ぷっ、はははは！」」

そんな康介に、氷上と翔太は2人揃って笑いだした。

「笑うなよ」

康介はそう言うが、その顔は2人に吊られて満面の笑みを浮かべていた。

## 第17話 戦いの後（前書き）

サブタイトルが思いつかない。

そして更新遅くなりました。

## 第17話 戦いの後

「……暇だ」

康介はベッドから上半身だけを起こして、窓の外をぼんやり眺めている。

あの戦いから既に3週間が経ったが、康介達3人は入院生活を送っていた。

佐藤や折田がお見舞いに来たりはするが、基本的には暇な毎日。特に何もする事のない生活が3週間も続けば、誰でも暇を持て余す。

そんな時、急に病室のドアが開いた。

康介は入って来た相手を見て顔をしかめる。

「ノックくらいしたらどうだ？ 翔太」

そう言いながら康介はノックも無しに入って来た翔太に不快そうな視線を送るが、翔太は気にした様子もなく近寄って行く。

「細かい事気にしてるとハゲンぞ？」

「ああ、悪かったな」

「え？謝るの！？」

「翔太に常識を求めるなんて、土台無理な話だった。それこそ指先一つで地球を破壊するくらいにな」

「……康介が俺の事、どう思ってるかわかって嬉しいよ」

翔太はそう言うと、康介の言葉にショックを隠しきれない様子でガックリ頂垂れる。

「で、何しに来たんだ？まさか落ち込む為に来たのか？」

落ち込む翔太を鬱陶しそうに見ながら康介が問い掛ける。

「最近言葉に遠慮が無くなったな……まあいいや。  
暇だから来てみたただけだよ」

「よし、帰れ。怪我人は暇なのが当たり前だ」

「怪我ならもう治った！ってか俺ら全員、後2日くらいで退院だつてよ！」

そう言うと翔太は、治った事をアピールするかのように、大袈裟に体を動かし出す。

「動き回るな、鬱陶しい。ってかその気持ち悪いダンスは何だ？」

「喜びの舞！」

「……調度病院にいるんだ、頭も診てもらったらどうだ？」

康介が言いながらナースコールを手に取り、そのまま押そうとすると、氷上が病室に入って来た。

「ダメよ康介君。翔太君の頭の病気は、どんな医療や能力でも治せないわ」

「氷上か。確かにあのイカレ具合は、医者でも匙を投げるな」

「ええ、不治の病って事ね」

2人は翔太を余所に、諦めた様に首を振りながら話し出す。

「康介康介。彩香にノックしないで入って来た事咎めねえの?」

「それより氷上。具合はもう良いのか?」

「無視かよ!?!」

「ええ。流石は再生の能力ね。傷1つ残ってないわよ」

「彩香まで無視!?!」

「まあSランクの再生能力者は死なない限り、失った肢体ですら再生出来るらしいからな」

「それは凄いわね」

「ちよつ、無視しないで!」

翔太は話しを続ける2人に、縋るように近づく。  
すると2人は話を止め、翔太に向き直る。

「翔太、細かい事気にするとハゲるぞ?」

「無視って細かくねえよ!? イジメだよ!? イジメ、ダメ、絶対!」

「翔太君、病院で大声出したらダメよ」

「俺どんな扱い!? 俺の事は全否定ですか!? ガラスのハートが砕け散る!」

「よく言うよ。ガラスはガラスでも、銃で撃っても割れない防弾ガラスだろうに」

「俺の心どんだけ丈夫なんだよ!? 図太い神経とかスキップで通り越してるけど!」

そこまで話すと翔太は叫び疲れたのか、息を荒げる。

そこにドアをノックする音が響いた。

「どうぞ」

康介がノックに応えると、ドアが開き、見知らぬ男が入って来る。

「病院内では静かにした方が良いと思うが?」

男はそう言いながら歩み寄っていく。

3人は男の言葉に、バツが悪そうにするが、すぐに康介が口を開いた。

「貴方は……?」



男は康介の問いに、身なりを整え答える。

「自己紹介が遅れたね。私は軍特務隊所属、嶋田玲志だ。今日は君達に、先日の事件の件で用があつてね」

3人はその自己紹介に息を呑み、表情を強張せ、翔太はボソッと呟いた。

「特務隊……軍の最強部隊じゃねえか……」

その呟きが聴こえてか、嶋田は柔らかい笑顔で話し出す。

「そんなに緊張しないで良いよ。さて、用件は3つあるのだが、いかな？」

「ええ、どうぞ」

嶋田の柔らかな態度で、若干ながら緊張が解れた氷上が応える。

「先ずは謝罪。

我々の対応が悪かった為に、救援に行く事が遅れてしまった。軍を代表して謝罪する。済まなかった」

嶋田はそう言うのと深く頭を下げる。

その行動に3人は驚くが、その表情はどこか複雑だ。

軍の対応がもっと早ければ助かった生徒も増えたのではないか。そう考えるも、嶋田個人が悪い訳ではない為、責め立てる事もしない。

その結果、病室に沈黙が流れた。

そのまましばらく経ち、嶋田は頭を上げる。

「済まなかった」

「もう良いです。2つ目は何ですか？」

再度謝罪する嶋田に、康介は無表情で言い放つ。

「次は簡単な事情聴取になるのかな。

君達はその時に武器を持っていたと他の生徒から聴いた。けど武器なんて普段から持ち歩く物じゃない。つまり、君達はあの襲撃を予見していた。違つかい？」

「あれは予想外でした」

質問に康介は毅然とした態度で答える。

「ならば何を予想していたのかな？」

「……俺達は以前にもバケモノに襲われました。その時にトロイの氷炎と接触し、恐らく狙われています」

「つまり君達は護身の為に武器を携帯していた、と言う事かな？」

嶋田が康介の言葉に続けて言うと、3人は頷いた。

「その時に軍に通報しなかった理由は？」

「通報したとして、俺達子供の言うことを軍の末端が信じたと思います？」

康介がそう言うと、嶋田は目を細める。

「嶋田さんなら信じたかもしれませんが、俺達の話しを聞くのは軍の末端の人。いきなりトロイなど大事を訴えても、笑われて一蹴されると思うのですが」

「そう……かもね。いや、そうだろうな。  
しかしトロイ、そして氷炎か……。厄介だな」

嶋田は苦々しい表情を浮かべる。

「特務隊でも氷炎を捕まえないんですか？」

氷上が問い掛ける。

「……特務隊員でも、氷炎を単体で相手取る事は難しい。恐らく相打ち、最悪殺される」

嶋田が言うと、氷上と翔太は固唾を飲む。

特務隊は最強の部隊。その隊員でも勝てないかもしれないと言う  
事実緊張が走る。

「そして氷炎には相棒がいる。情報では女性らしいが、そいつも氷炎と同等と見た方がいいだろう。」

氷炎とその相棒は危険過ぎる。特務隊も全員が召集され、全力で事に当たるだろう。が、トロイの規模、実力は共に未知数。軍で対処しきれるかどうか」

嶋田が話し終わると、氷上と翔太は不安そうな表情を浮かべ、康

介は手を顎にあてて考え込む。

「どうかしたのかい？」

「……何故それを俺達民間人に？ 余計な混乱を招く情報でしょう？」

康介の言うことは確かだ。強大な相手の存在、その情報が広まってしまうと人々は少なからず恐怖するはず。

「軍の今後の動向を話す……俺達に協力させる気ですか？」

康介がそこまで言うとは嶋田は驚いた顔をする。

「……そうなんですか？」

氷上が恐る恐る問い掛ける。

「和田くん……だったかな、君は聡いね。それが次の話だよ。もっとも協力させる、なんて強制的な物じゃないがね」

嶋田は康介に感嘆したような表情を見せるが、すぐに真剣な顔になり、話しを続ける。

「君達は強い。たった3人で大量のバケモノを殲滅出来るほどにね。軍でもすぐに通用する實力だよ。」

「軍に入らないか？ そうしたら学校もすぐに卒業させよう。軍でもある程度の優遇を約束する」

その言葉に3人は驚く。

「どうだ？ 悪い話してはないだろう？」

嶋田は返事を促すように3人を見る。

「……卒業するまで考えたいですね」

康介がそう言つと、嶋田は残念そうな表情を浮かべる。

「そうか。君達は？」

「俺もまだ学校に通っていたいので」

「私もです」

「……残念だ。今は卒業後に期待するでしょう。」

それでは時間を取らせて済まなかったね。失礼するよ」

そう言つと嶋田は病室から出て行つた。

ドアが閉まったのを確認してから翔太が大きく息を吐く。

「あー、緊張した」

「私も肩が凝つたわ」

そう言つと、翔太と氷上はグツタリと姿勢を崩す。

「とんだ狸だったな」

康介が小さく呟くと、氷上がそれに反応した。

「そうね。危うく自発的に動くように誘導されるところだったわ」

「氷上もそう思ったか」

「どういう事？」

2人の会話に翔太は首を傾げる。

「あいつはトロイの情報、危険性の大きさと軍で対処しきれない可能性を俺達に示しただろ？ その時翔太はどう思った？」

「どうって言われても……」

「こう思わなかったか？ 自分に何か出来ることはないか？ ってな」

「まあ思ったな……あー、そう言う事か」

「そう、あいつは俺達が自発的に協力を申し出るように誘導してた。それに俺が気づいたと分かったら、次は俺達の実力を讃え、高待遇って餌で引き込もうとした」

「……それで狸って事か」

康介の説明で翔太は理解したように頷く。

「けど、それ程切羽詰まった状況なのかしら？」

「さあ？ それはどうだかな」

氷上の問いに康介は首を横に振りながら答える。

しばらく3人は考え込んでいたが、不意に翔太が口を開く。

「まあこの話は終わりにしよぜ！ 気が滅入っちゃう」

「そうだな」

「ええ、今はもう止めましょ」

翔太の言葉に康介と氷上は頷くとその会話を打ち切り、雑談を始める。

しかし康介だけは、難しい顔で何かを考え込んでいた。

## 第17話 戦いの後（後書き）

前半の翔太の会話がめっちゃ書きやすい！  
どうやら翔太は弄られキャラらしい



## 第18話 退院パーティー

康介は疲れたように壁にもたれ掛かっていた。

「康介もこつち来いよ！」

「そうだよ康介。皆で楽しもうよ」

翔太と折田が康介を手招きする。

「3人の退院パーティーなんだから、主役の1人の和田くんが壁にへばり付いててどうするの？」

「そうよ、康介君も盛り上がりましょ？」

佐藤と氷上も、部屋の隅にいる康介に話し掛ける。

「……パーティーは良いでしょう。勝手に俺ん家にしたのも、まあ良しでしょう。が、なんで闇鍋なんだ？」

康介は頭を抱える。その視線の先には、4人が囲むテーブルの上にセッティングされている鍋道具1式と、それぞれが買ってきたであろう食材が置いてあった。もちろん食材は中が見えない袋に入っていて、中身を知ることはいできない。

「だって普通のパーティーより闇鍋パーティーの方が楽しそうじゃん！」

「黙れ翔太。闇鍋ってのは作ってる時は楽しいが、いざ食べる時に

はテンションが下がるもんなんだよ」

「甘い！ チョコレートのように甘いぞ康介！ あのバケモノの大量から生還した俺は、何が出来ようと恐くない！」

「ならどんなに酷いのが出来ても翔太は残さず食べるんだな？」

「もちろんだ！ って事で、康介も早くこっち来い」

翔太は胸を張って言い切り、再び手招きする。康介はそれに渋々従い席につくが、その表情はどこか暗い。

もともと騒がしいのは好まないのに、退院早々に家に押し掛けられ、拳げ句の果てには闇鍋パーティー。晴れ晴れしい顔は出来ないだろう。

康介がため息をつくとき、佐藤と折田がそこに話し掛ける。

「大丈夫！ 鍋に使う物しか買わないってルールでそれぞれ買い出したからね！」

「だからちゃんと食べれるのが出来るよ」

「なら良いんだが……」

2人の言葉にそう良いつつも、康介の表情は不安に染まっている。だが、そんな不安もどこ吹く風。氷上が皆を促す。

「じゃあそろそろ始めましょ」

その言葉を合図に、電気が消される。

「それじゃあ皆、買ってきた物入れようぜ！」

翔太が言つと、それぞれが食材を鍋に入れていく。部屋は暗くて鍋の状況を確認することは出来ず、音だけが不気味に響き渡っている。

そして点火。

「本当に大丈夫か？」

「大丈夫だつて」

不安げな康介を翔太が宥めながら鍋を掻き混ぜ、それを見ながら折田が呟く。

「ちょっとわくわくする」

「ええ。私達のチームワークなら、きっと美味しい鍋が出来るわ」

「食べれる物しか買つてないしね！早く出来ないかな！」

氷上と佐藤は不安など微塵もないように話している。

康介は顔を強張らせているが、他4人は期待感でいっぱいと言った感じだ。

しばらくすると、グツグツと煮立った音が聴こえてくる。それと共に広がる鍋の匂い。

「……おい。なんだこの匂い」

「たぶん……鍋、だよな」

「……何入れたらこんな匂いになるんだ？」

「入れたのは鍋の具材のはず……」

康介と翔太が話す。表情は暗くて見えないが、声色が不安で満ちている。

部屋にはいろいろな物が入り混じった匂いが充満していた。普通の鍋のように食欲をそそる香りではなく、その逆。思わず顔をしかめてしまう匂い。

「とりあえず翔太が食え」

「なんで俺！？　ここはジャンケンだろ！？」

康介が責任を取れと言わんばかりの雰囲気醸し出すが、翔太は最初に食べるのを嫌がり、そう提案する。

「翔太君、怖い物はないんでしょ？」

「ぐ……。バケモノとは恐さの種類が違っただよ！」

氷上の言葉に翔太は一瞬言葉を詰まらせるが、よほど食べたくないのか前言を撤回した。  
が、それを折田が許さなかった。

「翔太、往生際が悪いよ？ 男に一言はないよね？」

「待ってくれ翼！ ってかお前、俺のこの状況を楽しんでるだろ！？」

「そんな事ないよ」

「嘘つけ！」

「尾崎君、諦めなよ」

「そうよ。観念しなさい」

佐藤と氷上はそう言って翔太に迫る。

「翔太、俺がよそつてやるよ」

康介はそう言うと、鍋をぐるぐると掻き混ぜ始めた。

「なんか、あからさまにでかい具が入ってる……砕くか」

そう呟きながら具を崩すように突つつき、器に盛る。

「ほら。食え」

康介は翔太の目の前に器を突き出す。

「翔太君、頑張ってね」

「翔太ならいけるよ！」

「頑張れ！ 応援してるよ！」

氷上、折田、佐藤は翔太に声援を送る。

「重い……重いよ。皆の声援と期待が重い！」

「ほら」

翔太を言葉を聞いていないかのように、康介がさらにぐいっと器を近づけると、それを翔太は恐る恐る受け取った。

「う……あ……」

器と箸を持ち、ゴクリと生唾を飲み込む。

しかし食べるのを躊躇い、その状態から動かない。それを促すように4人が声を揃えて詰め寄る。

「」「」「さあ！」「」

「え……く、う……」

4人の迫力に翔太は後ずさるが、壁まで追い詰められると意を決したように顔を上げた。

「くっそ！ 食べばいいんだろ！」

そう言って、勢い良く掻き込むように口に含む。

そして 固まった。

「んー！ んー！ー！」

翔太は口の中をいっぱいにしたまま、何かを訴えるようにもがきだす。

「吐くなよ！？ 絶対に吐くなよ！？」

珍しく康介が焦ったように声を荒げる。自分の家で吐かれたら堪ったもんじゃないのだろう。翔太の口を手で塞ぎ、上を向かせた。

すると翔太は、苦しむように床をバンバンと叩き、声にならない声を上げる。

「んー！！」

異常なまでの翔太の反応 それは食べ物を食べた時のものには見えない。

あまりの惨劇に、皆は言葉を失った。

すると、翔太が口を動かします。グチュッグチュッと不快な音をたてながら咀嚼し、飲み込んだ。

康介はそれを確認すると手を離す。

「がはっ、ごほっ！ うおえ……」

塞がれていた口が解放されると同時に、翔太は床に手を着き咳込む。その状況に不安になった折田が、心配そうに声を掛ける。

「だ、大丈夫？」

「……うえええ」

翔太は答えずに、奇声を発して固まっている。

「ちょっとヤバくない？」

「え、ええ。いくらマズイ食べ物でも、こんな反応はしないわよね……」

そんな翔太の様子に、佐藤と氷上がぎこちなく話す。

すると翔太が立ち上がった。

「はは、ははは……」

乾いた笑い声を出しながらフラフラとしている。

「……翔太？」

流石に不安になった康介が翔太に声を掛ける。

すると翔太は誰に言うわけでもなく話し出した。

「これは……何なんだ。苦い？　ピリ辛？　まろやか？　臭い？  
いや、これは形容出来ない。  
こんな、こんなものが！　存在していいのか！？」

その様子は、まるで何かに訴えかけるようだ。

「何なのよ。いったいどんな味だったのよ……」



壊れかけた翔太を見た氷上がそう呟く。

「ねえ、電気つけてみない？」

翔太をここまで追い込んだ鍋正体が気になった折田が、そう提案する。

「うん。そうしよう」

佐藤は頷くと、電気をつけようと立ち上がった。  
しかし、そこに制止の声が掛かる。

「待ってくれ！ 俺は見たくない！ 自分が食べたコレを見たくないんだ！ もし見てしまったら……俺は、俺は」

翔太が必死に訴えるが、無情にも言い終わる前に電気がつけられてしまう。

そして顕わになる鍋。

翔太以外の4人は、その中身を見ると息を呑む。

そして翔太は

「あ、ああ……あ。俺は……これを食べたのか……。こんな“モノ”を……」

放心状態になった。

鍋の中身　それは非常にグロテスクな物だった。

黒みがかったピンク色のようなつゆ。

所々に浮かんでいる、黒っぽい魚の内臓のような物。

豆腐は潰れ、ペースト状に。そして、突き出す魚の頭。

それを見た康介が皆に話し掛ける。

「これのどこが食える物なんだ？　いったい何を買ってきた？」

その問いに、それぞれ答えだす。

「私は豆乳鍋が良かったから豆乳よ」

と、氷上が。

「私はキムチ鍋が食べたかったから、キムチの素」

と、佐藤が。

「俺はすき焼きの素とラム肉と豆腐」

と、折田が。

それを聞いた康介は頭を抱えた。そして、今だ放心状態の翔太に声を掛ける。

「で、翔太は？」

「俺は……、良いダシが取れると思って、鮫を1匹……」

翔太は、途切れ途切れに答える。

「鮫？ 鮫だと？ お前 頭湧いてるんじゃないか？  
良いダシ？ 鮫から取れるわけないだろ。ましてや内臓も取らずに。  
鮫以外は確かに食べれる物ばかりだが……組み合わせが最悪だ。な  
んで皆して味付け買ってたんだよ」

康介は怒っているような、呆れているような、何とも言えない表情で翔太に言う。

鮫は腐敗臭が強い。内臓を取らなければなおさらだろう。部屋に  
充満する異臭は、間違いなくその鮫が原因だ。

そして混ざりあった味付け。クセの強いラム肉。  
もはやその鍋の味は想像すら出来ない。

「ねえ、どうするの？ コレ」

氷上が言うと、皆が顔を引き攣らせた。

「どうするも何も……捨てるしかないでしょ」

「とりあえず、食べるって選択肢はないね」

佐藤と折田が、汚物を見るような視線を鍋に向ける。  
そして捨てようとする、そこに翔太が口を挟む。

「待てよ！ 俺が食べたんだから、皆も食べるよ！」

「こんなの食えるわけないだろ……」

「ええ、私も無理よ」

康介と氷上がそう言つと、翔太は折田に視線を向ける。

「康介は関係ないから食べなくても良い。女性陣もしょうがない。けど、翼はもちろん食つよな？当事者なんだから」

翔太はいつの間にか器に盛つた鍋の具を持ち、折田に近づいていく。

そして有無を言わずに、器を折田に押し付ける。

「え……。俺……。も？」

折田は器を片手に冷や汗をかく。

「道連れだ！ さあ食べえ！」

「わかつたよ……」

翔太に促され、折田は箸で鮫の肉らしき物を掴み、口の前まで運ぶ。その手はプルプルと震え、食べるのを体が拒んでいるようだ。

だが、やがて目を瞑り、口の中にそれを放り込んだ。

直後。

「ん！？」

奇声を発した。折田ではなく翔太が。

折田は口の中に入れる瞬間に、具を翔太の口の中に転移させたのだ。

「うおええええええ！！」

翔太は叫びながらトイレに走って行く。

さつきは味覚、嗅覚、触覚だけを感じたが、今はそれに視覚も加わっている。あのグロテスクな見た目が。

よって、さつきよりも激しく反応　いや、拒絶反応が起きた。

「げあ　うえ……えっ、ええ！」

トイレから嫌な声が響く。

「……聞かなかったことにしよう」

「そうね。今のうちに片付けましょ」

康介と氷上がそう言つと、4人で闇鍋を捨て、片付け始める。その途中に折田が罪悪感から呟く。

「ごめん、翔太」

片付けが終わり、しばらくすると翔太が戻ってきた。その顔は心

なしかゲッソリしている。

「大丈夫？」

「お、おお……。大丈夫、大丈夫だ。きっと俺は大丈夫。俺ならイケる」

氷上の問い掛けに翔太はそう答える。

大丈夫と何度も繰り返して呟いているその姿は、とても大丈夫には見えない。

それを見かねたように佐藤が口を開く。

「病院連れてった方が良さそうだよ？」

「この場合は何科？」

「んー、内科かしら？」

「心療内科じゃないか？」

佐藤の言葉に折田、氷上、康介がそれぞれ答える。

そしてそのまま雑談を始め、しばらく談笑していると、復活した翔太が話し出す。

「はは、死ぬかと思った……。皆、料理は時として人をも殺せるんだぜ？」

「翔太、もう大丈夫なのか？」

「おお。もう平気だ」

康介の問い掛けに、今度はしっかりと答えると、折田に向き直る。

「翼、意外とえげつないな」

その言葉には、若干だが怒気が竦っていた。流石にマズイと思った折田は素直に謝る。

「ごめん。アレを食べる度胸はなかったよ」

「確かにアレを食べるのは翔太君だけね」

「彩香の中の俺ってどんなゲテモノ食い！？俺だってアレはもう食えねえよ！

ってか止めよう！この話しは止めよう！思い出たくない！」

翔太はそう言う子供のように屈み、耳を塞ぐとそのまま動かなくなつた。

その様子を見た康介は、眉をひそめながら呟く。

「これは重症だな」

「もはやトラウマね。けど、少しどんな味が気になつたわ」

翔太を横目に見ながら氷上がそんな事を口にする。

すると佐藤が、生ゴミとして捨てられている鍋だった物を指して問い掛けた。

「じゃあ彩香も食べてみる？」

「死んでもごめんよ」

顔を歪めながら、氷上は答える。

気にはなるがなくても、先程の翔太を見た後に食べる度胸はないのだ。

そしてしばらくしてから、康介達3人の退院パーティーはお開きになった。



## 第18話 退院パーティー（後書き）

翔太が少し可哀相になった。

そして折田がエグイ。

ってかってか、折田と佐藤は久々の登場だ。最近は空気みたいだったからなー。

ちなみに闇鍋は実話に基づくフィクションです。  
実際は鮫の切り身でした。

そして、鮫が好きな人いたらすいません。

## 第19話 廻り始める齒車1

学校の昼休み、五人は屋上に集まっている。

「……疲れた」

「ええ、私もよ」

「流石の俺もへとへとだ」

「あはは！ まあ三人は皆のヒーローだからね」

康介、氷上、翔太はグツタリとうなだれていた。  
それを折田は笑いながら見ている。

何故疲れているのか、それは康介達三人が学校の有名人だからだ。  
バケモノ襲撃の時の三人の戦いは誰もが見ていた。その強さに憧  
れた生徒達が、約一ヶ月ぶりに登校してきた三人に殺到したのだ。

「はあ……。教室に戻りたくないわね」

「同感だ」

氷上と康介はため息を吐く。

「確かに疲れたけど、俺は満更でもないんだけどな！」

「……翔太は幸せそうだな」

「人生楽しんだもん勝ちだからな！」

「楽しむ……か」

どこか遠い目をしながら康介は小さく呟く。その言葉は誰にも届かなかったようで、翔太が皆に自分の人生論について語り出していた。

康介は苦笑すると、翔太のバカらしい人生論に耳を傾けた。

しばらくすると、佐藤が急に話しを変える。

「あつ、そう言えば和田君達は入院してたから知らないよね」

その言葉に三人は首を傾げた。自分達が入院してる間の事は何かあったのか全く知らないのだ。

その事について佐藤は説明し始める。

「最近、箱庭が物騒なんだよね。次々と政府関連施設が爆破されてさ。トロイの仕業じゃないかって、もっぱらの噂だよ」

「調度、バケモノの襲撃の後くらいから始まったんだよ。だからあのバケモノもトロイの差し金なんじゃないかな」

佐藤の説明を補足するように折田も話す。

あくまで噂の範囲だが、その話しは、康介達にとっての信憑性は高い。

その為、康介、翔太、氷上は反射的に顔を見合わせた。その表情は苦々しいもので、三人は黙り込んでしまう。

そんな三人の様子を不思議そうに折田が覗き込む。

「どうしたの？」

その声で三人は我に戻り、康介が慌てて返事を返す。

「あ……いや、何でもない」

「ええ、物騒な話だったからちよつとね」

「そんなんじゃ、おちおち遊んでいられねえな」

康介に続いて氷上と翔太も、ごまかすように言う。

しかしその声は上擦っていた為、折田と佐藤は不振に思ったのか目を細めた。

「三人共、何か知ってるんじゃないの？」

佐藤が真剣な面持ちで康介達を見据える。その問いに翔太と氷上は一瞬の動揺を見せるが、康介だけは飄々と答える。

「さあ？ その事は今初めて知ったからな」

「なら良いんだけどね」

佐藤は納得いらないと言う風な表情を浮かべているが、とりあえず引き下がった事に三人は内心ホッとする。

「そろそろ時間だね」

話しが一段落ついたのでを見計らったように折田がそう言って立ち上がった。

時間を確認すると、休み時間が終わる五分前。

「そろそろ行こうぜ」

翔太が歩きだすと、他の四人も追うように動きだし、教室に向かった。

放課後、氷上と翔太は以前特訓をしていた廃区画にいた。

「ここに来るのも約一ヶ月ぶりだ」

「ええ。久々の特訓ね」

「ずっと入院生活だったから大分鈍ってそう」

二人は特訓をする為に、ここに来たのだ。入院中は碌に体を動かせなかったため、感を取り戻す為に特訓しよう、と言う話しになっていた。

「そう言えば、康介君は？」

「後から来るってさ」

「じゃあ先に始めましょうか」

氷上がそう言うストレッチを始める。  
と、そこに聞き慣れた声が響く。

「なになに、秘密特訓？」

「これが強さの秘密か」

翔太と氷上が振り返ると、そこには佐藤と折田がいた。

「なんでここに？」

氷上が少し驚いた表情を浮かべながら問い掛ける。

「いやー、たまたま二人が歩いてるのを見かけて、デートかと思つて様子を伺つてたんだよ」

「まあ実際は殺伐とした特訓だったみたいだね」

問いに折田と佐藤は、翔太と氷上じゃそれはありえない、とケラケラ笑いながら答えた。

その二人の様子に翔太は悔しそうに肩を震わせる。

「俺だって、俺だって彩香とデートだったら、どんなに良かったか……！」

「あら、特訓だろうと二人きりならデートじゃないの？」

氷上が本当にそう思っているのか、真剣な表情で問い掛けると翔太は驚い様に目を見開く。

「そんな殺伐としたデート聞いたことねえよ!？」

「じゃあどんなのがデートなのよ？」

「それは、やっぱこう……甘酸っぱい感じの？」

翔太は少し考えるような仕草をしながら答えた。

「デートって味がするの？」

「ものの例えだよ!」

「んー、人の不幸は蜜の味、的な？」

「怖あつ!？ 何だよそれ! ってか、論点ズレてる!？」

そう言うつと翔太は氷上の言葉に『もうやだ! 疲れた!』と騒ぎ出した。それを横目に佐藤が引き攣った顔で氷上に話し掛ける。

「彩香、本気で言ってるの？」

それに氷上はヒラヒラと手を動かしながら笑みを浮かべる。

「もちろん冗談よ?」

「あんまり冗談に聞こえなかったよ」

あっけらかんと答える氷上に折田が苦笑すると、佐藤が『そう言えば』と口を開く。

「なんでこんなところで特訓してるの？」

その問いに翔太と氷上は声を詰まらせる。二人が特訓をするのはトロイに対抗　もとい自分の身を護る為。しかしその事を知らない折田と佐藤に、正直に理由を話す訳にはいかない。

とりあえず適当にごまかそうと氷上が口を開く。

「それは」

「俺達に対抗する為、か？」

氷上の言葉に被せるように声が響いた。

「誰！？」

氷上は突然聞こえた声に敵意の籠った口調で返す。

誰、と問い掛けたが、氷上はその声に聞き覚えがあった。

問い掛けに応えるように、声の主は建物の影から姿を現し、氷上達の前に立つと、クスクスと笑いながら話し掛ける。

「久しぶりだね」

「……氷炎」

現れた人物を見ると、氷上は苦々しい表情を浮かべながらボソツと呟いた。

その声が聞こえたのか、佐藤が驚きに焦りが混ざった様子で声を



上げる。

「氷炎って……あの氷炎！？　なんでこんなところに」

その声には恐怖も混ざっていた。しかしそんな事はお構いなしに、氷炎は軽い雰囲気です話します。

「君と君、氷上彩香と尾崎翔太だったかな？　バケモノだらけの学校から生還したらいいじゃん」

「やっぱあれはお前の仕業だったのか！？」

翔太が氷炎を睨みつける。

「そうであって、そうじゃないかな。それよりも」

そこまで言うとなんか笑みを浮かべていた氷炎の表情が真剣なものに変わり、目が細められる。

それと同時に溢れ出す凄まじい威圧感。

殺気とも取れるソレに、氷上達四人は息を呑む。

「あの状況を戦い抜いた君達の強さが知りたくてね。少し相手してもらおうよ」

言い終わると同時に氷炎は四人の視界から消えた。

「っ」

氷上が慌てて氷の壁を作り出す。

その直後、壁に拳が叩き付けられた。

「……速過ぎだろ」

翔太は、その光景に咂然とした。氷炎が消えたと思った次の瞬間には、目の前にいたのだ。

「良く反応したね」

氷炎は満足そうな表情浮かべると、四人に向けて手をかざす。

すると、その手元から氷が地面を這うようにしながら四人に迫る。

「皆下がって！」

佐藤がそう叫ぶのと同時に、四人を覆うようなドーム状の膜が張られ、氷の進行を妨げた。

「へえ。それが陣の能力か。それだけだと障壁の能力みたいだけど、他にも使い道があるんだろう？」

氷炎は四人にゆっくりと近づいていく。

「なんであんな奴がここにいるんだよ」

「翼、話しは後だ。今はどうにかして逃げねえと」

「逃がしてくれると思う？」

佐藤の言葉に、折田と翔太は黙り込んでしまう。

逃げれない。直感でそう悟ってしまったのだ。

そこに、氷上が氷炎に聞こえないように小声で話し掛ける。

「康介君が……康介君がもうすぐ来るはずよ。そうすれば何とかなるかもしれないわ」

康介は後から来ると言っていた。それまで堪えればなんとか力を合わせて逃げれる。氷上は信頼を籠めた目でそう伝えた。

「なら、それまで時間稼ぎだな」

翔太はそう言つと刀を取り出す。

「ええ、頑張りましょう」

氷上も頷き、銃を取り構える。

そこに話しが終わるのを見計らったかのようなタイミングで氷炎が声を掛ける。

「話しは終わった？じゃあ　始めよう」

同時に佐藤の結界が砕け散った。

突然の事に、四人の表情は驚愕に染まる。

氷炎はその一瞬の隙について、翔太の目前に迫っていた。

「驚いてる暇はないよ？」

「！？ くそ！」

翔太は焦り、鎌鼬を放つ。

氷炎はそれを避ける素振りも見せず立ち尽くしたまま笑みを浮かべている。

そして直撃する瞬間、鎌鼬は原形を失い霧散した。

「な！？」

翔太はそれに驚き、動きを止めてしまう。氷炎はすかさずそこに攻撃を加えようとするが、それを阻止するように氷上が氷弾を撃ち込む。

しかし、当たる　　そう思われた氷弾は氷炎が手をかざすだけで消滅してしまった。

その際に翔太は氷炎と距離を取り、四人で一塊になっていたが、その表情は苦々しい。攻撃が効かない　　その事に絶望感を感じていた。

「この程度？」

そんな四人に氷炎が呆れたように、挑発するように鼻で笑う。

氷炎が本気を出している様子は全くない。それにも拘わらず四人は赤子のようにあしらわれていた。

だが、その事で氷炎は完全に油断しきっている。

その心の隙をつくように、折田が氷炎の死角に転移し、全力で蹴り付ける。

が、氷炎は即座に振り返り、その足をつかみ取った。

「転移で死角からの攻撃、なかなか厄介だね。けど残念。俺に死角はないよ」

そう言つと、折田の足を両手で持ち、近くの建物に投げつけた。

折田は成す術なく壁に叩き付けられ、激しい衝撃にうずくまり、うめき声を上げる。

「翼!？」

佐藤か悲鳴に近い声を上げ、折田に駆け寄っていく。

翔太と氷上は、そこに近づけまいと竜巻と氷柱を同時に氷炎に放つ。

が、それも氷炎に届く前に霧散してしまう。

その光景に翔太は思わず毒づく。

「何なんだよ! あ的能力は!？」

氷炎 その二つ名から氷と炎を操る能力かと推測していたが、それだけではなかった。

だが、直接攻撃なら通じると翔太は考え、刀で切り掛かる。

そのまま袈裟懸けに切り裂こうと刀を伸ばした瞬間

翔太の視界から氷炎が消えた。

と、同時に、翔太の体を横から激しい衝撃が襲う。

蹴られた、そう理解する前に翔太は建物に叩き付けられた。

「がつ……」

痛みから声を漏らし、倒れ込む。

折田と翔太は動けず、佐藤は攻撃手段に乏しい。今この瞬間に実質戦えるのは氷上ただ一人。そんなチャンスにも係わらず、氷炎は追撃をかけずに笑みを浮かべながら口を開いた。

「ああ、そう言えば、君達の頼みの綱の和田康介なら来ないよ。いや、来れない、と言った方が良いかな。

彼の所には、俺のパートナーが向かってるからね」

「え……」

氷炎の言葉に、氷上は愕然とした。

以前話しに聞いた、氷炎に匹敵すると予想されているパートナー。それが康介の下に向かっていていると言う事で、助けは来ないと思ってしまったのだ。

普段ならば敵の言う事など信じないだろうが、今は冷静ではなく、氷炎の言葉を鵜呑みにしてしまう。

力無く立ち尽くす氷上に、氷炎は楽しそうな笑みを浮かべながら近づいて行く。

そして、氷上の目の前に立ち、言い放つ。

「戦う気力も失ったかい？　じゃあ、そろそろ終わりにしようか」

## 第20話 廻り始める齒車2

康介は一人の女と対峙していた。

見た目は美人で茶髪ロングの優しそうなお姉さんと言った所だ。だが、その見た目とは不釣り合いな威圧感を放っていた。

「あんた誰だ？」

とても友好的とは思えない女に、康介は身構える。

「そうね。氷炎からはキャサリンって呼ばれてるわよ？」

よろしくね、とキャサリンと名乗った女は微笑む。

その自己紹介に入っていた氷炎と言うキーワードに、康介は警戒し、反射的に距離をとる。

「お前……トロイか？」

「言わなくても解るんじゃない？」

「質問を変えよう。お前が氷炎のパートナーか？」

「良く知ってるわね。貴方は和田康介、で合ってる？」

キャサリンが問い掛けるが、康介は目を細めただけで、質問には答えない。

「沈黙もまた解なり、ってね。少し遊んで貰うわよ？」



「出来れば遠慮したいが……」

微笑むキャサリンとは対照的に、康介は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

「こんな可憐な美人が誘ってるのに釣れないわね」

「……可憐な美人は嫌いじゃないが、危険な美人に関わりたくはないな」

「綺麗な華には棘があるものよ？」

「生憎と華を愛でる趣味はないんでね」

だから、と続ける。

「逃げさせて貰う！」

その言葉と同時に、康介は目眩ましに強い閃光を放つ雷球を生み出し、その場から飛びのく。

そのまま離脱しようと走り出すが、キャサリンによってそれは阻まれた。

「甘いわね」

辺りに水の膜が二人を包むように、ドーム状に展開される。

閉じ込められた、康介はそう理解すると小さく舌打ちをした。

「これで逃げられないわよ？ さあ、遊びましょ？」

キャサリンは妖艶な笑みを浮かべ、自身の周りに無数の水球を生み出す。

「水の能力か、俺の雷とは相性が悪いぞ？」

だからやめておけ、と康介は言うが、キャサリンは不敵に微笑む。

「それはどうかし、らっ！」

水球から、鋭く尖った水が伸びる。

康介はそれを横に跳んで避けると、お返しだ、と電撃を放った。

だがその電撃はキャサリンに近づくにつれて細くなり、そして消えた。

その光景に康介は眉を顰める。

「……………何をした？」

「確かに水は電気を通すから相性が悪いと思われがちだけど、それは電気を拡散させるって事でもあるのよ？」

赤子に諭すように話すキャサリンに、康介は苛立ちを感じたように表情を変えると、無数の雷球を作り出す。

そして雷球から幾条もの電撃が放たれる。

しかしキャサリンは、迫り来る電撃を前にクスツと笑った。

「無駄よ」

微動だもしていないにも係わらず、またしても電撃は消えて行く。

康介は必死に考える。キャサリンは水で防御している訳ではない、なのに何故電撃が悉く消されるのか。  
しかし答えは出ない。

そんな康介の心情を悟つてか、キャサリンが口を開く。

「解せない、と言いたげね」

そう言う表情は余裕に満ちている。

否定できない康介は苦々しく顔を歪めた。

「顔に出やすいのね。良いわ、教えて上げる。

私の能力は、水掌握　いや、水分掌握とでも言うのかしらね」

「水分、掌握？」

康介は聞き慣れない単語に困惑する。

「そう、総ての水分が私の武器。液体は勿論　水に準ずる気体だ  
つてね」

その言葉に康介は、ハツとする。

「……つまり電撃の周りに、大量の空気中の水分を集めて電気を逃がしていた、と？」

「その通り。賢い子は好きよ？」

キャサリンは康介の出した答えに、満足そうに頷く。

「……そうか。だったら、これならどうだ！」

康介は総ての雷球を一つに纏めて巨大な雷球を作りだし、キャサリンに放つ。

「これなら電気を逃がし切る前にキャサリンに届く、と。」

それは多少の減衰はしたが、キャサリンの目前に迫る。  
が、水の膜によって簡単に防がれてしまう。

「言ったでしょ？ 掌握だつて。操るのと掌握するのは違うわ。水から不純物を取り除いて絶縁体にするのは訳無いし、大量の水を圧縮して作った大質量の膜なら、圧力で破られる事もそうそうないわ」

キャサリンはクスクスと笑いながら話す。

康介はそれに悔しそうに歯を食いしばる。

貴方の雷は効かない、遠回しにそう言われた気がしていた。

「っ！ なんで自分の能力についてペラペラと話すんだ？」

普通は隠す物だろう、と問い掛けると、それにキャサリンはニヤツと嫌らしい笑みを浮かべながら答える。

「私だけが貴方の能力を知ってるなんて、フェアじゃないじゃない？ それに このお喋りは、ただの時間稼ぎだから」

どう言う事だ？ 康介がそう問おうとした瞬間

激しい爆発音が響いた。

「なっ！？」

康介は驚き、音のした方に振り返る。

そして絶句した。

黒煙を上げるその場所は、氷上と翔太がいる筈の廃区画。

「氷炎は派手にやってるみたいね。

貴方のお友達 無事かしら？」

キャサリンが廃区画の方を見ながら言う。

康介はその言葉に、最悪の状況を思い浮かべ、震えた声を絞り出す。

「まさか……」

「生きてると良いわね？」

笑顔で言うキャサリン。しかしその優しい表情とは裏腹に、言った内容は酷く残酷だ。

「……さ…え」

「あら、どうしたの？」

俯き、小声で何かを呟く康介に、キャサリンは問い掛ける。  
瞬間、康介は勢い良く顔を上げ、叫んだ。

「許さねえ！！」

怒り狂ったように怒気　いや、殺気を放ち、それと共に凄まじい程の電気が康介から迸る。

「心地好い殺気ね。  
じゃあ　始めましょう」

キャサリンの周りに水が渦巻き出す。

一瞬の膠着。

そして二人は同時に攻撃を放つ。

康介は極太の雷を。

キャサリンは鉄砲水の如き水を。

それらは中央でぶつかり合い、お互いを打ち消した。

「やるじゃない！」

キャサリンは楽しそうに笑いながら鋭い水を康介目掛けて伸ばす。

康介はそれを上に跳んで躲し、巨大な雷球を飛ばす。

それは先程と同様に水の膜によって阻まれるが、康介はそのまま攻め続ける。

その攻撃には戦略など何もない。ただがむしやりに電撃や雷球を放っている。

しかしその威力は先程とは比べ物にならない程強力だ。

が、やはりと言うべきか、その総ては相殺、または打ち消されキヤサリンには届かない。

「無駄と言ったでしょう」

キヤサリンは挑発するように話し掛けると、その言葉に康介は攻撃の手を止めた。

「あら、諦めたの？」

心を逆なでするような問い掛け、それに康介は攻撃で答えた。

「ジャツジメント！」

叫び声と同時に、雨のように降り注ぐ極太の雷。

タイムラグなしで放たれたそれは以前よりも威力で劣るが、対個人が相手ならば十分過ぎる威力。

「くうっ……！」

キヤサリンは突然の攻撃に、分厚い水の膜を張って防御する。

轟く爆音。

辺りに煙が立ち込める。

「まだだ！」

康介は怒りで我を忘れているように、煙の中に電撃を放ち続ける。

一心不乱に何度も何度も。

しばらくしてようやく攻撃の手を止めると、荒くなった呼吸を整えながら周りを見る。

すると、康介を閉じ込めていた水の膜がなくなっていた。

それに気づくやいなや、康介は廃区画に向けて走りだした。

「間に合ってくれ……！」

悲痛な表情を浮かべ、全力で駆けて行く。



康介が去った後、煙が晴れるとそこにはキャサリンが立っていた。

所々、服が煤けているが、それだけでダメージは見られない。

「全く、とんでもない威力ね」

服を叩きながら、呆れたように呟く。

「あの子相手に、氷炎は大丈夫かしら」

キャサリンは、どこか心配そうな眼差しで廃区画の方を眺めていた。

## 第20話 廻り始める歯車2（後書き）

キャサリン登場！

ちよつと前にビルの上に氷炎といた女性です。

ちなみにキャサリンは本名ではないですよ？

キャサリン、作者的には大好きなキャラかもしれない。

つてか……許さねえ！つて康介っぽくなかったかなあ……

## 第21話 本当の力 1

康介は、呼吸をするのも忘れて廃区画で立ち尽くす。

そこは 火の海だった。

至る所に火がつき、付近の建物は瓦礫の山と化している。

その中に一人だけ立っている人物 氷炎がいた。

氷炎は康介に気づくと口を開く。

「ああ、遅かったね」

康介はそれには答えず、必死に氷上と翔太を目で探す。

そして見てしまった。

血を流し、地面に伏している友人の姿を。

「……折田？ 佐藤？」

いるはずのない二人に目を見開く。二人は意識がないようで、返事はない。

視線を横にずらすと、そこには同様に伏している翔太の姿。辛うじて意識があるのか、小さくうめき声を上げている。

そこに弱々しい声が聞こえてきた。

「康……介、君……」

氷上の声だ。

康介は探し、そして見つけた。

そこは氷炎の程近く、氷上が仰向けに倒れ、顔だけを康介に向いている。

「　　っ、氷上――！」

康介は駆け寄ろうとするが、それを妨げるように、氷炎が二人の間に割って入る。

「邪魔だ！　退けえ！」

激昂したように康介は叫ぶ。　　そんな様子を面白そうに氷炎は笑う。

「あの子がそんなに大事？」

倒れている氷上を見遣りながら問い掛ける。

「当たり前だ！」

「それは幼なじみに似てるから？」

「　　っ！」

氷炎の言葉に、康介は声を詰まらせた。

「あの子は幼なじみの代用品って事か」

それに康介が反論するよりも早く　まあ結局、と氷炎は続ける。

「君はまた護れなかったね」

笑みを浮かべながら、そう口にした。

その言葉で、康介の中の何かが　キレた。

沸き上がる負の感情。

「ああああああ！」

康介は雄叫びを上げ、殺意の籠った目で氷炎を見遣る。

そして次の瞬間、氷炎の足元から鋭く尖った岩が突き出した。

「なっ!?!」

康介が岩を操った　その事に氷炎は驚くが、咄嗟にそれを躲す。

そして反撃しようとした康介を見た時、驚愕のあまり硬直した。

氷炎の視界に映ったのは、有り得ない光景。

炎、水、氷、雷、風がそれぞれ球体になっており、周りを飛び交うその数は数えきれない。

「くたばれ」

康介は腕を振るう。

それを合図に、総ての球体が放たれた。

迫る球体を躲す為に氷炎は飛び退こうとするが、それは囲うように地面から伸びてきた鋭い岩によって阻まれる。

そして様々な属性の球体は、その総てが氷炎に降り注いだ。

着弾点で、違う属性のエネルギーが混ざり合い爆発が起こる。

直撃した氷炎は無事では済まないだろう。

しかし康介は、更に追い撃ちをかける為に無情にも言葉を紡ぐ。

「ジャツジメント」

そして降り注ぐ極太の雷。

辺りに轟音が響き渡り、粉塵が舞い上がる。

翔太は遠退く意識を必死に繋ぎ留め、体を起こす。

康介と氷炎は何かを話していて、翔太に気づく様子はない。

翔太は近くに伏している折田と佐藤に近づき、声をかける。

「おい！ 大丈夫か！？」

その声に二人は、僅かに反応する。

「う……」

折田はゆっくりと目を開けると、翔太は不安げに問い掛ける。

「翼、大丈夫か？」

「あ……うん。何とかね」

頭を抑えながら折田は答えた。

その隣では佐藤も意識を取り戻したようで、体を起こしていた。

「瑞葉も大丈夫か？」

「全身が痛いけどなんとか……」

一応大丈夫、と佐藤は頷く。

「彩香はどこだ……？」

翔太は辺りを見回す。と、すぐ後ろから声が聞こえた。

「皆……よかった、生きてたのね」

体を引きずりながらも、氷上は翔太達に近づいて来ていた。  
その時、佐藤が驚きの声を上げる。

「皆……！ あれ見て！」

指差す先には康介の姿。そして、その周りに飛び交う多種多様な属性の球体があった。

その光景に、佐藤以外の三人も驚き　いや、驚愕する。

雷の能力の筈の康介が違う能力を、しかも複数使用している有り得ない光景。

「あれ、……どういう事？」

折田が呟くも、誰もその問いに答えない。いや、四人全員が困惑している為、誰も答えられないのだ。

四人は呆けたように、その光景を見続ける。

そして、それを現実に引き戻すかのような爆発音　次いで雷による轟音が響いた。

その音で皆はハッと我に返り康介を目で探すが、立ち込める粉塵のせいで視界が悪く、見つける事が出来ない。

その粉塵の中、康介は疲労からか膝に手を置き、息を荒げていた。

「やったか……？」

呟きながら顔を上げる。倒したという確信からか、その表情から怒りの色は薄れていた。



「いや、それよりも」

あいつらは、と康介は走りだす。

「大丈夫か！？」

四人を見つけると、康介は声を荒げながら駆け寄って行く。

「ええ、なんとか」

氷上が返事をする、と、康介は皆の姿を確認し、安堵の表情を浮かべる。

「倒したんだよね？」

目を細め、粉塵の中を見遣りながら翔太が問い掛ける。

「ああ、アレを直撃して無事な訳がない」

深く頷きながら、康介は答えた。

と、そこに佐藤が興奮したように立ち上がる。

「そ、それより！ さっきのは」

何かを聞こうとしたが、途中で大きな笑い声が響き、質問は妨げられた。

聞こえ続ける狂ったような笑い声。

まさか、と康介は振り返る。

少しだけ晴れて薄くなった粉塵の中に浮かぶ一つの人影　間違  
いなくそれは氷炎だろう。その事に康介は啞然とする。

すると氷炎は笑いを止めて話し出した。

「これが本当の力か！　凄じじゃないか！　死ぬかと思ったよ！」

感嘆したような口ぶり。そして粉塵で表情はわからないが、声には嬉しさが混ざっているようにも感じる。  
続けて、

「目的は果たしたし今日は引くでしょう」

と、満足そうな声を上げた。

「逃がすとも？」

逃げようとする氷炎に、康介は言い放つ。

しかしそれを気にした様子もなく、氷炎は言う。

「ああ、この粉塵は調度いいね。使わせて貰うよ」

その言葉に、康介は何かに気づき、叫ぶ。

「皆！ 伏せろ！」

直後、その場を爆炎が包みこんだ。

爆炎が晴れると、そこに氷炎の姿はなかった。  
まんまと逃げられた事に、康介は小さく舌打ちをし、四人の方ぬ  
振り返る。

「この障壁……和田君が張ったの？」

康介達の周りには、障壁が張られていた。自分達を爆炎から護つ  
た障壁を見ながら、佐藤は問い掛ける。

「……ああ」

質問に、躊躇いつつも康介は答えた。

「さっき色んな球体は何？ 今の障壁は？ どういう事なの？ 氷  
炎が言ってた本当の力って？」

佐藤は疑問を一気に捲し立てる。気になっているのは佐藤だけで  
はなく皆の視線が康介に集中した。

康介はしばらく口を閉ざしていたが、やがて観念したようにため息を吐く。

「魔法って知ってるか？」

## 第22話 本当の力 2

五人は康介の家にいた。

あの後、まずは場所を変えよう、と康介が提案したからだ。今は簡単な手当も済み、康介が話し始めるのを待っている状況だ。

静寂。

痺れを切らしたように佐藤が口を開く。

「さっき『魔法は知ってるか』って言ったよね。それが何か関係あるの？」

いきなり切り出された本題。数秒の沈黙の後、康介は話し始める。

「俺は……魔法が使えるんだ」

「魔法って、ゲームとか小説であるみたいなの？」

ファンタジーな発言に呆気にとられつつも、佐藤は魔法についての解釈を質問した。

「ああ。まさにそれだ。だからさっきみたいに様々な属性を扱えるし、障壁だって張れる。他にも出来ることは多いよ」

そう肯定すると、折田が羨むように呟く。

「とんでもない能力だね」

確かにそうだ。聞く限りでは、出来ない事なんてないんじゃないかと思える力。

転移しか出来ない折田は、その力が羨ましいと感じていた。その眩きに、康介は口を開く。

「いや、恐らく能力とは違う」

皆は首を傾げる。能力ではない。その意味が分からなかった。能力でないのならいったい何なのか、と。

確かに破格な力だが、科学で説明出来ない人為的な現象を、一般的に能力と呼ぶ。

だったら康介のそれも能力じゃないのか、そう思っていた。そんな中、氷上がボソツと呟いた。

「……魔法使いの一族」

「なんだそれ？」

お伽話に出てきそうな単語に、翔太が呆気にとられた表情を浮かべる。

佐藤と折田も『そんなファンタジーじゃあるまいし』と苦笑いしている。

だが、康介は驚愕していた。

魔法使いの一族。それは実在する。だが、一族は魔法の存在を匿秘し、隠れるように生活していた。したがって、その存在を氷上が知っている訳がないのだ。

にも係わらず、氷上はその名を口にした。

もしかしたら、氷上はあの少女なのではないか。そんな考えが康介の頭をよぎる。

元より容姿も、声も似ている。生きていれば年齢すらも同じだ。そんな氷上が、康介にはあの少女に見えてしまった。そして、気づけば口が動きだしていた。

「氷上……お前は」

言いかけ、止める。

そんな訳はない、と自分に言い聞かせる。しかし同時に、もしかしたら生きていて記憶喪失なんじゃないか、と考えてしまう。

現実と願望。その二つがせめぎ合う。

そんな矛盾する自らの心に、康介は自嘲するような笑みをこぼした。

「康介君？」

「あ、ああ」

黙り込んでいるのを、不思議そうな面持ちの氷上が声をかけると、急に呼ばれて少しばかり動揺しながら康介は返事をした。

そこに翔太が話し掛ける。

「で、どうなんだよ。康介は魔法使いの一族なのか？」

そんな筈ないよな、と微笑しているが、返答は予想の斜め上を  
行くものだった。

「……ああ。魔法使いの一族は実在する。その存在を知られる事な  
くひっそりとな」

その言葉に、翔太だけではでなく、佐藤と折田も驚きを隠わにする  
が、康介はそのまま説明を始める。

「それがさっき言った、能力とは違いつてのに繋がるんだ。  
能力が発見されたのは、ここ三十年くらいだろ？　けど魔法使いの  
一族は、何百年も　いや、もっと前から続いてたんだ。それに、  
仮に能力だとしたら、一族全員が例外なく同じ能力を発現してるっ  
て事になる。そんなのは異常だ。だったら、根本的に違う、と考  
えるのが自然だろ」

言い終えると翔太達は、確かに、と納得したように頷いた。  
ふと、折田が疑問を口にする。

「一族って事は、魔法を使える人が大勢いて、どこかで暮らして  
るでしょ？　どうして康介だけが箱庭にいるの？」

誰にも知られずに暮らしているのなら、わざわざ不自由な箱庭に  
来るのはおかしい、と。

その問いに、康介の表情に影が射す。それは悲痛や後悔が入り混  
じった暗いもの。

「  
だ」



掠れた、消え入るような声。

聞き取れなかった折田は『え?』と聞き返す。

「滅んだ。もう、俺以外は誰もいない」

今度は聞き取れる大きさで言った。

その、あまりの衝撃的な言葉に、皆は息を呑む。

康介の浮かべる表情は、冗談には見えない。それを理解し、誰も、何も言えなくなってしまった。

康介の痛みを理解する事が出来ない者が何を言っても、それは同情、憐れみとしか取れないだろう。四人はそう思い、そして部屋には沈黙が流れた。

しばらくして、康介が口を開く。

「一族の話しは、もう止めにしよう」

暗く、重い声。

四人はそれに、ただ頷く事しか出来なかった。

「そ、それにしても、魔法って最強じゃね!？」

暗い雰囲気を変えようと、翔太が無理矢理明るい口調でそう言った。

本当なら、一族に関係してしまう魔法の話題も避けるべきなのだ

が、それは流石は翔太、といったところ。

しかし、康介は薄く笑みを浮かべた。不器用ながらも、必死に場を明るくしようとする翔太の気遣いが嬉しかったのだ。

「確かに破格な力だが、最強とは言えないさ。大威力の魔法を放つには長い詠唱が必要だしな。詠唱破棄も出来るが、それは威力が落ち、魔力の消耗も激しい。

良く言って万能。悪く言えば中途半端だよ」

「けど、その引き出しの多さはかなりの武器だよね。常に相手に不利で、自分に有利な土俵で戦えるから」

首を横に振りながら否定する康介に、佐藤がそう言った。

その通りだろう。

康介に相性の悪さなど存在しない。

相手が火なら水を使う。そうやって弱点をつけるのだから。

「引き出しの多さは認めるさ」

認めながら苦笑した。

そこに、何か思い出したように氷上が口を開く。

「そういえば、氷炎は康介君の所には俺のパートナーがいるって言うってたけど、どうだったの？」

「ああ……その話をしないとな。俺もそっちの話を聞きたいし」

そう言つと、お互いに襲われた時の事を話します。

互いに全ての経緯を話し終える。

康介達は、佐藤と折田には、巻き込んでしまった以上、事の発端から明かした。

「そんな事になってたんだね……」

トロイに狙われてると知った佐藤が、重苦しい表情を浮かべる。  
折田も同様だ。

「隠してて悪かった」

「いいよ。巻き込まないように、って思って隠したんでしょ？ ちよつと水臭いな、とは思うけど怒ってはないよ」

だから気にしないで、と折田が話し、表情を苦々しいものに変えながら続ける。

「にしても……、トロイに氷炎にキャサリン、か。とんでもないね」

そこに、氷上が思い出したように口を開く。

「そう言えば……氷炎は康介の事を知ってたみたいよね。これが本当の力か！ って笑ってたし」

「ああ。恐らくあいつは知ってるよ。全てをな。俺を狙うのは魔法

が理由だろうな。

そして、さっきの戦いは本気じゃなかった。氷炎も、キャサリンも。今回は魔法の力を見るのが目的だったんだろう」

康介はそう言うと、じゃなきゃあんなにあっさりと引かないさ、と最後に付け加えた。

「殺すつもりはなかった、って事か。けど、魔法の力を確かめて何がしたいんかね？」

さっぱり分からない、といったそぶりをしながら翔太は皆に問い掛ける。

皆は考え込む。

やがて佐藤が自信なさ気に口を開いた。

「利用……じゃない？ 力を確かめた上で、仲間を引き込む予定……とか」

「現状ではそうとしか考えられないな。だとしたら、あいつらは相当頭が悪いな。

あんなに敵対したら、俺が仲間になる訳ないだろうに」

佐藤の意見を肯定しつつも、氷炎に対して呆れたように康介は言う。

と、そこに真剣な表情で氷上が呟いた。

「けど、私達を盾に取って協力を迫ってきたら……？」

その言葉に、康介は息を呑む。  
もしも、氷炎達がそうやって協力を迫ってきたら、康介はそれを断れないだろう。

「……そうならないようにすればいい。せつかくある力だ。護る為に惜しみなく使うさ」

氷上に視線を向けながら、今度こそきつと……、と聞こえないように呟いた。

皆は、康介の頼もしい言葉に表情を少し明るくする。  
康介なら護ってくれる、と。しかし同時に、なんとも言えない歯痒さを感じた。

自分達は何も出来ずに、ただ護られるだけなのか。力になれずに康介の弱点なだけなのか、と。

確かに、皆は巻き込まれたただけなのだが、何も出来ないのが悔しかった。

強くなりたい      その気持ち膨らんでいく。

それを翔太が言葉にした。

「俺達も……強くなきゃな」

小さな声。

しかしその声には、絶対に強くなる、と強い決意が籠っていた。

それに皆は力強く頷く。

康介が自分達を護ってくれるのなら、その康介は自分達が護ろうと。

言葉には出さないが、それぞれの強い意思が、雰囲気から滲み出ている。

それを感じ取ったのか、康介は薄く笑みを浮かべていた。

程無くして、康介が立ち上がった。

「今日はもう休もう。疲れただろ。帰るのが面倒だったら泊まってる方がいいぞ」

それに皆はそれぞれ返事を返すと、康介は部屋を出て行った。

氷上と翔太は、ベランダで夜空を眺めていた。

ふと、翔太が口を開く。

「俺達……また護られたな」

俯き。自分の無力を嘆く。

「ええ。けど、だからこそ、強くなるんでしょ？ さっき、そう決めたじゃない」

「……そうだよな。けど、なんか……こう、ね。」

前に、皆で助け合うつて決めたじゃん？　けど今は助けられてるだけ……」

自嘲するような笑みを浮かべる。

「そりゃあ、バケモノの襲撃の時はさ、康介と肩を並べて戦えてる、助け合えてる、って実感あったよ。

けど、追いついたと思ったら、康介はまた一歩前に進んでる」

星を掴むように手を伸ばす。

そして、何も掴めず空を切った手を眺めながら呟く。

「こんな風に……届かない」

そう言うつと、翔太は黙り込んでしまった。

翔太が吐いた弱音　氷上にはその気持ちが理解できた。

「わかるわよ、その気持ち。

康介君は強い。今の私達は、その背中に縋り付こうと、必死に追いかけてる状態よね」

ホント情けないわね、と。

「でもね、翔太君。私達はこれからでしょ？　私達はまだまだ強くなれる。弱気になっても何も変わらないわよ？」

「そう、だな」

氷上の言葉に翔太は頷くが、その表情は今だ暗いままだ。

「なあ、彩香。もう一つ聞いて貰っていいか？」

「ええ。いいわよ」

「さつき、強くならなきゃ、って言ったじゃん？ あれさ、康介の力になりたいって気持ちもあつたけど、それと同じくらい康介の強さが羨ましい いや、康介に劣ってるのが悔しかったから出た言葉なんだ」

そう言う表情は、自己嫌悪に染まっている。

強くなりたい理由が、康介の為と劣等感の半々。張り合ってる状態ではないにも係わらず、康介に負けたくないと感じている自分に嫌気がさしていた。

どうして『康介の為に』と、それだけを考えれないのか。

「結局俺は、劣等感を払拭する為に強くなりたいのかもしれない」

最低だよな、と翔太は自嘲し、罵られるのを覚悟する。

そして氷上が口を開く。

「いいんじゃない？ それで」

その予想外な反応に、翔太は目を丸くする。

「……え？」

「少しでも康介君の力になりたいって気持ちがあるなら、それでも良いんじゃない？」



気にする事じゃないわよ、と氷上は言う。

が、翔太は納得しない。

その様子に氷上が続けて話し出す。

「あのね、翔太君。

誰誰の為に　とか道徳心だけで強くなれるなら、世の中は最強の人間だらけよ？　人は道徳心だけじゃ強くなれない。自分の為の行動でないと、どこかで折れてしまうわ。

だから劣等感が理由でも良いじゃない。そうやって、今の翔太君みたいに悩んで、それを越えた人ほど成長するものよ」

その言葉に、翔太は呆気にとられた顔をする。

「そんなもんなのか？」

「そんなもんよ。

ただ　悪意に基づく力は成長ではなく、墮落だと思っただけね。

それを間違えなければ良い。自分の為の向上心と、ちょっとした他人を思いやる心を持っていればそれでいいのよ。

そうすれば、良い結果は後からしっかりついて来るわ」

私の持論だけどね、と付け加えると、氷上は微笑み掛ける。

翔太はしばらく考え込んでいるように黙っていたが、やがて『うし！』と気合いの入った声を上げる。

「彩香、ありがとな。なんかすつきりした！」

「役に立ててよかったわ」

翔太の付き物の落ちたような表情に、安心したように氷上は笑う。

「さ、そろそろ戻りましょ」

「だな。眠いし」

二人は部屋に戻って行った。

第22話 本当の力 2（後書き）

魔法ってチートかな？

康介、半チート疑惑。

## 第23話 特訓の日

何故一族は滅んだ……いや、滅ぼされたのだろうか。康介は思案に暮れていた。それは今まで考えて来なかったのが、不思議なくらいに大きな出来事。

その考えに至ったきっかけは四人に魔法について話した時。その時に、目を背け続けていた過去に、初めて向き合いはじめた。ひっそりと暮らしていたにも係わらず、滅ぼされなければならなかった理由。あの男達は、どういった思惑で攻め込んで来たのか。そもそも、何故一族の事が知られていたのか。全ては謎に包まれている。

「氷炎は……あいつが一族を……？」

氷炎の今までの言動。それは確実に何かを知っているようだった。何か、ではなく全てを知っているのかもしれない。だとすると、何故知っているのか。それは氷炎が関わっていたからではないか。

康介は目を瞑る。そして暗闇の中に、少女の姿が浮かんた。

『生きて』

最期にそう言った時の　護ろうとしていたのに、逆に護られてしまった、あの日の光景。

「……雪華……」

康介の表情は複雑なものだった。悲しみ、後悔、そして　怒り。その怒りはいったい、何に向けられたものなのだろう。襲ってきた

者に対してか、護れなかった不甲斐ない自分に対してか。恐らくは、その両方だ。

そんな時、氷炎の言葉が康介の脳裏をよぎる。

『 代用品 』

そして頭に、あの少女と重なるように浮かび上がる氷上の姿。

「 つ ! 違う…… ! 」

とつさに否定する。代用品なんかではない、と。

しかし、否定するも康介は気づいていた。自分が無意識のうちに、氷上にあの少女の影を見ている事に。

氷上に危機が迫った時には、それが顕著に出る。氷炎の襲撃の時だって、倒れている氷上の姿を見た瞬間に、康介は冷静さを無くした。そして氷炎の言葉に我を失い、がむしゃらに突っ込んだ。

あの時、康介には倒れている氷上が、あの少女に見えたのだ。

『 幼なじみに似てるから ? 』

氷炎の言葉に、違う、と言った。しかし、重ねて見ていたのだから否定できていない。

そして今だって 。

康介は自分が解らなくなっていた。

「……ブラックマーケット？」

氷炎の襲撃からしばらく経ったある日。学校の屋上で翔太は、これでもか、と言うくらい首を捻っていた。

何故そんな言葉を口に出しているのか。それは突如「ブラックマーケットに行こう」と折田が提案したのがきっかけだ。

「なんでまたそんな所に？　と言うか、そんなのホントにあるの？」

「それがあるんだよ！　不定期だけど廃区画でやってるらしいんだ！」

ごく当然の疑問を口にする氷上に、折田は興奮したように話す。

翔太はと言うと、ブラックマーケット自体を理解していないように、首を捻ったまま会話に耳を傾けている。

「それで、興味本意で行ってみよう　って事？」

男の子はそういうの好きそうなものね、と呆れたように手を挙げて、顔を横に振る氷上。

「ち、違うつて！　ほら、あれ……武器とか！　必要でしょ！？」

「今考えたんじゃない？　その理由」

「そんな事ないって！　氷炎の情報とかも買えるんじゃないかなって思ったんだよ！　決して非合法の武器を見て回りたいとか、マンガや小説に出てくるブラックマーケットに興味があった訳じゃないからね！　必要に迫られて思いついたんだよ！」

折田が大袈裟に身振り手振りをつけながら、長つたらしく弁明する。いや、弁明しているつもりでいる。これはもう嘘が下手とかいう問題じゃなく、本音がただ漏れになっていて、そんな折田に非難と若干の可哀相なものを見る視線が集まる。

「やめてよ！ そんな可哀相なものを見るような 翔太を見るような目で見ないで！」

「ちょ！ それどういう事お！？ 俺ってそんな目で見られてんの！？」

「そうだよ！ そして俺は翔太と同じ目で見られたくないんだ！ だから皆その目をやめて！」

「ふはっ、ふはは！ 翼は俺をバカにしたな？ だが！ 結局は同類じゃんか！」

「なにを ……！」

そんな低レベル極まりない言い争いを見ながら、氷上は空を見上げた。

「空が、青いなあ」

「彩香まで何言ってるの？」

遠い目をしている氷上に佐藤が話し掛ける。

「いや、翼君も翔太君と同類なんだって思ったら、ちょっと現実か

ら逃げたくなっただけよ」

「その気持ちは解るよ。私も認めたくない。まあ最強バカ決定戦を繰り広げる二人はほっとこうよ」

「それもそうね」

そう話すと、氷上と佐藤はため息を吐く。そして密かに氷上は、折田に対する認識を改めていた。翔太と同類なのだ、と。しかし、空が青いなあ、等とベタな台詞を口にする氷上も、それに近い存在なのではないかと佐藤は思っていた。

「それより今はブラックマーケットの話しよね。康介君はどう思う？」

急に話しが振られるが、康介は何を考え混んでいるのか、難しい表情を浮かべていて反応を見せない。心此処にあらず、といった様子だ。それを不思議に思いながら氷上が再び声を掛けると、ようやく反応を示した。

「あ、ああ……なんだ？」

「なんだ、じゃないわよ。話し聞いてた？」

「……悪い。少し考え混んでた」

バツが悪そうに視線を逸らす康介に、氷上は愚痴りながらもブラックマーケットの話を説明する。それを聞き終わると、康介は少し考え込んでから口を開いた。



「良いと思うぞ。確かにブラックマーケットはなんでも手に入るからな。ただ……あれは無法者の集まりだから、安全な場所じゃない」

「詳しいわね。ブラックマーケットの事知ってたの？」

「ああ。氷上の銃と翔太の刀、買ったのはあそこだから。随分と前の事だが。それよりも……しばらくは開かれないうけど。あの戦いで廃区画は一部崩壊して、今は軍がそこを調べてるからな」

「そつかあ……って、なんでそんな所に行った事あるのよ？」

「それは、まあ……いろいろあつてな」

歯切れ悪く答える康介だが、氷上は気にした様子もなく「そう」と答え、特に突っ込む事もしなかった。

「けど、もし近々開かれるんだったら行ってみる価値はあるよね」

今まで二人の会話を聞いていた佐藤が言った。

確かに武器が手に入る事は大きなプラスになる。それが強力な武器なら尚更に。地味に能力を鍛えて行くのはもちろん大切だが、やはり武器を持った方が手っ取り早く力を手に入れる事ができる。もっとも、武器の力を自分の力と勘違いするようではダメなのだが。そして氷炎の、トロイの情報が手に入るのも魅力的だ。あくまで手に入るかも、の領域だが。

今の康介達には、決定的に情報が不足している。氷炎とキャサリンの存在は知っているが、その他のトロイの人員は箱庭内にいるのか、等と解らないことは多い。

その事を踏まえて、康介は肯定するように頷いた。

「そうだな。確かに行く価値はある。開催日とか、少し調べてみるか」

「私はそういうのわかんないから、和田くんをお願いするね!」

「ああ。ちよつとしたツテがあるからな、調べとくよ」

そんな感じに話しが纏まると氷上が立ち上がり、気合いを入れるようにグツと腕に力を込めた。

「じゃあそれまでは特訓あるのみね!」

その言葉に、いつの間にか和解した様子の翔太と折田は元氣良く返事をする。佐藤もまた、頷いて肯定していた。

その後はそれぞれ教室に戻って何時も通りに授業を受け、放課後に校庭に再集合した。

「なあ、校庭でやるのか?」

皆が集まると、翔太がそう口にした。やるのか? とは特訓の事だ。今までは人気のない廃区画でしていた為、学生の多い校庭で特訓するのに抵抗を感じている。

そんな翔太に折田は尤もな意見を言う。

「別に校庭でもいいじゃん。学生が能力を伸ばすのは当然の事だから、なんも不思議じゃないよ?」

確かにその通り。ただ、翔太と氷上は武器を使った特訓は出来ないが、それでも能力だけを使うなら、なんら問題はない。それに納得したように翔太が頷くと、佐藤が急かすように口を開いた。

「時間が勿体ないから早く始めようよ！」

そんな佐藤にそれぞれ返事を返すと、ばらばらに広がって各自特訓を始める。

しかし康介だけは、何もせずにその様子を眺めていた。いや、何もしないのではなく何も出来ないのだろう。康介は能力ではなく魔法を使い、そして魔法の存在を知る者は学校に翔太達しかいない。それ故に何も出来ずに眺めていた。唯一出来る事と言えばアドバイスくらい、それを理解しているように康介は真剣に皆の特訓風景を見ている。

すると、そんな康介の所に折田が近づいて行く。

「ねえ、康介」

「なんだ？」

「俺の能力って転移じゃん？ それって攻撃手段が、相手の死角に転移して殴りつけるか、手に持ったナイフとかを相手に転移させるしかない浮かばないんだよね」

それは至って単純な攻撃手段だ。しかし、対個人ならば中々に強力な攻撃手段に思われる。単純故に対処し辛い、と言っのだろうか。事実、折田に勝てる生徒は少なく、今まではその事に満足していた。そう“今までは”満足していたが、氷炎にそれは通用せずにあつさりと破られてしまった。

「けど、何か違う戦い方を考えないとこれ以上強くなれない気がするんだ」

折田は模索していた。新しい戦い方を 強くなる方法を。そして助言を求めてきたのだ。康介はその意図を読み取り、目を閉じて少し考えるようにした後、口を開いた。

「折田は、手に触れていない物でも転移させれるか？」

「出来なくはないけど……少し時間が掛かっちゃうね」

「そうか。だったらまず、その時間を無くす練習だな。タイムラグなしでそれが出来るようになれば、自分に迫って来る攻撃を違う場所に転移させて防ぐ事が出来る。その攻撃が相手に当たるように転移させる事だってな」

「それは……凶悪だね」

そう言いつつも折田は笑みを浮かべた。康介が言った事が実際に出来るようになれば、それは相手に取って厄介な事この上ないだろう。それを理解したからこそその笑みだ。

そして、強くなれる可能性に喜びを顕わにするが、同時にそれが出来るようになるには地道な努力が必要だという事に気づき肩を竦める。

「触れずに転移を時間掛けずにかあ……大変そうだ」

「そうだな。とりあえず何度も繰り返しやるしかない。能力に、その使い方に慣れるのが大事だ」

「そうだね、うん！ 頑張ってみるよ！」

そう言うつと折田は元居た場所に戻って行き、練習を始める。近くにある石を触れずに転移させ、それをまた違う場所に転移させる。ただひたすらその事を繰り返していく。

その近くでは佐藤が陣を張っていた。それを一度解き、何か考えるように動きを止めて、しばらくすると張り直す。そんな動作を繰り返している。それは状況は、何かを試しているように見える。

実際、佐藤は新しい事を試していた。今までは防御や相手を閉じ込める為の陣を結界として使っていた。そして今試しているのは、それとは逆の攻撃用の陣。

しかしそれは上手くいかずに何度も張っては解いてを繰り返している。

康介はただそれを見ていた。陣には不明な事が多く、その全貌は能力者の佐藤ですら把握仕切れていない。その為に、康介は何もアドバイス出来ずに、見ているしか出来なかった。

翔太と氷上も、少し離れた場所で特訓をしていた。佐藤と同様に何らかの技を試していて、こちらは意外と上手くいっている様子だ。

陽も暮れだした頃、康介以外の四人は特訓の疲れからか地面に腰を降ろしていた。

「疲れた……」

「そりゃ三時間もぶっ通しで能力使ってりゃ疲れもするだろう」

ぐったりとして呟いた翔太に、康介が呆れたように返す。かれこれ三時間近くも能力を使い続けていたのだから、疲れるのは当然の事だ。しかしその特訓の甲斐があったのか、皆は心なしに疲れと共に満足そうな表情を浮かべている。一日で劇的に強くなれるはずは

ないのだが、それでも何か掴む物がそれぞれにあったのだろう。

「この後皆でご飯食べに行かない？」

そう佐藤が口にする。時刻は既に六時を回っていて、少し早いが空腹を感じてもおかしくない時間帯だ。そして休憩なしの特訓の疲れがその空腹感に拍車をかけていた。それは佐藤だけでなく皆も同じなようで、それぞれ同意の言葉を口に出している。しかしその話しの腰を折るような発言を康介がした。

「俺は腹減ってないからパス」

四人が特訓しているのを見ただけだった康介は、大して空腹を感じていなかった。だからと言って断らなくてもいいのだが、そこで断ってしまうのが康介だ。

「ええー、康介も行こうぜー？」

「そうよ。やっぱりこういうのは皆で行かないとね」

やはり、と言うべきかそんな康介に翔太と氷上が説得を始める。断つては説得され断つては説得され、以前にも同じような事があったもはやお約束な光景。翔太を筆頭に皆がしつこく説得を繰り返す、それは人によつては鬱陶しく感じるだろう。しかし康介は薄くだが笑みを浮かべていた。

今繰り広げられているなんて事の無い、たわいもないやり取り。康介はそのやり取りを楽しんでいるのだ。

と、その時、氷上が突拍子も無い事を言い出した。

「じゃあ皆で康介君の家に行きましょう！」

そんな突然の言葉に康介は固まった。今までのやり取りが、なぜその言葉に繋がるのかまったく意図が掴めない。そもそも氷上達は、康介の家を溜まり場か何かと勘違いしているのではないか。そう言うような疑惑の視線を康介は向ける。すると氷上はそれに気づいたのか、再び口を開いた。

「食べに行きたくないなら、康介君の家で食べればいいのよ。作ってる間にお腹も減ってくるだろうし、ね！ それならいいでしょ？」

随分と勝手極まりない言い分。当然の事ながら康介はそれに反論する。

「いや、なんでそうなるんだよ？ 普通に俺抜きで食べに行けばいいだろ」

「別にいいじゃない。ご飯は皆で食べたほうがおいしいわよ？ それに」

白い歯を見せて悪戯っぽく氷上は笑う。

「私の手料理食べてみたくない？」

その言葉に康介の心は揺れた。やはり康介も男の子、女の子の美少女の手料理はとても魅力的に感じたのだ。しかし今まで断っていた手前、ここで折れるのは何か負けた気がする。康介はそんなことを考えて、黙り込んでしまった。

いつまで経っても返事が返ってこない事に氷上は自分の胸元をギョツと押さえて俯き、上目使いで不安そうに康介を見る。

「康介君？ 食べたく、ないの……？」

「！？ いや、そんなことはない……！」

うつすらと涙を浮かべている氷上の前に、康介は断ることが出来なかった。

そして翔太達は、その二人のいい感じの様子にガッツポーズしていた。



## 第24話 穏やかな日常

康介と翔太は最寄のスーパーの店内を歩いてた。あの後五人は康介の家に移動し、氷上が料理を始めようと冷蔵庫を開けたところ、食材はあったが飲み物が何も無いことに気づいた。そこで康介と翔太に白羽の矢が立ち、二人で飲み物を買に行くことになったのだ。しかし翔太は何を買いに来たのか忘れたのか、康介に問い掛ける。

「何買えば良いんだっけ？」

飲み物を買う、そんな簡単な事も覚えておらず、首を傾げてキョロキョロと辺りを見ながら思い出そうとしている翔太。しかし思い出せないように仕舞いには腕を組んで、うんうん唸りながら考え込むように目を閉じてしまった。そんな翔太の様子に康介は呆れ果てたような溜め息を吐くと、このままじゃ買い物が終わらないと判断して教える事にした。

「なんか適当に飲み物買って来いって言われただろ？ お前は三歩歩くとそんな事も忘れるのか？」

「おお！ そういや飲み物だったな。ん？ 三歩って……俺は二ワトリかよ！？ 歴とした人間だから！」

言われて漸く思い出し、ポンスと手を叩く。ワntenポ遅れて康介の最後の言葉の意味に気づいたのか、相変わらずの大袈裟なりアクションを取りながら康介に突っ込んだ。

「声がでけえよ。誰もニワトリだなんて言っていないけどな。とんでもない被害妄想だ」

五月蠅そうに康介は顔をしかめると、やれやれと手を軽く上げながら翔太から視線を外して歩き出す。その後ろでは翔太が康介の物言いに対して騒いでいるが、当の本人はそれをサラッと流している。しばらく翔太は抗議の声を上げていたが、やがて諦めたようにトボトボと歩き出した。

飲み物のコーナーを探して歩いていると、翔太が急に面白いものでも見つけたかのように立ち止まった。

「康介康介！ これ見てみるよ！」

よほど珍しい物を見つけたのか、無邪気な笑みとキラキラ輝いた瞳を康介に向ける。その様子は新たな発見をした子供の様だ。しかし指差す先には至って普通の豚肉が陳列されてだけ。

「豚肉がどうした？」

別にスーパーなのだから豚肉が置いてある事に不自然は無い。置いてある豚肉もなんら変わった点の見受けられない普通の物。その為、康介は翔太が面白がっている理由が理解できずに首を傾げた。

「これだよ！ これ！」

翔太は意図が理解されないことにじれったそうにしながら、陳列されている豚肉の中から一つのパックを手にとって、康介の顔に押し付ける勢いで近づける。

「近づ　　！ そんな近づけられたら逆に見えないだろうが！」

「あ……悪い。けどほら、これ！」

「だからその豚肉がなんだよ？ 別に普通だろ？」

「ここ見ろ、ここ！ こかん切れ、って書いてあるだろ？ こかんって……やっぱあの股間なのかな？」

そう言っただけで翔太が指差す所には、肉の部位名が表記されていた。『小間切れ（こまぎれ）』と。それを事もあろうに、翔太は『こかんぎれ』と読んだのだ。

確かに翔太が言うような『股間切れ』なる部位なら面白くて、それは騒ぐ価値もあるだろう。しかし実際はまったくの勘違いいや、読み間違い。そんな小学生レベルの間違いを犯した翔太に、康介は言葉を失い立ち尽くした。そんな様子を不思議に思った翔太は、顔を覗き込む。

「あれ？ 何で黙ってたんの？ 股間切れだよ？ 面白くない？ 康介には解らないのかなー、この面白さが」

「……そうだな、股間切れ……面白いな」

呆れを通り越したのか、口元を引き攣らせながら康介は疲れたように適当に肯定する。その間にも翔太は一人で勘違いして『ふふふ、股間……股間ってどんな味なんだろう？ 股間、股間って』等と呟きながら肩をプルプルと震わせながら笑っている。傍から見たらかなり怪しい人に 変人に成り果てた翔太に康介は憐憫の眼差しを向けた。

しかしそんな事には気づかずに、何かに取り付かれたかの如く笑い続ける翔太。暫くその状況が続いたが、翔太は徐々に落ち着きを取り戻すとその眼差しに気がつく。

「え！？　なにその可哀想な物を見る目！？　俺なんか変なこと言  
った！？」

「いや、変なことは言っていないさ。翔太に取っては正しい事だった  
んだろう？　ただ……少しづつで良い、少しづつで良いから勉強し  
ていこうな」

心外だと言うように騒ぐ翔太。康介はいつもと違って妙に柔らか  
な態度で翔太の両肩にポンツと手を置き、諭すように話す。その態  
度と言い回しに妙に引っかけかりを覚えた翔太は、激しく突っ込む。

「えっ、なに？　どゆこと！？」

「いや、気にしないでくれ。今はとりあえず買い物を済ませよう」

はぐらかすように言うと、康介は歩き出した。読み間違いについ  
て指摘しないのは、ただ単に面白がっているのか、それとも疲れた  
てしまったのか。恐らくはその両方だろう。

翔太は訳が解らず釈然としなかったが、見失うと探すのが面倒な  
ので大人しくついて行く事にした。

結局翔太が『小間切れ』の正しい読み方を知る事は無く、買い物  
は終わって二人は帰路についた。

その帰りの道すがら、翔太が康介に話しかける。

「そういえば、最近の康介は大分丸くなったよなあ」

「なんだ藪から棒に」

何の脈絡もなく突然放たれた言葉に康介は首を傾げる。

「性格だよ。前はもつとツンケンしてただろ？　けど最近は少し穏やか？　　ってか、丸くなったよ」

「そう、なのか……？」

「そうだよ。今がその証拠だ。前はいくら誘っても断られて、どんなに説得しても康介が折れることはなかったじゃん？　それなのに今はこうして、一緒に買い物までしてる。口数も多くなったし。な？　康介は変わったよ」

翔太は、うんうんと頷きながらそう話す。確かにそうなのかもしれない。いや、事実そうなのだろう。だがそれは当然と言えば当然の事。以前とは康介の考え方が変わってきているのだから。以前は、ひたすらに他人を拒んで生活していた。しかし今では、相手は限定しているが会話を楽しいと感じるようになっていた。康介はそう思い当たり、肯定するように呟いた。

「……言われてみれば、そう……なのかもな」

「そついや、変わり始めたのは彩香が来てからだだよな」

少し寂しそうな、それでもどこか嬉しそうな表情を浮かべる翔太。その言葉は、言い換えれば『氷上が康介を変えた』だろう。事実、翔太はそのニュアンスも込めている。康介が変わるのは本来喜ばしい事で、翔太はずっとその為に康介に話し掛けたりと努力してきた。しかし実際に康介を変えたのは氷上で、そう思うと翔太は複雑な気持ちになっている。

だが康介の返事は、そんな心境とは裏腹なものだった。

「その時期くらいからいろいろあつたし、そりや変わりもするだろ  
うさ。と言うか、なんだその珍妙な面は」

「あー、一緒に戦って芽生えた仲間意識ってやつか。ってか珍妙つ  
てなんだよ!？」

「いや、何時もの能天気な面じゃなかったから。考え事か？」

康介は翔太の心境は解らずとも、表情の変化には気がついていた。  
その事が気になっての問い掛け。どこか心配そうにしている康介に  
翔太は意外そうにポカンと口を開ける。普段もなんだかんだ言つて  
面倒見が良い方なのだが、それは表面上だけであつて今のように突  
つ込んだ事を聞く事は非常に稀だ。その事が嬉しくなつた翔太は満  
面の笑みを浮かべる。

「康介が俺の事気にするなんて……。ちょっと嬉しいぜ!」

「……社交辞令みたいなもんだ」

「喜んで損した! 絶望した! いや、待てよ……そうか、照れて  
るのか!? いやー素直じゃないなあ康介君!」

翔太の反応に康介は気恥ずかしさを感じ、それを隠すように素っ  
気なく返す。しかし妙なところで鋭さを発揮する翔太は直ぐにその  
心境に気がつき、バシバシと康介の背中を叩きながらニヤニヤと口  
元を緩ませた。

「離れる暑苦しい」

そう言つて康介は手を鬱陶しそうに払い除ける。実際はそれほど

鬱陶しさは感じていないのだが、冷たくあしらうのは所謂照れ隠しだろう。

「ひでえ！？ そんな照れなくても良いだろ？ この照れ屋さんめ！ ツンデレ！」

「……ああ、いい天気だ。雷でも落ちて来そうじゃないか？ なあ翔太」

ツンデレ その言葉に眉を吊り上げつつも珍しく良い笑顔を浮かべる康介。だがそれが逆に恐怖心を煽り、物騒な言葉もあって更に怖く感じる。否定せずに高圧的な態度を取るあたり翔太の言葉が凶星だからなのだろうが、ツンデレもここまでいくと捻くれているとしか言いようが無い。そんな康介に翔太は怯えた表情を見せ、さっと距離を取る。

「ひい！？ いい天気で雷は落ちないから！ 雲一つないから！ だから電撃やめて！」

「青天の霹靂って言葉があるだろ？ 突発的な事故みたいなもんだ。人の事からかったんだから甘んじて受けろ」

「謝るから！ 謝るからやめて！ 悪かった！」

地面に額を擦り付ける勢いで頭を下げる翔太。放電していた康介はそれで気が晴れたのか、軽く鼻を鳴らすとだいぶ脱線した話を元に戻そうとする。

「で、何考えてたんだ？」

「ひ・み・つ！」

言いたくないのか、翔太はふざけたように人差し指を唇に当ててウインクしながら答える。彼としては自分の考えていた女々しい事を知られるのは恥ずかしいのだろう。だからと言って、男がやってモ気持ちが悪いだけの動作を平然とやってのける翔太は流石と言える。その仕草は人の事を小バカにしていると取れるのだが、そんな様子からどうあっても話し逸らそうとしているのを察したように康介は小さくため息を吐いた。

「だってほら、男は秘密があつたほうが格好良いだろ？」

「そう言うのは女相手にやれよ。男の俺相手にかっこつけてどうする………まさかお前、そっち系か？」

急に距離を取り、康介は翔太に汚れ物を見るような視線を向ける。突然のその行動に翔太は訳が解らず、ただ首を傾げるしかなかった。

「へ？ 何が？」

「男相手にかっこつけるなんて……男色、なんだろ……？ やめろ、非生産的だ。そんなんじゃ少子化は改善されない」

「はあ！？ ちげえよ！ そんな趣味ねえから！」

「趣味嗜好は人それぞれだが……流石にそれはどうかと思うぞ？」

「話し聞けよ！ それに俺は女の子が大好きだ！」

康介は本気で言っていた訳ではないのだが、「冗談に聞こえなかつ



た翔太は大声で豪語するのはどうかと思う事を胸を張って翔太は言い放った。

女の子が大好き それは男なら至極当然の事。しかし翔太のチャラチャラとした出で立ちが災いしてか、それは女好きというニュアンスで聞こえてしまう。

その所為か、近くを歩いてる人達から侮蔑の視線が集まっていた。

「翔太……、黙った方が良いみたいだぞ？ 辺りの人達がお前の事をゴミを見るような目でみてる」

かく言う康介もそんな目をしている。原因の半分くらいは彼の所為でもあるのだが、無関係と言わんばかりの反応を見せている。

「誰の所為だよ！？ 畜生……なんで俺ばつかこんな目に。俺のハートは……ガラスで出来てるんだぜ……？」

康介からも辺りの人からも冷たい視線を向けられている状況、それは四面楚歌と言える。その状況がかなり堪えたのか、翔太はガツクリとうな垂れてどこか哀愁を漂わせていた。いいさいいさ、どうせ俺なんか……と言う声が聞こえてきそうなその状況は非常にシュールだ。仕舞いにはしゃがんでのの字を書きだしてしまう。どんよりとした空気を纏う翔太に流石の康介も焦りを覚えたのか、励ますように声を掛ける。

「元気出せって、な？ こんな日もあるさ。それにこんな状況も翔太らしくて良いんじゃないか？」

膝を抱えている翔太の肩にやさしく手を乗せて励ます。いや、励ましてるつもりで言う。こんな状況が翔太らしい、とは果たして励ましになっているのだろうか？ むしろ追い討ちを掛けているよう

だ。康介は励ます事に慣れていない為、仕方が無いといえばそこま  
でなのだが……結果的には地雷を踏んでしまい、翔太は更に纏う空  
気を暗くしてしまう。

「人に蔑まれてるこの状況が俺らしいのか……」

「え、あ……いや……ほら。……家に帰れば氷上の飯が待ってるぞ  
？」

ボソツと呟いた翔太の言葉に、康介は失敗に気づいて口ごもり、  
話題を逸らそうとする。しかしそんな無理やりな話題変換に翔太は  
乗らずに、依然として暗いままだ。良く見ると肩が小刻みに震えて  
いる。まさか泣いているのか？ そう思い、徐々にあたふたし始め  
る康介。せわしなく手を動かし、目を泳がせている状況は非常に康  
介らしくなかった。と、そこに突然笑い声が響く。

「ぶっ……はははは！ 引っかつた引っかつた！」

翔太がスツと立ち上がり、腹を抱えて笑い出す。その表情は悪戯  
に成功した子供のようにキラキラとしている。突然のその事に康介  
は間の抜けた表情を浮かべ、それが面白いのか翔太は更に笑い続け  
る。

少しの間その状況が続いたが、康介は騙された事に気がつくとい  
然として腹を抱えている翔太の頭を小気味良い音を響かせながら引  
っ叩いた。

「あてっ！ 叩くこと無いじゃんか！ まあ珍しいもの見たから  
良いけどな」

叩かれた頭を擦りながらもニカッと翔太は笑って見せる。叩かれ

つつも笑っているのは彼がマゾだからではなく、慌てふためく非常に珍しい康介が見れたからだ。その新鮮さと、普段の落ち着いた雰囲気とのギャップがよほど良かったのだろう。

一方康介は、してやられたという気持ちからか目を細めて顔を強張らせている。だが、直ぐに表情を緩めると小さくため息を吐いた。

「つたく、ガキかよ」

そうは言うものの嫌悪感は見られず、むしろ僅かながら口元が緩んでいる。呆れとも取れるその仕草だが、実際はこのやり取りをなんとなく楽しいと感じていた。

「ガキで結構！ 人生楽しんだ者勝ちですよ、康介君！」

腰に手をあて、グツと胸を張って豪語する翔太。いつもバカな事を繰り返し、その度に無邪気に笑っている翔太が言うことやたとえ説得力がある為に康介も思わず納得してしまった。それを感じ取ったのか、うんうんと満足そうに、なぜか勝ち誇るように翔太は頷く。康介が納得したのが単純に嬉しかったのだ。と言っても勢いで押しただけなのだが、そんな事は翔太には関係なかった。

「……お前といると退屈しないな」

康介はなぜか勝ち誇っている翔太を苦笑いを浮かべながら見てみると、自然と声が零れた。それは無意識のうちに零れた言葉だけあって康介の本音だ。うっかり口にしてしまった事に慌てて口を噤むがその言葉はしっかりと翔太に届いていたようで、目を輝かせながら身をのりだして康介に近づいた。

「えっ！？ なになに？ ワンモア！ ワンモア！」

「……聞こえてたんだろ？ 白々しいな」

聞こえていたにも拘らず再度聞き返してくる翔太に、康介は荒っぽい口調で言い放ち顔を背ける。顔を背けたのは気恥ずかしさからだろう。いつもなら、なんでもない等と適当にあしらうのだが、なぜか誤魔化す気にはならなかった。そんな自分に違和感を覚えたが、その思考は翔太の言葉によって遮られる。

「あれ？ 誤魔化さない……？ はっはーん、漸く心を開いてくれたんだね！ 康介！」

満面の笑みで強引に肩を組み顔を覗き込む翔太。茶化しているような言葉と行動だが、そこからはまた一步康介に近づけた事に対する嬉しさが溢れていた。と言っても別に彼は同姓嗜好な訳ではなく、ただ純粹に嬉しさを感じている。

康介はそんな翔太の様子で恥ずかしさが倍増したのか、組まれた肩を無理やり振りほどいて背を背ける。

「うつせえ！ やっぱお前はホモか！？」

そう言い放つと早足で進んでいく。康介の頭は恥ずかしさでいっぱい、同時に誤魔化さなかった事を激しく後悔した。

「だから違うつて！ なんとというツンデレ！」

翔太が後ろでそんな事を言っているが、康介は聞こえていないかのように更に足を速める。当然二人の距離は離れ、翔太は慌てて康介を追っていく。

二人が家に着くと既に料理が並んで準備が整っていた。買い物中にいろいろと話し込んでいた為、結構な時間が経っており、皆は待ちくたびれたという顔をしている。翔太と康介は背中で文句を受けつつ、とりあえず冷蔵庫に飲み物をしまうと席に着く。

「遅いよ。どんだけ時間掛かってんのさ？」

「わりいわりい。いろいろあつてさ」

まるで女の子のように頬を膨らませて文句を言う折田。翔太はそれに頭を軽く掻きながら謝るが、大して悪びれるように見えないのは気のせいではないだろう。先ほどの康介との会話からずっとご機嫌な様子の彼には文句などあまり聞こえていない。

「それより早く食べようよ」

夕食を前に待ちきれない様子の佐藤が折田と翔太を制するように会話に割って入った。その手には既に箸が握られており、はやる気持ちが見て取れる。氷上はその言葉に頷くと康介と翔太に箸を渡してご飯をよそり始めた。その傍ら、翔太が康介に小声で話し掛ける。

「なあ康介、これで実は料理が下手でしたって感じのベタな展開だったらどうする？」

翔太の言葉を受けて康介は多少心配になり、眉を顰めた。とりあえずテーブルの上を見回してみるとそこには至って普通の料理が並んでおり、それなりに美味しそうに見える。これなら、と安心したように康介は返事をする。

「大丈夫だろ」

「だよなー」

翔太も本気で言っていた訳ではなかったようで、ニヘラと表情を緩ませる。そんな会話をしている間に氷上はご飯をよそり終えていて、食べて食べてと言うように康介の前に茶碗を持っていく。康介がそれを受け取ると氷上は笑顔になり、食べるよう促した。自分が作った自信作を早く食べてもらいたいと言うのが見て取れる。皆もそれに伴い茶碗を取った。

「さ、どうぞ」

氷上が促すと何故か康介に視線が集まる。最初に食べると言う事なのだろう。なんで俺？ と思いつつもそれを感じとった康介はおかずの一つを取り、口の中に放り込んだ。

「どう？ 結構良く出来たと思ったんだけど……？」

どこか不安そうな表情で康介を覗き込んで感想を求める氷上。その事に康介は 少し困った。不味くはない。かと言って美味しい訳でもない。えらく中途半端な味なのだ。言うなれば“食べれくはないが微妙”と言った感じだ。さて、なんて返そうか？ 正直に言うのか、少し上方修正して言うのか。康介は悩んだ挙句取った選択は 。

「あ……ああ。美味しいよ」

「よかったあ」

不安そうな氷上に正直な感想は言えず、出来るだけ考えを顔に出

さないようにしてそう答えた。しかしそんな事は知らない氷上は、嬉しそうに笑顔になる。頑張った甲斐がある、と満足しているのだろう。その後、皆も食べ始める。すると　それぞれなんとも言えない表情を浮かべ、氷上だけは終始ニコニコと笑顔を作っていた。

## 第25話 忍び寄る影 1

あの襲撃以来、トロイは不気味なまでに沈黙を守り続けている。その御蔭で康介達は安穏な毎日を送っているのだが、動きを見せないトロイに逆に言いようのない不安を覚え始めていた。授業の後、休日はその不安を拭い去るように特訓に打ち込む毎日が続く。そんな今日は日曜日で休日なのだが、康介だけは特訓に参加せずに街の外れを歩いていた。

「確か、此処だったな」

立ち止まり見上げる先には、ひっそりと佇む一軒家。康介は玄関まで進みインターホンをならそうとするが、その表情は心なしか硬く、家主に会うのを躊躇っているようにも見える。暫く顔を上げたり下げたりを繰り返して不審者を演じていると、不意にドアが開いた。家主とおぼき人物がドアの隙間からひょっこりと顔を出し、来客者を確認する。そして康介の顔を見るなりドアを勢い良く開け放った。

「和田っち、久しぶりー！」

とんでもないハイテンションで両手を広げながら康介に飛び付く家主。康介は若干引き気味になりつつもダイブしてくる相手を軽く躲して視線を交わした。

康介の正面に立っているのは二十代半ば位に見える女性。久しぶり、と挨拶を交わす辺り旧知の仲なのだろう。

「……相変わらずですね、皆川さん」



あまりのハイテンションについていけない康介は、小さく溜め息を吐いた。このテンションが苦手で会うのを躊躇っていたのだ。相手の名前は皆川みながわしずく。以前康介が言っていたブラックマーケットへの“ツテ”とは彼女の事だ。

「和田っちも相変わらず暗いねー。まあとりあえず中入ってよ！来るの待ってたんだから！」

康介の溜め息など気にしないかのように対照的なテンションを保ちながら中に入るよう促す皆川。久しぶりに会えたのが嬉しいのか、その表情はフニャッと緩んでいる。康介は促されるまま中に入ろうとするが、皆川の言葉に少し引つかかる事があり足を止める。康介は事前連絡もなしに家を訪れた為、当然の事ながら会う約束など取り付けていない。にも拘らず皆川が言い放った“待ってたんだから”、その言葉が疑問だった。立ち止まって動かない康介を皆川が不思議そうに覗き込む。

「どしたのー？ 早く入りなよ？」

「待っていたって何ですか？」

疑問に思った事をそのまま口にする康介。彼女の事を不審に思っているわけではないのだが、疑問は疑問。なんとなく聞かないと気が済まなかった。そんな心情を察したのか皆川が素直に問いに答える。

「和田っち最近いろいろと大変だったみたいじゃん？ だからそろそろ来るかなーってね。情報は私の商品だから常に仕入れてるって訳よ！」

「あー、納得です。皆川さんは情報屋ですからね」

「そゆことー。だから最近和田っちの周りで起きてることもしっかり耳に入ってるよー！」

自慢げにエヘンと胸を張る皆川。こんな年齢の割りに子供っぽくてテンションの高い人間に果たして情報屋が勤まるのかは疑問だが、康介の事情を知っている事や“そろそろ来る”と言う予測をしつかり的中させるあたり優秀なのだろう。

続きは家の中で、と言うようにルンルンとスキップしながら進んでいく皆川に、康介は後を追って家の中に入ってしまった。

「コーヒーで良い？」

中に入ると皆川がそう言ってコーヒーを煎れだす……煎れながら康介に聞いた。聞いたものの返事を聞く気は全くないようだ。じゃあ聞くなよ、と思いつつも康介はコーヒーが好きなのでとりあえず頷いておく。

「そう言えば中学の頃からコーヒー好きだったよね。マせてんなー、最近の若者はマせてんなー！ お姉さんには最近の子の味覚が理解できないよー！」

キッチンからコーヒー片手に戻ってきた皆川は、からかうように言いながら康介の正面に座る。康介はと言えば、からかわれた事に表情を歪めながら溜め息を吐いていた。このハイテンションには何を言っても無駄、そう思っている康介は何も反論せずに本題に入ろうとする。

「俺の今の状況を知ってるんですよね？」

「いきなり本題かー、せっかちなあ。氷炎に狙われてるんでしょ？ もー和田っち達が廃区画で派手にドンパチするから、ほとぼりが冷めるまでマーケット開けないじゃんよー」

商売あがったりだ、と言うように頬を膨らませる皆川。本当に子供のような仕草だが、しっかりと状況を把握している事に康介は安堵する。そして康介が話しを次に進めようと口を開こうとしたとき、それよりも早く皆川が話し出した。

「で、情報が欲しいんでしょ？」

トロイについての」

先ほどとは打って変わって鋭い、見透かすような眼差し。しかし康介はその変わりようにも考えを先読みされた事にも大して驚きはなかった。彼女は仮にも政府が管理する箱庭の影に生きる人間。この位は当然なのだ。と言っても直ぐにフニャとした顔に戻ってしまったが。

「そう言うことです。調べて欲しいんですけど……？」

「んー、良いよ！ 他でもない和田っちの頼みだしね！ と言うか既に調べ出してるんだけど、なかなか尻尾が掴めなくてねー」

「まあ相手が相手ですからね。時間掛かるのはしょうがないですよ」

康介はそう言いながら苦笑いしつつも、皆川の仕事の速さに感心していた。頼んでもいなかったのに康介が来る事を見越しての行動力に。一方皆川は人差し指を眉間に当てて、なかなか集まらない情報に困ったようにしている。相手がテロ組織というだけあって探るのには危険が伴うため、大っぴらに表立って調べられないのだ。

「んー、まあ近いうちに報告出来るように努力はするよ！ 私もトロイが何をしたいのか気になるしね。とりあえず和田っちの力“魔法”の力に関係してるのは確かなんだろうけどねー」

「……そう、ですね……」

皆川の言葉に歯切れ悪く返す康介。それは自分が皆を巻き込んでいるという負い目からなのだろう。俯いてしまったしまった康介に皆川は慰めるように声を掛ける。

「ほーら、何でも一人で抱え込まない！ お姉さんは自分を責める康介君なんか見たくないんだよー？ って言ってもそれは無理な話かな。和田っちは 優しい子だから、自分以外の誰かが傷つくのは見たくないんだよね？」

まるで母親が我が子を見るような慈愛の眼差しを向ける。皆川は心配していた。康介が強い事は知っている。しかしそれは“力”だけの話であって、心の事は別問題。康介は優しい 優しいすぎる。それ故に一人で問題を抱え込んでしまいがちになり、心は不安定で…… 酷く脆いのだ。ただでさえ悲惨な過去を持っているのに、加えて今の状況。重圧に押しつぶされてしまうのではないかと危惧していた。康介はそんな皆川の心情を感じ取ったのか、薄く笑みを浮かべながら顔を上げた。

「大丈夫ですよ。前ほど一人で抱え込んでませんから」

「ん、そっか。そう言えば和田っちにも友達が出来たみたいだしね。味方は増やしといった方がいいよー？ もちろんお姉さんも和田っちの味方だからね！」

康介の目の前にビシッと指を立てて“味方”の部分を強調する皆川。良くも悪くも皆川は康介の味方であり、最も康介を理解しているのだ。それにしても友達が出来た事まで把握しているとは……凄まじい情報収集能力である。と言っても皆川が康介を気に掛けていたから知っていたのだが。そんな心遣いに康介は純粹に感謝したが。

「友達の事、知ってたんですね……ストーカーですか？」

感謝はしても口には出さない。康介はとことん天邪鬼だった。皆川はそんな康介の性格を知っている為、特に嫌な顔はしなかった。それどころか康介の言葉にノリ出した。

「ひつどーい！ そんな事言うなんて……お姉さんは悲しいよ！」

よよよ、と膝を折り、手で顔を隠しながら泣き崩れた。振りをした。芝居がかったわざとらしい演技に康介が引つかかる訳もなく、その場に寒々しい空気が流れる。康介は何も言わずに、崩れ落ちている皆川をただ眺めているだけだった。

「あれれ？ あれれれえー？ なんか反応してくれないとお姉さんホントに泣いちゃうよー？」

「いい歳して何言ってますか」

無反応に耐え切れなくなり、足にしがみついていた皆川に康介は軽く溜め息を吐きながら冷やかな視線と言葉をプレゼントした。何気なく言った一言だが、皆川は“いい歳”の部分に激しく反応を示す。

「いい歳ってどういう事！？ 私はまだまだ若いんだからね！」

暗に“おばさん”と言われたように感じたのか、少し怒った口調で言いながら手元にあつたクッションを康介に投げつけた。当然そんなものに当たる康介ではなく、ひょいっと簡単に避けてしまい、皆川は恨めしそうな視線を送り唸っている。その子供っぽい様子に康介は若干呆れたようにしている。

「若いのは解ってますよ。若いのは」

「解ればよし！ けどなんか引つかかる言い回しだなあ……んー、なんだろ？」

子供っぽいを若いに言い換えて皮肉交じりに言つた康介。なんとなくそれを感じ取つた皆川は首を傾げている。真面目な話をしているときは読心術ばりな切れ者だが、そうでないときはどこか抜けているようだ。

「他意はないですよ」

「そつかそつかー。なら良かった」

康介が言つとそれを簡単に信じる皆川。切れ者だと解つていても、こんなんで裏の世界で生きていけるのかどうか心配になってしまう。だが、今まで生きてこれた事から、仕事るときはしっかりとしているのだろう。康介は無用な心配は止めてそのまましばらく雑談を交わし、話しが一段落着いたときにスツと立ち上がった。

「およ？ もう帰るの？」

立ち上がった康介に、残念そうに皆川は問いかける。久しぶりに会ったんだからもうちょっとゆっくりしきなよ、とでも言いたげだ。

「もうつて……結構な時間経ってますよ？」

壁に掛かっている時計に視線を向けながら答える康介。既に訪れてから三時間ほど経過している。もちろん康介にも久しぶりなのでまだ話していたいという気持ちはあるが、それ以上に皆川のテンションに疲れてしまっていた。皆川は渋々納得して見送るために立ち上がる。

「まあ近々また会えるだろうから今日は諦めるかなあ。調べ終わったら和田つちの家に直接届けに行くからねー！」

「じゃあ情報料はそのときに」

「りょーかい！ ふんだくるから覚悟しててねー！」

皆川はとても良い笑顔で親指をグツと立てながらめつい発言をする。普通なら知り合いだから安くするのではなからうか。冗談ならそれでいいのだが正直判断がつかず、むしろ本当にやりかねないそんな事から康介は引き攣った笑みを浮かべている。そんなに大金は用意出来る訳がないのだ。冗談である事を祈りつつ康介は此処を後にし、皆川はその後ろ姿を手を大きく振りながら見送っていた。

翌日、康介は授業中にも拘らず窓の外をボーッと眺めていた。ノートは開かれているが何も書き込まれておらず、話を聞いていない事が見て取れる。かと言って何か考え事をしている訳でもなく、退屈な授業をボーッと過ごす事で消化していた。その少し離れた席

では氷上がいそいそとペンを動かしている。しかし板書しているではなく千切ったノートに何かを書き込んでいて、書き終わるとそれを丸めて 投げた。紙は綺麗な放物線を描き康介の頭にぶつかる。康介が不審に思いつつも紙を広げると、こう書かれていた。

『どう？ 悟りは開けた？』

氷上は康介が読んだのを確認すると、悪戯っ子のような笑みを浮かべて手を小さく振っている。あまりにも長い間ボーっとしていた康介をからかう為にメモを飛ばしたのだろう。あるいはボーっとしているのが、無我の境地に至ろうとしているように見えたのか……何にせよ、康介はそのメモを 握りつぶした。悟りなんて開けるわけがない、そう言いたげな顔をしながらくしゃくしゃになったメモを投げ捨てる。すると再び飛んでくるメモ。

『ちよつと宙に浮いてみてよ』

いい加減にして欲しい。そんな事出来るわけない。康介は間違いないと思うただろう。その証拠と言う訳でもないが、眉間にシワを寄せている。氷上はそんな康介の反応を見ながらケラケラと笑って楽しんでいた。彼女なりの暇の潰し方なのだろう。

暇潰しに使われて居た堪れなくなった康介は、居眠りしている翔太に八つ当たりのようにメモを投げつけた。それは寸分違わずアホ面で涎を垂らしている顔面に直撃し、翔太は眠りを妨げられる結果となった。翔太は何処からともなくいきなり飛んできたメモに怪訝な表情を浮かべるが、直ぐに嬉々とした表情に変わってメモを開こうとする。誰が投げたか知らない翔太は、大方ラブレターと勘違いでもしたのだろう。しかしメモを開くとそこには



『ちよつと宙に浮いてみてよ』

「はあ！？　どんな無茶振りだよ！？」

全く持つて訳が解らない。翔太は予想の遙か斜め上に行く内容に思わず声を上げてしまった。静かだった教室に響き渡る翔太の声。当然視線は集中し、教師からは叱咤される。

「尾崎！　五月蠅いぞ！　騒ぐなら外に出ろ！」

「すみません……」

謝りながら縮こまる翔太。皆からはクスクスと笑われていた。しかし此処からが翔太の凄いところ。基本的に笑いを取るのが大好きで、今は翔太が原因で皆が笑っている状況。必然的に翔太の気分は鰻登りになっていく。本来“笑わせる”と“笑われる”には大きな違いがあるのだが、その事に気づく翔太ではない。もしその違いに気がついたのなら、それはもはや翔太ではなくドツペルゲンガーだろう。

そして翔太はメモと睨めっこを始めた。もしかしくなくても、気分が良くなつた翔太はメモに書いてある内容を行動に移すか悩んでいるのだ。元は氷上が康介をからかう為に書いたメモなのだが、翔太はそれを知らずに自分に送られた物だと思い込んでいる。そしてしばらくすると決心したように顔を上げた。

「まさか……？」

翔太を観察していた氷上が小さく呟く。そんな　出来るはずがない、そう思いながら決心したような翔太に驚愕をあらわにし、固

唾を呑んで見守る。

「おいおい……マジかよ……」

康介も氷上と同様に呟いていた。悟りを開いて浮かぶなんて出来るわけない、なのに翔太<sup>バカ</sup>ならなにかやってくれる気がする。そんな期待感が渦巻いている。

そして翔太は二人が見守る中、その期待に答えるかのように

浮いた。いや、椅子ごと飛び上がったのだ。タネは簡単で、自分の下から突風を吹かせて浮き上がっただけ。ただ、勢いが強すぎたのか一瞬のうちに天井まで上がり、顔が横に潰れるのではないかと思うくらい脳天を強打した。

予想外極まりない出来事に康介と氷上は柄にもなく吹き出してしまった。他の生徒はいきなりの事にしばらくポカンとしていたが、床の上で頭を抑えながらの打ち回っている翔太を見ているうちに徐々に笑いの渦に吞まれていく。そして学校中に教師の怒声が響いたとか響かなかったとか……。

その頃、街外れの廃屋で話しこんでいる二人組みがいた。そう、氷炎とキャサリンだ。

「傷は癒えたの？」

久しぶりに顔を合わせたのか、心配そうにキャサリンが声を掛ける。傷とは康介に負わされた物の事だろう。その問いに氷炎は、治った事をアピールするように手を握って開いてを繰り返す。

「大丈夫大丈夫、もともとそんなに酷い怪我じゃなかったからね」

「そう、でもまさか彼方が負けるなんて予想外だったわ。それ程の“力”だったの？」

「どうだかね。魔法を使えるって解っていても実際に見ると驚きで動きが鈍っちゃったからね、実力の全ては見れていないよ」

「けど見るのは初めてじゃないんでしょ？ まあ予想以上の実力を持っていたのは誤算よね」

大きく溜め息を吐くキャサリン。まさか氷炎が負けるとは思ってもいなかったのだろう。それほどまでに氷炎の力を信賴していた。しかし全力でないとはいえ、その氷炎を打ち破った康介は誤算以外の何者でもない。しかしそんなキャサリンとは裏腹に氷炎は、大した問題じゃないと言うような表情を浮かべている。真っ向から戦って従える自信があるのか、それとも何か策があるのか……。

「面子も集まりつつある。準備が整うまで後少し。もうすぐ悲願が叶う」

氷炎はそう言うと不敵な笑みを浮かべていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7212/>

---

その先にあるもの

2010年10月9日04時19分発行